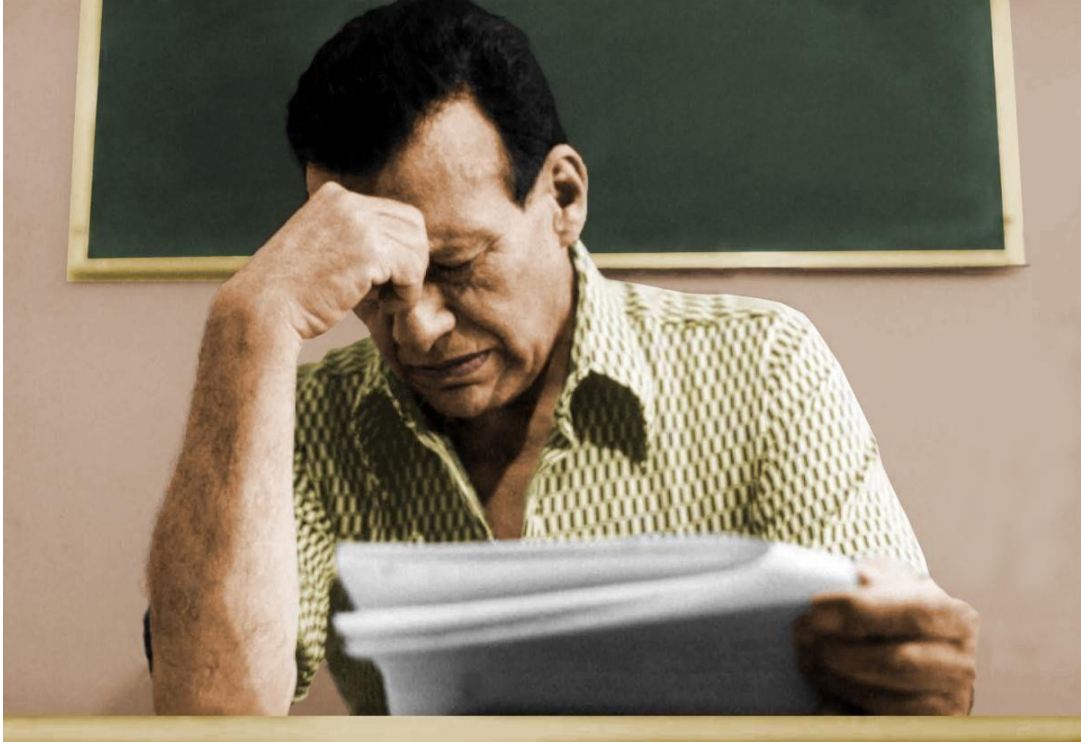


弁証法の革命
THE REVOLUTION OF THE DIALECTIC



この『弁証法の革命』のなかで、わたしは意識覚醒の達成に必要な科学を読者に与えた。

新聞を読むように本書を読むという間違いを犯してはならない。何年も本書を深く研究しなさい。体験し、実践しなさい。

サマエル・アウン・ベオール

目次	
プロローグ	
忠告	
弁証法の革命	
教え	

第 1 章p9

我を解体するための教授法	p9
正反対の物事どうしの闘い	p11
KーH	p15
抵抗	p16
実践（プラクティス）	p17
必要条件	p18
敗北主義	p19
心理占星学	p21
エゴの修辞（口のうまさ）	p22
意識の永続的中心	p24
超個性	p25
I. 統合的豊かさ	p26
II. 自己反省	p28
III. 心理分析	p31
IV. マインド力学	p33
V. 「存在（ビーイング）」の簡潔な行い	p36
自己愛	p37
アヒンサー、非暴力	p40
集団行動	p42
言葉のゆがみ	p43
聴き方を知る	p44
用語の正確さ	p44
心理的ロボット	p46
パーソナリティー	p47
カテクシス	p49
神秘的死	p50
自由なカテクシスの溶解	p53
怠慢	p53
取引	p54
個人特有の心理的特徴	p54
ワークの方法論	p60
気晴らしの詭弁	p62
エゴのべてん	p64
努力	p67
心理的奴隷	p70
カルキアン・パーソナリティー	p73
強情	p82
エゴの状態	p85

プルータイムまたは安息療法	p86
エゴのなきがら	p88
サイキス創造	p89
印象の変換	p92
マインドの胃	p106
日々の印象の変換法	p108
第2章	p109
像、価値、アイデンティティー	p109
自己批判	p110
自己イメージ	p111
自己崇拜	p111
自己評価	p112
自己概念	p113
第3章	p115
モーチャオ	p115
分散したマインドと統合されたマインド	p116
瞑想の革命	p117
機械的連想	p120
マインドの支配	p122
試行主義	p134
第4章	p136
インテレクト	p136
知性	p137
覚醒した知性	p137
時間	p138
第5章	p138
理解	p138
想像力	p140
インスピレーション	p140
直観	p143
人間の問題	p143
第6章	p146
悪魔との賭	p146
性の超力学	p147
水銀	p148

第7章.....p151

基礎教育	p151
出版物	p152
テレビ	p152
超現代音楽	p153
ソリオーネンシウス	p153
宗教原理	p156
推理の第四単位	p160
芸術	p161
唯物論的科学	p165

第8章.....p173

死者のパーソナリティーと量子論	p173
ガルシア・ペニャのケース	p174
再合体	p175
超規律	p175
明白な自省	p175

第9章.....p176

神秘	p176
アバターラ	p177
個人と社会	p178
意識へ	p180
悟り	p180

プロローグ

われら白友愛結社のマスターたち、われら「保護の城壁」を築く、自意識をもつメンバーたちは、世界の兄弟姉妹の全員に本書を実践し、深く瞑想するよう勧める。¹

すべての父権を有する父から、またパラマールタサチャ（「絶対」の住人）の不可視世界の超意識のヒエラルキーの父から授かったパワーをもつわれらは、現代の世界に今この瞬間、この歴史的状況にある再生のすべてのムーブメントに誘い、そして本書を冷静に熟考し、それを実践するよう勧める。

¹ *保護の城壁（muralla guardiana）…慈悲のマスターたち、すなわち人類への愛ゆえにいつさいの幸福を放棄した者たちがつくった。ヨギ、聖人、超人、特に化身仏（ニルマナカーヤ）の長い間の努力の集積によって人類のまわりには、保護の城壁がめぐらされた。この城壁が悪魔たちより人類を保護している。

本書を書いたマスター・サマエルは、すべての試練をとまなう自己完成の途上であり、このことは内的世界でヒエラルキーの前では試練に会うことを意味する。

本書の基盤は昔の密儀スクールであり、またマスターがそのすべての著作（主として『完全なる結婚』『クリスマス・メッセージ』『心理革命』『大いなる反乱』『黄金華の神秘』『三つの山』およびマスターの心理学的著作であるこの『弁証法の革命』その他もろもろの著作、主に『ベールをぬいだピスティス・ソフィア』）のなかで述べてきた自らの体験した内心のワークである。

あらゆる偏見や先入観を捨てて、本書を深く静かに熟考しなさい。読者の本質的存在（ビーイング）の行い、個人的正覚、内心の直観、個人的な心理的特徴にしたがって本書を生きようと努力しなさい。あらゆる完全無欠の基礎である天の母の聖なる力によって個人的な欠点とエゴが消滅していくにつれ、読者自身の本質的存在がダイナミックに変化していくのを観察しなさい。

心理学の宝石のこれらすべてのカット面を実行、実践しないなら、本書を読んでも何の役にも立たないだろう。知ることができるために、まず行わねばならない。

手に剣をとり、もう一方の手に天秤をもち、宝石のひとつひとつのカット面の研究と実践のバランスをとりなさい。剣は読者自身の脊髄、天秤は第三ロゴスの性エネルギーである。天秤の指針は、行動へと駆り立てる、主権を有する至高の意志である。

実行、瞑想、反省、忍耐、分別、謙虚、智恵—それらは内心の自己実現を達成するために、本質的存在の意識に刻む美德である。万民と万物の利益のために、あらゆる父権を有する父の意志によって。永遠不変の父、すべての愛のなかの絶対的愛、創造主、可視世界と不可視世界に存在し、有るものすべてを湧き出す、澄んだ透明な聖泉。

読者がその戒めを実行に移し、読者の真の本質的存在が不可視の世界の密儀の寺院を訪れるように、今その澄んだ清水を飲みなさい。そうあるように。

白友愛結社の寺院のマスターたち

忠告

われわれの立場は絶対的に自立している。『弁証法の革命』は知性以外の武器は持たず、智恵以外のシステムは持たない。

新たな文化は総括的で、『弁証法の革命』を基礎とするであろう。本書はとりわけ実践的で、本質的に倫理的で、また深く弁証法的、哲学的、科学的である。

人々が本書をあざ笑うなら、われわれを批判するなら、それが科学とわれわれにとってどうだということか。なぜなら自分の知らないことをあざ笑う者は、愚か者になりつつあるから。

今これから本書は恐ろしいライオンのように戦場に行く。厳粛な世論の前で裏切り者たちの正体をあばき、暴君たちを当惑させるために。

弁証法の革命

一神教がもととなって、つねに神人同形説－偶像崇拜－が生まれ、その反動で唯物主義の無神論が生じる。それゆえ多神教の方がいい。

たとえ異教徒だと見なされても、われわれは臆することなく機械的な自然現象の知的原理について語る。

われわれは、「Psicotronica」〔要検討 英語では Psychotronic〕に基礎をおく現代の多神教の信奉者である。

一神教の教義は、結局のところ偶像崇拜へと導く。唯物主義に決して導かない知的原理について語るほうが望ましい。

その一方、多神教の乱用の反動で一神教が現れる。現代の一神教は、多神教の乱用から生じたのである。水瓶座時代に、『弁証法の革命』のこの新たな段階で、多神教を心理学的に超越的なしかたで略述し、そのうえ知的に創設すべきである。生き生きとした総合的な「一神論的多神教」で、きわめて賢明に創設せねばならない。

「一神論的多神教」は多神教と一神教を総括したものである。多様性は一体である。

『弁証法の革命』では善悪、進化と退化、神や宗教という用語は使わない。

老いぼれ退廃した近頃、『弁証法の革命』、自己弁証法 self-dialectic、新たな教育が必要となっている。

『弁証法の革命』の時代、論理的思考の技法が正しく整然としたものであるために、直接、本質的存在がその技法をあやつるべきである。客観的な論理的思考の技法は、教育上の全面的変化をもたらすだろう。

「マインドの可能性と知性の機能」が現れることができるために、われわれの人生のすべての行動は、方程式と完全な公式の結果として生じるべきである。

自由な独立したマインドを創造するのに、またさまざまな条件づけから解放されたマインド、概念を選択することから解放されたマインド、全一（ユニトータル）なマインドを形成するのに不可欠な鍵を『弁証法の革命』は持っている。

『弁証法の革命』は、マインドの独裁的な規範ではない。『弁証法の革命』は、知的自由の侵害を追求するものではない。『弁証法の革命』は、いかに考えるべきかをわれわれに教えようと望んでいる。

『弁証法の革命』は、思考を閉じ込めたり、拘束しようとはしない。

『弁証法の革命』は、人間のすべての価値の統合を望んでいる。

教え

ただ真剣に生きる人生のみが、不滅の智慧を与えてくれる。しかしマインドのためにわれわれは誤りを犯し、宇宙科学の階段講堂に達することができない。マインドの誤りというのは、間違っただけで人間と呼ばれる知的動物の内面に宿るもろもろの我、心理的欠点のことである。

心理的欠点は 49 の潜在意識レベルにある。

49 の潜在意識レベルにある我またはエゴを、われわれは認識も発見もできない。なぜなら我のひとつひとつが、われわれのさまざまな体に分散しているからである。

それゆえマインドよりも高等な力に、その蛇の火で我を崩壊してくれるよう訴え、頼らねばならない。これが聖なる母クンダリーニーである。

唯一、ヒンドスタン密儀の聖なる母クンダリーニーのみが、49 の潜在意識レベルを知っている。

研究した心理的欠点は、われわれの本質的存在の一部を形成しない。瞑想をとおして心理的欠点を研究した後、性力でそれを崩壊してくれるよう、性の超力学の間、ラム・イオ Ram-lo（聖なる母クンダリーニー）に嘆願する。

インテレクトや反省ではマインドのなかで欠点を見ることはできず、みな、そこに停滞したままである。なぜならわれわれは、エゴの巣窟となっているマインドの他の七つの体を知らないからである。

マインドでもインテレクトでも理性でも、また人間が機能するもっとも主観的な方法でも、深い潜在意識レベルに決して到達することはできない。その深層レベルでエゴは、われわれの意識を眠らせるそのフィルムを絶えず現像しつづける。ただ性の火をもつクンダリーニーのみが、それら 49 の、レベルに到達でき、苦しみの原因、われわれを悲惨で不幸な状態にするもの、哀れにも人々が愛するもの、唯物主義的な心理学が神格化しようとしてきたもの、エゴと呼ばれるもの、「完全な革命」を成就するために『弁証法の革命』が永遠に破壊しようとするものを決定的に崩壊できるのである。

第1章

我を解体するための教授法

「我」を解体するための最良の教授法とは、それは、実生活を密度濃く強く生きるなかに見い出すことができる。

共同生活は、そこに「我」の姿全体を見詰めることができるすばらしい鏡である。

我々の同胞との関わりあいのなかで、潜在意識の奥に隠れている欠点が自ずから露われ出る、外に出る。というのは、潜在意識は我々を裏切るものであるから、もし、我々が感覚を警戒状態にしているのであれば、それらの欠点がどういうものか見ることができる。ノスティックにとって最も嬉しいこと、それは、自分の持っている欠点のどれかを発見することである。発見された欠点、死んでしまった欠点。ある欠点を見つけた時は、それを裁かず、しかも処罰せず、あたかも映画を見ているかのごとく、その欠点をその場で見なければならない。

発見した欠点を理性で理解するだけでは充分ではなく、マインドの他のレベルにおいてもその欠点を捕らえることができるように、内的に深く瞑想する必要がある。

マインドには多くのレベルと深さがあるため、マインドのあらゆるレベルにおいて欠点を理解しないあいだは、何もやっていないのと同じであり、そして、その欠点は、誘惑する悪魔として、我々自身の潜在意識の奥に存在し続けるであろう。

ある欠点が、マインドのあらゆるレベルにおいて総合的に理解された時、それは崩壊しその欠点を特徴づけている「我」は宇宙の塵埃になる。

このようにして我々は一瞬一瞬死んでいくのであり、このようにして我々の内に意識の永続的中枢（センター）、永続的重心をつくっていくのである。

退廃の極限状態にいたのでなければ、人は皆、己れの内に、「ブッダータ」、内的仏陀の「原理」、「霊」といわれるものを造るための霊的成分（サイキック）、もしくは原料が存在する。

複数の「我」は、愚かにも、妬みや強欲、憎悪、嫉妬、性エネルギー消耗、執着心、虚栄心などの核爆発を起こし、いたずらにその霊的成分を消耗する。

複数の「我」が一瞬一瞬死んでいくにしたがって、霊的成分が我々自身の内に蓄積していきこそれが意識の永続的中枢になる。

このようにして、我々は少しずつ個性をもつようになる。つまりエゴを崩壊させて、個性を持つのである。しかし、ここで明らかにしなければならないことは、それは個性が全てではないということであり、ベツレヘムの出来事を経て、超個性へ至らなければならないということである。

「我」を解体するという仕事は、何かとても真剣なことであり、マインドのあらゆるレベルにおいて、それを深く調べる必要がある。「我」とは、多くの巻から成る一冊の本である。

我々は自己の弁証法や思考、感情、行為について、裁くことなく、しかも処罰せずに、一瞬一瞬調べる必要がある。我々の持っている欠点の全てを、そして欠点の一つ一つを、マインドの奥深いところ全てにおいて、総合的に理解する必要がある。

複数の「我」は潜在意識である。「我」を解体した時、潜在意識は覚醒意識に変わる。

我々は、潜在意識を覚醒意識に変換する必要があるが、それは、「我」を根絶してのみ可能である。

覚醒意識が、潜在意識の居場所を占領するようになった時、我々は連続的意識といわれるそれを獲得する。

連続的意識を持っている人は、あらゆる瞬間に一肉体の世界だけでなく、高次の世界においても一意識が目覚めて生きている。

現在の人類は意識の 97 パーセントが潜在意識である。そのため、肉体の世界だけではなく、肉体を休めて寝ているときに居る超感覚の世界においても、そして、死後の世界においても、深く眠りこけている。

「我」に死を与える必要がある。今現在、ここにおいて、肉体の世界だけではなく、コスミック・マインドのあらゆる面においても、一瞬一瞬死ぬ必要がある。

我々は、自分自身に対して無慈悲になり、自己批評という鋭いメスで「我」を解剖すべきである。

正反対の物事どうしの闘い

ある偉大なマスターが、次のように言っていた、「光明(正覚 Illumination)を探せよ、そうすればその他のことは全ておまけとして与えられるだろう。」

光明に対する最悪の敵は「我」である。「我」とは、存在の流れにおける難点、生命が自由に動き流れるなかでの致命的な障害物であることを知る必要がある。

あるマスターに質問がなされた。「どれが道でしょうか。」

「何というすばらしい山だ。」と、隠遁しているところにある山にふれて、そのように言った。

「あなたさまにお尋ねしているのは、山についてではなく、道に関してなのですが。」「そなたが山の向とうに行くことができないあいだは、道を見つけられないだろう。」と、マスターは答えて言った。

別の僧が、そのマスターに、同じ質問をした。「あそこに、ちょうどそなたの目の前にある。」と、マスターは答えた。「どうして、私には見えないのでしょうか。」

「それは、そなたが、自己中心主義（エゴイズム）の考えを持っているからだ。」
「見えるようになるのでしょうか。」

「そなたが二元主義の見方をして、私にはできないと言っているあいだは、そなたの目は、その相対的な見方のために曇っているだろう。」

「私も、そなたもない時、見ることができるのでしょうか。」

「私も、おまえもない時、一体誰が見たいのか。」

「我」の土台は、マインドの二元主義である。「我」は、正反対の物事どうしの闘いによって支えられている。

あらゆる理論づけは、正反対の物事どうしの闘いにその基礎がある。「誰々さんは、背が高い。」と我々が言う場合、それは、低くないということを意味する。「私は、今入っているところです。」と言う場合、出ていっているのではないことを意味し、「嬉しい。」と言う場合、悲しいのではないことを言明している。

人生の問題というのは、正極・負極という二極のマインドの形にほかならない。問題はマインドによって支えられており、マインドによって作り出されたものである。我々が、ある問題について考えるのをやめた時、その問題は必然的に終結する。

喜びと悲しみ、快楽と苦痛、善と悪、勝利と敗北といったものが、「我」の土台となる、正反対の物事どうしの闘いを作りあげる。

我々は、勝利・敗北、快・不快、快楽・苦痛、失敗・成功、などなど、相反するものから相反するものへとみじめに一生を送る。

我々は、正反対の物事がなす暴虐なふるまいから解放されなければならない。それには、一切の抽象的概念がなく、夢想も空想もなく、一瞬一瞬を生きること習得して初めて可能となる。

滝のように激しい豪雨が降った後、道ばたにある石が、青白く、とても清らかになっているのをあなた方は、観たことがあるだろうか。そういう時、人は、ただ、「おー」という感嘆の声を発するだけである。我々は、正反対の物事どうしの闘いが原因で、そのすばらしい叫び声を変形することにならぬようにして、ものごとの、その「おー」を理解しなければならない。

ジョウシュウ（趙州 Joshu）は、マスター・ナンセン（Nansen）に、次のようなことを尋ねた。「タオ（Tao）とは、何でしょうか。」「普通の生活だ。」と、ナンセンは答えた。

「では、それに従って生きるためには、どのようにしたらよろしいでしょうか。」

「もし、そなたがそれに従って生きようとすれば、そなたのもとから、さっさと逃げてしまうだろう。そなたがその歌を歌おうとせず、それ自身が、自分で歌うままにさせておきなさい。あのつつましいしゃっくりはひとりでに出てくるのではあるまいか。」

次の言葉を思い出しなさい。「ノーシスは行為のなかに生き、抽象的概念のなかでは衰弱し、そして最も高尚な思考のなかでさえも見つけることは難しい。」

マスター・ボクジョウ (Bokujo) に次のような質問がなされた。「我々は、毎日、衣服を着てそして食べなければならないのでしょうか。どのようにしたら、そのようなことからのがれることができるのでしょうか。」

マスター答えて曰く。「我々は、食べるし、服を着る・・・」「私には理解できません。」と、弟子は言った。「それでは、そなた、服を着て、そして食べなさい。」と、マスターは言った。

このことが、まさに、正反対の物事から自由になった行為そのものである。私たちは食べるだろうか、服を着るだろうか。なぜ、それが問題となるのか。食べている時、あるいは、服を着ている時、なぜ、他のことを考えているのか。

もし、あなたが食事をしているのなら、食べなさい。服を着ているのなら、服を着なさい。道を歩いているのなら、歩きなさい、歩きなさい、歩きなさい。しかし、他のことを考えてはいけない。していることだけをしなさい。していることからにげてはいけない。行為からにげてはいけない。行為をそんなに多くの意味や象徴、説教、警告といったものでいっぱいにしてはならない。比喻せずに、行為を生きなさい、マインドを受容的にして、一瞬一瞬行為を生きるようにしなさい。

今、私が、あなた方に話しているのは、正反対の物事どうしが起こす痛ましい闘いから自由になった、解放された行為の道に関してであることを理解しなさい。

気を散らさず、逃げ道をつくらず、空想もせず、一切の抽象的概念のない、そのような行為。

あなた方の性格を変えなさい。正反対の物事どうしめ闘いから。行為を、解放し、知的にすることによって、性格を変えなさい。

空想の扉が閉じるとき、直観の器官が目覚める。

正反対の物事どうしの闘いから自由になった行為とは、直観的行為であり、全体的行為である。全体があるところには、「我」は不在である。

直観にもとづく行為は、我々が意識を覚醒させるまで、手をひいて案内してくれる。

人生の流れに身をまかせて、幸せに働き、そして休もうではないか。習慣的な思考という、濁り、腐った水を枯渇させようではないか、そうすれば、無の中にノーシスが流れ、それとともに生きる喜びがわきあがるだろう。

この知的な行為、正反対の物事どうしの闘いから自由になった行為は、我々をある点に上昇させ、そしてその点において、何かが壊れなければならない。万事がうまくいくとき思考の硬い殻が壊れ、そしてインティモの光と力が、夢想するのをやめたマインドにふんだんに入ってくる。

そうすると、肉体の世界にいるときも、そして肉体の外にいるときも、肉体を休めて眠っているあいだも、完全に意識が目覚めて、正覚の状態で生きており、高次の世界においても生命の幸福を享受することができる。

このようにマインドを絶えず緊張させておくことによって、このように訓練することによって、我々の意識を目覚めさせるにいたる。もし、我々が食べているときに商売のことを考えているのであれば、それは、目が覚めているのではなく、夢想している。仕事をしているときに、友達、あるいは兄弟などを思い出すのであれば、それは、明らかに夢想しているのである。

肉体の世界で夢想して生きている人々は、肉体が眠っているあいだもまた、内的世界において夢を見て生きている。

内的世界において夢を見るのはやめる必要がある。我々が、肉体の世界で夢を見るのをやめたとき、今現在、ここで、目を覚まし、そして、内的世界においても覚醒状態になる。

まず、光明（正覚）を探せよ、そうすれば、その他のことは全ておまけとして与えられるだろう。

光明を得た者には道が見えるが、光明を得ていない者には通が見えず、たやすく道からはずれ、奈落に落ちやすい。

夢想しないようにするためには、一秒一秒、一瞬一瞬、すさまじい努力と警戒が必要となる。ほんの一分注意を怠ると、すでにマインドは夢想しており、何かを思い出したり、そのときにしている仕事、あるいは行為とは異なった何か他のことを考えたりする。

我々が、肉体の世界で、一瞬一瞬目覚めることを習得したとき、肉体を休めて眠っているあいだにおいても、そして死後においてもまた、一瞬一瞬、目覚めて、そして自意識（訳注：自己を知る意識）を持って生きる。

人類すべて、肉体を休めているあいだだけではなく、反語的に使われている、いわゆる“起きて目が覚めている”状態のあいだにおいてもまた、意識が眠り、夢を見ているということを知るのは痛ましい。

マインドの二元主義から解放され自由になった行為は、意識を目覚めさせる。

K－H

世論の厳粛な裁定を前にして私が言明しなければならないこと、それは、あらゆるノーシス学徒にとっての基本的な目標は、究極的に「K-H」になること、つまり「コスモス・マン(Kosmos Hombre 一宇宙人間)」になることである。^{2***}

宇宙人間（コスモスマン）とは、五つのセンターおよびマインド、そして魂（エッセンス）において完全な秩序を保っている「存在（ビーイング）」（ビーイング）である。

² * コスモス・マン(Kosmos Man)=(Kosmos Hombre) Kosmos はギリシア語、Hombre はスペイン語で「人」という意味。人類は一つの宇宙(Kosmos)に生きているが、この宇宙(Kosmos)という言葉は「秩序」(Order)を意味しており、我々はこのことを決して忘れてはいけない。

宇宙人間になるためには、宇宙の原初の三つのカー—陽・陰・中性（ポジティブ、ネガティブ、ニュートラル）がどのように表れるかを認識することを学ぶ必要がある。

宇宙人間に導く道は、まったくポジティブであるけれども、しかしポジティブな力に対して常にネガティブな力が対抗する。

我々は「自己観察」をすることによって反対する力の機構（メカニズム）を知覚しなければならない。

我々が特別な行為—エゴの根絶、あるいは性の統治、あるいは特別な仕事—を実行しようと決心したとき、またはある決定した計画を実施しようとするとき、それに対する「抵抗」力を観察し、熟考しなければならない。というのは本来は、世の中とその内部機構というのは、往々にして抵抗を誘発する傾向があり、そのような抵抗には「二倍（ダブル）」の力がある。

企てが大きければ大きいほど、抵抗する力はより大きくなる。我々が抵抗力を「計算」する術を習得すれば、その企てを成功させることもまた可能である。そこに、天才の、光明（正覚）を得た人の能力がある。

抵抗

「抵抗」とは、反対する力であり、「エゴ」の秘密の武器である。

抵抗というのは、我々の心理的欠点が意識にとってかわるときに、それを阻止しようとする「エゴ」の霊能力である。

「エゴ」は、抵抗することによって、うまく切り抜ける傾向があり、あやまちを言わずにすませるため、あるいはあやまちに蓋をするために「言い訳」を請うものである。

「抵抗」が働くため、夢を解釈するのが難しくなり、そして夢自体について認識しようとしても曇って不透明になる。

抵抗は、不愉快な心理的あやまちを「見過ごそう」とする防衛機構（メカニズム）に作用して、そのようなあやまちを意識せず、相変わらず心理的に奴隷のままでいるようにしむける。

しかし、本当に、抵抗に打ち勝つことができる手法が存在する。それは次のとおりである。

1. ー抵抗するものを調べる（Recognize）
2. ーその正体を明らかにする（Define）
3. ーそれを理解する（Understand）
4. ーそれに対して働きかける（Work on）
5. ー超性力学（Sexual Super Dynamic）によって、それに打ち勝ち、解体する。

だが、「エゴ」は、自分のごまかしがばれないようにするために、「抵抗を検討」しているときに、闘ってくるだろう。というのは、エゴが我々のマインドに対して行使している支配力が危険にさらされるからである。

「エゴ」と闘うとき、マインドより高等なカーいわゆるインドの人達が言う「蛇クンダリーニー」の火一に頼らなければならない。

実践（プラクティス）

私が人類に提供した書物のうちのいずれかを、実践、あるいは体験、あるいは体現する人は、心理的に解放されることは明らかである。

輪廻転生やアトランティス、錬金術、エゴ、あるいはアストラル・プロジェクションについて驚嘆に値することを話し、外的世界においてはそういう事柄に詳しい人々がいるけれども、それはただ頭だけでよく知っているにすぎない。結局、そういう人々は、何も知っておらず、死ぬときに、ただ記憶に知識が蓄積しているにすぎないので、あの世では、そういうものは何の役にも立たない。というのは、相変わらず意識が眠り続けたままだからである。

単に理論に瓶詰になっているのであれば、何も実践したことがなければ、今までに私が書いた本の中に教えていることに意識を持たなければ、知識を記憶の中に置古っぱなしにしているのであれば、それは、みじめにも時間を無駄使いしたといえる。

記憶とは、インテレクチュアル・センターを形成する原理である。人がもっと何かを切望するとき、潜在意識の限界を通してみつめ、そして記憶の中に蓄積されているものを見て、そして秘教的な本に書いてある最近の出来事、もしくは教えについての分析、あるいは瞑想するとき、それらの価値は同じインテレクチュアル・センターの感情の段階に移行する。その知識のもつ深い意味を知るため十分に瞑想すると、そのような知識は感情センターに移行し、霊の奥底で感じられるようになる。

知識—エッセンスが認識できる価値—がうまく体現されたとき、そのときには、最後として、意識に蓄積され、もはや失われることは決してない。そしてエッセンスは、それらの知識によって豊かになる。

では、どのような形でノーシスの知識—私が以前書いた書物、およびこの本にものせている知識—を意識化できるか理解してみよう。

瞑想は、我々がノーシスの知識を意識化するのにすばらしい方法である。しかし、ただ単に知識を理論、あるいは記憶の中だけに放置するというあやまちを犯さないようにしよう。なぜならば、そうすると、決してマインドを統治するようにならないからである。

必要条件

秘教のワーク残酷な現実が我々に示すように、多くの人々は、ノーシスの秘教的仕事の重要性を理解しておらず、そして大半が「良古家のあるじ」ではない。

良き家のあるじでなければ、ナイフの刃の道に入るための準備ができていないのは明らかである。弁証法の革命において仕事をするためには、良き家のあるじのレベルにすでに達している必要がある。

狂信的なタイプ、偏執者、気まぐれな人などは、「総合的な革命」には役立たない。己れの家庭の義務を遂行しない人は、大変化を成し遂げることはできない。悪い父親、ある男、あるいは女のために家庭を捨てるような悪い夫、あるいは妻であれば、根本的な変換をすることは決してできない。

「革命的心理学」の基盤は、次のような「必要条件」を満たすことである－家庭において完全なる均衡を保つこと、つまり、良き夫、良き父親、良き兄もしくは弟、良き息子であること（訳注：あるいは良き妻、母親、姉もしくは妹、娘）。苦痛に満ちた人類のためにやるべき義務を完全に果たすこと。つつしみのある人になること。

これらの必要条件を満たさない人は、このような革命的研究において、実際前進することはできない。

敗北主義

間違っって人と呼ばれている理性的動物は、「エゴ」を完全に根絶することや性を絶対的に支配すること、「存在（ビーイング）」の内的な自己実現といったことは、何か空想的なことで不可能であるという「固定観念」を持っている。しかし、そのような大変主観的な考え方は、いまだに意識が目覚めていない人々のマインドと肉体が操作する敗北主義という心理的要素の産物であるということに気がついていない。

この退廃した時代にあって、人々は、自分の内に精神的集合体を持っていて、それが「エゴ」根絶の道において大古な障害物となっている。その集合体とは、「敗北主義」である。

敗北主義が原因で、人々は、機械的な人生を高等な状態に引き上げることができない。人々の大半は、ノーシスの秘教のワーク、あるいは闘いを開始する前に既に負けたと思っている。

自己観察し、そして自己分析して、今現在ここで、自分自身の内に「敗北主義」といわれているものを形成しているそれらの面々を発見しなければならない。

要約すると、敗北主義には次のような三つの共通した態度が見られる。

- 1 一理性的な教育が不足しているため自分にはできないと思う。
- 2 一自分には「根本的変換」を開始する能力がないと思う。
- 3 一「自分には変わるチャンス、もしくは勝利する機会が一度も訪れない」という心理の歌を歌っている。

態度その 1：

教育を充分受けていないためできないと思うことに関してだが、ここで思い出さなければならぬことは、ヘルメス・トリスメギストス、パラケルスス、プラトン、ソクラテス、イエス・キリスト、ホーマーなどといった偉大な賢者たちは皆大学に行かなかったということである。事実、人はそれぞれ自分自身の「マスター」、つまり「存在（ビーイング）」を持っており、それはマインドや偽りの合理主義を越えたものである。「教育を智慧や認識（知識）と混同してはいけない。」

人生や宇宙、自然が持つ神秘を認識することは、我々が「根本な革命」を成し遂げることを可能にするすばらしい力である。

態度その 2：

「反キリスト」一唯物主義の科学一によってプログラムされたロボットたちは、自分は不利な立場にいると思っている、というのは、自分には能力が不足していると考えているからであるが、このことについてよく分析する必要がある。「存在（ビーイング）」の価値を歪曲するいつわりのアカデミックないつわりの教育の影響を受けて、この理性的な動物料、その感覚的なマインドの中に恐ろしい我を二つ存在させるようにしてしまった。その二つの我とは、「固定観念」一自分は負けてしまうだろう一と「怠惰」である。あらゆる機械的なものごとから解放され、そして敗北主義から一気に脱出するのに必要な知識を獲得するためノーシスのテクニックを実践するために、その二つの我を排除しなければならない。

態度その 3：

機械人間の思考すること、それは、「自分には一度もチャンスがおとずれない。」ということである。

人生の内容は変えることができる。自分自身が己の環境を創る張本人である。すべては「行動と結果の法則」の結果として表れ出たのであるが、しかし、高等な法則は下等な法則を超越することが可能である。

緊急に、一刻の猶予もなく、敗北主義という「我」を排除する必要がある。勘定にワーク入れるのは、理論の量ではなく、「意識の革命」の仕事に費やす超努力の量である。真の人間は好きなときに、精神的向上、もしくは心理的向上のために適切なときをつくるものである。

心理占星学

「生命」の書に明確に次のように書かれている。それは、「エゴ」を完全に根絶しえた者は、星座宮とそれから受ける影響を任意に変えることができるということである。

真実の名において、言明しよう。私の内部にあるそれは、星座宮を任意に変えてしまった。以前のパーソナリティーの星座宮は魚座であったけれども、今はすさまじく革命的な星座「水瓶座」に属する。

自分自身の内部で、心理的革命を実現しないかぎり、星座宮が影響し、我々を操っているという事実は、否定できない。とはいえ、光明（悟り）を得ようと望む学徒は、その進む道において、星占いが設定するものに対して変革をおこすことから始めなければならない。

ある星座宮は、他の星座宮とは共存できない、というのは、全く馬鹿げている。なぜなら、共存するのは、「エゴ」、「複数の我」、我々が内部にひきずっているその「望ましくない要素」だからである。

終わりの時代にある今現在の占星学は、まったくの商業主義ゆえに何の役にも立たない。カルデア地方の賢者たちがおこなっていた真の占星学は、もはや忘れられている。

機械人間は、次のように言って変わることを好まない―それが私の星座宮であり、その影響を受けているのだ。しかし、あくことなく強調したいのは、重要なことは、感情的に、そしてメンタル的に変わることである。

天の川から、「存在（ビーイング）」のもとから放たれる星座宮の本当の力が、我々の内部に侵入し、表現されるためには、メンタル的に変化をとげる必要がある。その星座宮の真の力は、我々に永続的重心を与えるだろう。

光を星占いにもとめてはいけない。我々が自分自身から、個人の特徴的な心理面を排除し、そして私の著書『黄道十二星座のコース』で伝えた心理占星学の教えを中に入れるための「新しい皮袋」―マインド―を作ったとき、光は現れる唯一、「存在（ビーイング）」と聖なる母だけだが、新聞や安直な雑誌などの占星術から我々を解放してくれ、「統合的な教育」を授けてくれる。

何世紀ものあいだにたまった塵や埃をふるい落とし、古めかしい習慣や信念をすべて捨て去り、占星学に対して持っている狂信的な考え方―こうなったのも私の星座宮の影響によるものであり、どうしようもない―から抜け出さなければならない。そのような主観的な考え方は、エゴが人の気を散らせるために用いるごまかしである。

エゴの修辞（口のうまさ）

人と呼ばれている、この三つの脳を持っている二本足の動物をよく観察してみると、まだ意識の永続する中心、重心を持っていないという結論に達する。^{3***}

³ * 三つの脳：センター第一番目の脳：思考の中枢（頭蓋骨の中にある）。第二番目の脳：連動の中枢、モーター・センター。中央の骨髄とその神経系統の枝葉全部をあわせもつ背骨。 第三番目の脳：感情の中枢。決まったところにあるのでも、特定の臓器でもない。交感神経叢および人間の有機体の特殊な神経系中枢すべてから成り立っている。（マスター・サマエル著『ノーシス意識革命（根元的教育）』から抜粋）

二本足人間は「個人化」しているのではなく、ただ単に「本能化」しているにすぎないといえる。すなわち、複数の「我」というものが、自分の思うままに本能センサーを操作して、我々を促しているということである。

親愛なる「エゴ」は、まったく個性をもっておらず、不和をひきおこす要素の総和、エゴの心理的（霊的）エネルギーの総和である。

レギオン「エゴ」と呼ばれている軍団を形成している複数の我の一つ一つの小さな「我」は、そアイデアレトリックれぞれ独自の判断力や計画、観念、「修辞法」を持っている。

エレガント「エゴ」の用いる「修辞法」というのは、じょうずに、そして優雅に話す術策であり、とても繊細微妙ゆえに、いつあやまちにおちいったのか我々は気がつかない。「エゴ」の使う修辞法は、大変すぐれているので、それゆえ我々の意識はそれに気がつかないで眠りこけているのである。

「エゴ」の口のうまさの例を、国をして軍備競争に走らせた場合で見てみよう。「第三世界における戦闘機や軍艦、装甲車などの重工業製品の輸入量が、一九七三年から一九七六年にかけて二倍に増えた。」おかしなことに、軍備規制や平和について話されていると古に、いわゆる工業先進国といわれている国々の援助によって、発展途上国が自国の「破壊力」を増加させているのである。こういったことが、軍備撤廃と世界平和のために適切な道であろうか。いやまったくその逆であり、これが「エゴ」の修辞法、口のうまさを物語っている。

二本足人間が、反キリストー唯物主義一の発明したものや一見驚嘆させられるようなものにうっとり魅了され続けているあいだに、エチオピアでは、一九七三年から現在までのあいだに二十万人も餓死した。これが文明というのだろうか。いやそうではなく、それは「エゴ」の修辞そのものである。

二本足人間は、もはや何の役にも立たない。小さな自分の世界に住むことを好む。唯物主義の心理学、実験心理学は何の役にも立たない。米国の人々に悪影響を与えているマインドの問題を解決できなかったのが、その証拠である。米国の大都市では、かの有名な「徒党」（小ギャング団）があいかわらず存在し、しかもその数は増えている。ニューヨーク市では、そのメンバーが三十歳前後で汚れた衣服と革靴を

はいたグループ「うす汚れた者たち」が存在する。屋根裏に集まり、人から自分たちが腕の良い玉突き人はみなされるのを自慢している。

「無名の自転車乗り手」もまた、だいたい同じ年頃で、「地獄の天使」風に装い、大きめのジッパー付きのジャンパーを着ている。そして彼らの乗る自転車は、古いシュウイン（schwinn）でオートバイに似せるためにホークの部分長く改造している。

「暴力」は、彼らの生活において受け入れられており、その国（米国）に住む、多くの徒党を組んでいる構成メンバーの一人一人に存在しているが、嘆かわしいことに、他の国々の二本足人間もまたそのまねをしたがる。そういうことが心理的解放だといえるのだろうか。実践を伴った心理革命について記したこの著書にある教えを、我が身で生きて初めて、二本足人間は「エゴの修辞」から解放されるだろう。

意識の永続的中心

三つの脳を持つ二本足の人間は、まったく個性というものを持ちあわせておらず、またセンター意識の永続的中心(Permanent Centre of Consciousness 略して PCC)も持っていない。その思考や感情、行動の一つ一つは機械人間の重要なセンターをコントロールする「我」から出てくる。

長年のあいだ、献身と苦痛を伴いながら我々はノーシス運動のために闘ってきたが、実際恐るべきことを目にした。多くの人々が目に涙をうかべて、ノーシスのために最後まで仕事をすると誓った。あるいは、大義に対して永久なる忠実を誓い、すさまじいばかりの演説をも行った。そしてそれからどうしたというのか。その血の涙はどうなつたのか、あのすさまじい誓いはどうなったのか。すべては、無益に終わった。その時、一時的な「我」が忠誠の誓いをたてただけで、別の「我」が、その忠誠を誓った「我」にとってかわったとき、その人はノーシスから離れていった、あるいは、大義を裏切った、あるいは、ノーシスを裏切って他の団体へ移っていったのである。

実際、人というのは、PCCを持っていないために、意志の持続は不可能であり、一個人ではなく、多数の小さな「我」の総和である「我」を内部に持っている。

肉体の死とともに「永遠の至福」が得られると思いきみ、待ち望んでいる人は多いけれども、肉体が死ぬことによって「エゴ」の問題が解決されるわけではない。

死後、自由奔放なカテキシス、「エゴ」はその分子体に包まれて存続する。二本足人間は終わりをむかえるが、「エゴ」のエネルギーは、分子体で存続し、後に我々の子孫の中に生き続け、自分の欲望を満たし、そして以前起こしたのと同じ悲劇を繰り返すために、回帰する。

いよいよ PCC を待つために、自分の内部に究極的に統合的な革命をおこす必要性があることを理解する時がやって来た。そのように、我々が永続的に存在する中心を持つレギオンではじめて、個性というものを持つようになり、軍団から解き放たれ、意識が目覚めた個人になることができる。

今の時代の人、多数の乗客でいっぱいの一隻の船に似ており、その乗客の一人一人は独自の計画を持っている。すなわち、マインドが一つだけではなく、多くのマインドを持っているということである。「我」の一つ一つは、独自のマインドを持っている。

幸運なことに、二本足人間の内部には、それ以上の何か、つまり、エッセンスが存在する。その原理について、真剣に熟考してみると、それは、我々の霊を形成することのできる、最も高いところにある霊的な材料であるという結論に達する。

エッセンスを目覚めさせて魂を創ろう。エッセンスを目覚めさせるということは、「意識」を目覚めさせるということである。意識を目覚めさせるということは、我々の内部に PCC を創るということと同じである。意識を目覚めさせることによってのみ、個人になる個人になるが、個人になることがゴールではなく、その後「超個性」に達しなければならない。

超個性

我々は、個人になるため、そしてその後、超個人になるために、エゴを根絶する必要がある。前章で勉強した PCC（意識の永続的中心）を持つために、エゴを解体する必要がある。

複数の我は、怒りや強欲、肉欲、妬み、自慢、怠惰、大食などで核爆発を起こし、愚かにも精神的エネルギーを無駄遣いする。

エゴが死ぬたびに、我々の内部に精神的エネルギーが蓄積されていき、それが PCC になっていく。

今日、人間は、いやもっと適切な表現を使うとすれば、自分自身を「人間」と自己判断している二本足動物は、実は「我」の軍団にコントロールされている機械である。

ここで、恋人たちに起こる悲劇をみてみよう。何と多くの誓いがなされたことか。何と多くの涙が流されたことか。何と多くの良き意図があったことか。そして、どうなったというのか。唯一残されたものは、悲しい思い出だけである。

恋人たちは結婚し、そして時が経つと、夫は妻以外の他の女性に恋をし、あるいは、妻は夫以外の別の男性に恋をし、砂上の楼閣が崩れ落ちる。どうしてそうなるのだろうか。それは、人間がいまだに PCC を持ちあわせていないためである。

きょう、永遠の愛を誓った小さな「我」が、その誓いとはまったく関係ない別の小さな「我」にとってかわられる、それだけのことである。我々は個人に変換する必要がある、それは、PCC を創って初めて可能になる。

我々は、PCC を創る必要があるが、それは、複数の我を解体することによって初めて可能になる。

人の中にある内的矛盾はあまりにも多くあり過ぎ、それらを実際鏡で見たら、誰でも気かふれるだろう。そのような矛盾の源泉は、「我」が複数ということにある。

「我」を解体したいのであれば、先ず自分自身の内的矛盾を認識することから始めなければならない。不幸にも、人は自分自身の矛盾を見ないようにするため、自分をだますのが好きである。

「我」を解体したいのであれば、先ず嘘をつかないことから始めなければならない。人は皆、自分自身に対して嘘つきであり、自分自身に嘘をつく。

「我」が複数であることと、我々に起こる尽きることの無い矛盾を認識したいのであれば、自分自身をだますべきではない。人は、自分にある内的矛盾をみたくないために、自分をだます。

自分自身の内的矛盾を発見した人はだれでも、自分を恥ずかしく思い、自分は他の何者でもない、不幸な者、地上に住むあわれな毛虫にすぎないということを理解するのはもっともなことである。

我々が自分自身の内的矛盾を発見するという時点で、既に成功している、というのは、我々の内部の判断力が自発的に解放され自由になったからであり、そうなることによって個性に至る道、そして超個性に至る道を我々に明確にみせてくれる。

I. 統合的豊かさ

我々には「統合的豊かさ」が必要である。人は皆、苦しみ、つらい人生を送っており、変わりたいと望んでいる。

いずれにしても、「統合的豊かさ」とは、「自分自身を大切にする（尊重する）」ことの結果であると思う。

こういうと、経済学者や神智学者などといった人達にとっては大変奇妙にみえるかもしれない。自分を大切にするのが、経済問題とどのような関係があるだろうか。仕事に関連した問題、あるいは労働力とか、資本などに関する問題と何の関わりがあるのだろうか。

次のようなことをコメントしたいー精神のレベル（水準）が、各自の生活をもたらす。我々は、メキシコシティでしょーしゃな家に住んでいた。ある日、「パラシュート族」ーという名で呼ばれるーがその地域に侵入してきた。まもなく厚紙などでブラック小屋を建て住みついたが、明らかに、その一帯で汚点となった。もちろん、彼らを過小評価しているのではない。もし彼らが、ブラック小屋を清潔にしているのであれば、何の異論も唱えないであろう。残念ながら、実際彼らの不潔さはひどいものだった。

わが家の屋上から彼らの生活を注最深く観察した。彼らはお互いののしりあったり、傷つけあったり、仲間を尊重しようとしなかった。ー総括していえば、彼らの生活は、貧困と嫌悪が支配するゾッとずるようなものだった。

以前は、その一帯で警察がパトロールすることはなかったが、彼らが住みついてからは、いつもパトロール化にあった。以前は、その地域は平和であったが、それ以降は、地獄と化してしまった。このように、実際自分の目で、「存在」のレベルが、それぞれの生活をもたらすということをはっきりと確認できた。

もしそこの住人の一人が、一夜にして自身自身を大切にしよう、他人を尊重しようと決心したならば、明らかにその人は変わるだろう。

自分自身を大切にすることはどういうことだろうか。それは、犯罪行為をしない、盗まない。性エネルギーを消耗しない、姦淫をしない、他人の豊かーな生活を妬まない、障虚で素直になる、怠け癖をなおし、積極的で、清潔で、品位のある人になることなどがあげられる。

人が自分自身を大切にし、尊重するとき、その人の精神レベルが変わり、当然新しい状況を引き寄せ、これまでとは異なった種類の人々、もっと品位のある人々と知り合い、それによって、経済的にも、社会的にも、彼の生活は変わるだろう。このように、「総合的に自分自身を大切にする（尊重する）」ことが社会的豊かさ、経済的豊かさをもたらす。しかし、もし人が自分を大切にできないのであれば、当然他人を大切にする、尊重することはできず、結局自らの手で、自分の人生を不幸で悲惨なものにしてしまうだろう。

「統合的な豊かさ」の原理は、「自分自身を大切にする（尊重する）」ことにある。

Ⅱ. 自己反省

ケーニヒスベルグの哲学者エマニュエル・カントがすでに述べたように、「外は内の反映である」ことを忘れてはいけない。カントの著作『純粹理性批判』をじっくりと研究すると、その中に「外は内である」という、あらゆる時代を通じて偉大な思想家の一人とされる人物が述べた言葉そのものを見い出だすことができる。

人間の外見的なイメージとその人の周囲をとりまく状況は、「目己イメージ」の結果である。我々は皆、一つの自己のイメージ像を持っているが、この「自己」と「イメージ」という二つの語から成る複合語には深い意味がある。

このとき、サンティアゴの写っているあの写真が私の脳裏に浮かんできた。我々の友人であるサンティアゴを撮ったとき、おかしなことに二人のサンティアゴが写しだされた。一方はとてもおとなしく、不動の姿勢で顔は正面を向いているが、もう一方は、それとは異なった顔つきで、歩いている。どうして一枚の写真にサンティアゴが二人も写し出されたのだろうか。

こういう分野の研究に興味を持っている人々に見せるために、この写真を引き伸ばさず価値が有ると思う。後者のサンティアゴは、前者のサンティアゴの目己投影であろう。というのは、人の外側の像とその周囲の状況とは、自己像の結果にほかならないからである。

明らかに、外は内の反映である。それゆえに、我々が自分自身を大事にしないのであれば、我々自身の内側の像が非常に哀れであれば、自分を心理的欠点やモラル上の欠陥でいつばいにしているのであれば、まちがいなく外側の世界（物理的世界）において、経済的困窮や社会的困難などのような不愉快な出来事が身にふりかかるだろう。人の外側の像とその周囲の状況は、目己像の産物であるということを決して忘れてはいけない。

我々はだれでも、一つの自己像を持っている。写真に写し出されるような物理的（肉体的）像が外側に存在するけれども、内側にはそれとは異なった別の像がある。もつと明確に言えば、我々は外側に物理的な、五感でとらえることができる像を持つ一方、内側に心理的な、五感でとらえることが不可像な像を持っている。

もし外側の像が哀れで惨めであるならば、そしてそれに加えて不愉快な情況—経済的に困難な状態やあらゆる類の問題、いさかいなど—が家庭において、あるいは職場やそれ以外のところでも起こっているとすれば、その原因は我々の心理的像が惨めで欠陥があり、ぞっとするほどおぞましいからであり、それは、我々の悲惨さや無益さ、現在のありのままの自分が、環境という鏡に映し出されているからにほかならない。

もし我々が変わりたいと望むのであれば、全体的にそして大きく変わる必要がある。像と価値とアイデンティティ（自分であること）を根本から変えなければならない。

私の著作のいくつかに既に述べたが、それは、我々の一人一人は空間における一つの数学的点であり、価値の総和に媒体として役立っている。ある人々は天才的な価値に役立つ一方、別の人々は平凡な価値に役立っている。それゆえ、各人各様である。大部分の人々は、「エゴ」の価値に、「我」の価値の媒体として機能する。これらの価値は正にも負にもなる。このように、像、価値、アイデンティティは単一の全体である。

我々は根本的に変換する必要がある。ここで強調したいことは、アイデンティティと価値と像は完全に変わらなければならないということである。

新しいアイデンティティ、新しい価値、新しい像が必要である。これが心理革命、内側の革命である。現在我々が働いている悪循環の中に相変わらず居続けようとするのは愚かなことである。我々は統合的に変わる必要がある。

人の自己像がその人の外側の像（姿）のもととなる。自己像とは、我々が内に持っている心理的像のことである。自分の持っている心理的像とはどのようなものでしょうか。怒りっぽい像だろうか、あるいは強欲のそれか、肉欲か、妬み深いそれか、高慢か、怠惰か、大食のそれか、または別の像だろうかいずれにしても、我々がどんな像—自己像—を持っていたとしても、当然それが外側の像のもとになるだろう。

いかに外側の像がりっぱな衣裳をまとっていたとしても、本質的には哀れなこともある。高慢な人、周りに嫌がられるような人、謙虚さが微塵もないような人、そう

いった人の像がよもや美しいと感じられるだろうか。肉欲でいっぱいの人像が良い感じを与えるだろうか。そのような人はどのような行動を取るだろうか、いかに生活しているのか。彼の雲量はどのような様相をしているか、属性に対してどういう驚度を取るだろうか、それともすでにその行動は退廃してしまっているのであろうか。羨ましがりの人、他人の豊かな暮らしをみて苦しみ、妬みゆえに密かに他人に害を加える人の外側の像はどうであろうか。働くことをいやがり、汚れてひどい状態にいるような怠け者の像はどのようなであろうか。あるいは大食漢の像はどうであろうか。

実際、外側の像は内側の像の産物であることは疑いの余地がない。

我々が今現在持っているアイデンティティと価値と像が悲惨であるため、社会生活は、いさかや経済問題で満ちている。現代はだれも幸せだとは思っていない。しかし、今我々が持っているアイデンティティと価値と像を変えることが可能であろうか。新しいアイデンティティと価値と像を得ることができるだろうか。それが可能であると断言する。

もし人か自分自身を大切にする、尊重することを習得するならば、その人の人生は、論理的領域あるいは心理的領域だけでなく、社会的にも、経済的にも、そして政治的領域においてまでも変化をとげることになる。とにかく変わる必要がある。それゆえ、アイデンティティと価値と像は変わらなければならないと繰り返し述べているのである。

それには、「エゴ」を解体する必要がある・我々は皆「我」を持っている。扉を叩くと、「どなたですか」と尋ねられる。そのとき、我々は「私（我）です」と答える。しかし、その私（我）とは一体だれであろうか、その私自身とはだれだろうか。

事実、「エゴ」とは、負と正の値を合計したものである。「エゴ」を解体する、そのように負と正の値を消滅させるのであれば、新しい価値、すなわち魂の価値に媒体として役立つことが可能である。我々が今現在持っている価値の全てを排除し、変わりたいと望むのであれば、新しいタイプの弁証法が必要となる。

Ⅲ. 心理分析

我々が内に持っている正と負の価値を把握しそして排除するための弁証法があるが、それは「内なる精神分析」と呼ばれる。

内的心理分析に訴える必要がある。人が心理的欠点を把握するため内的精神分析に訴えると、大きな困難が生じる、つまりそれは「反移動力（移動に反対する力）」である。

人は「自分自身を探究する」、自己を内観することが可能であるけれど、そう試みようとするとき、「反移動力」という障害が現われる。その解決策とは、我々が注意を自分の内側に「移動する」ことである。そしてそれは、「自分自身を探究する」目的のために、自己を認識して社会的分野、経済的、政治的そして精神的分野においても、心理的に我々を傷つけるネガティブな価値を排除する目的のために行なうことである。

繰り返して言うが、不幸にも人が自分を探究しそして自己を認識するため、内向的になろうとするやいなや、反移動力が働く。反移動力というものは、「内観」という行為を難しくする力である。もし反移動力がなければ、もっとたやすく内観を行なうことが可能だろう。

真に自己を認識するために、内的な精神分析をする必要、内側において自分を探究する必要がある。「己れ自身を知れ。そうすれば、宇宙を、そして神々を知るであろう。」

構造分析に訴えるとき、内観することを妨害しそして不可能にしているその心理的構造を把握できる。そのように構造を把握・認識してはじめて理解することができる。そして理解したとき、そのとき、妨害に打ち勝つことができる。

自分自身を知ると、人は変化をとげる。自分自身を知らないかぎり、変わったとしてもそ、それは主現的な変化にすぎない。まずはじめに、我々は自分を分析する必要がある。内的な心理分析や構造的な自己分析を妨げる反移動力に、どのようにして打ち勝つことができるだろうか。それは唯一、「構造分析」と「取引分析（訳注：エゴ相互間で行なわれる駆け引きを分析）」を通じて可能となる。

しかし、構造分析だけでは充分ではなく、何かが必要である。それが、取引分析である。金融関係の取引や商取引などがあるように、心理においても取引が存在する。

我々の内部にひきずっている様々な心理的要素は、取引を行なったり、互いに交換をしたり、争ったり、位置の入れ替わりをしたりしている。ただじっと静止していることはなく、絶えず動いている状態にある。

怒り、強欲、肉欲、怠惰、大食など、どのような欠点にしてもそれを認識するため、十分に自分を探求する人は、心理的にすばらしい、驚くべき心理的進歩をとげる。

取引分析を行なうことによって、様々彼心理的過程を、そしていろいろな機構を把握したとき、通常心理的内観をする際出てくる障害は終わりになる。そしてそのあと、自分自身を探求することが可能となる。

十分に自己探求するためには、まず最初に、排除したいと望む「欠点を分離することから始めなければならない、そしてそのあと、その欠点を根絶する。

どの欠点でも、崩壊すると、精神的エッセンスの数パーセントが自由になる。そして我々が誤った価値、すなわち欠点をひとつずつ分離、解体してゆくにしがって、それら欠点の中にびんづめになっていた心理的エッセンスが徐々に解放され、最後には完全に解放され自由になる。そのとき、我ラジカル々は根本的変換するだろう。そしてまさにその瞬間に、魂の永遠なる価値が我々を通じて現われることになるだろう。そうなれば、疑いなく、その人個人だけではなく、人類にとってもすばらしいことであろう。

ネガティブな価値を完全に崩壊あるいは解体すると、自分を大切にするだけではなく、他人も同様に思いやり、万人にとって「慈悲の源泉」となり、覚醒した、すばらしい、完全なる存在となる。

そのような覚醒した人の神秘的な自己像（心理像）は、当然の結果、品位ある市民として完全な像として外側に現われるだろう。彼をとりまく状況もまた、あらゆる意味において良好であり、宇宙における巨大な鎖のなかでひとつの金の環となるで

あろう。世界中の人々にとってお手本となり、多くの人々にとって幸福の源泉となり、言葉が表すことのできる最も重要な意味で、悟りを得た人（正覚者）となつて、絶え間なく、すばらしい恍惚状態を享受するであろう。

IV. マインド力学

マインド力学において、マインドがどのように機能するのか、そしてなぜ機能するのかについて知る必要がある。

疑いの余地なく、マインドとは、我々が意識的に操作できるよう学ぶべき道具である。しかし、マインドがどのように機能するのか、そしてなぜ機能するのかを認識することなく、マインドが効果的な道具であれとするのは愚かなことであろう。

マインドがどのように、そしてなぜ機能するのかを識ったとき、マインドの様々な機能を認識したとき、マインドをコントロールすることができる。マインドは有益で完全な道具、すばらしい乗り物に変換し、それを使って人類のために働くことができる。

マインドの潜在力を識りたいのであれば、現実主義的なシステムが必要である。

現在、マインド・コントロールに関するテーマが多くとりあげられている。ある種の人工的な訓練が理解力をコントロールするのにすばらしい効果があると考える人々もいる。マインドに関してスクール、理論、システムが多くある。しかし、どのようにしたらマインドを何か有益なものにすることができるだろうか。次のことを深く考えてみよう。つまり、人々がマインドがどのように機能するのか、そしてなぜ機能するのかを識らなければ、マインドを完全にすることはできないだろうということ。

我々がマインドを完全にしたいのであれば、マインドの持つ様々な機能を識る必要がある。どのように機能するのか。なぜ機能するのか。どのように、そしてなぜということとは決定的である。

例えば、湖に石を投げると波ができる。その波とは、石に対する湖水の反応である。それと同様に、誰かが我々に皮肉った言葉を言ったならば、その言葉がマインドに到達し、マインドがその言葉に反応する。そして、紛争になる。

人はみな、問題の渦中におり、紛争の中で生きている。筆者は多くの組織や学校などの討論会を注意深く観察したが、お互いを等軍しないのが実状である。どうしてそうなのか。それは、自分自身を尊重しないからである。

上院、下院、あるいは単に学校の会議を観察してみよう。誰かが何かを言うと、他の人が自分のことを言われたように感じ、腹を立て、さらに悪いことを言い換えし、お互いに言い争い、役員会は大混乱になって終わることになる。このように、一人一人のマインドが外の世界の刺激に反応すると深刻な結果を招いてしまう。

自分自身のマインドを探究するには、内観的心理分析に訴える必要がある。インテレクチュアルな範囲よりももう少し内部で自分自身を識る必要がある。例えば、なぜ他人の言葉に反応するのか。そのような条件下では、我々は常に犠牲者である。我々を喜ばせたいのであれば、親しみをこめて君を軽くぽんとたたき、やさしい言葉を二言、三言かければ充分である。あるいは、我々の気分を害したいのであれば、不快な言葉を数語言えば事足りる。

それでは、我々の本当のインテレクチュアルな自由はどこにあるというのか。どれがそうなのか。我々は実際他人に依存しており、奴隷である。心理のプロセスを、専ら他人に依存していて、自分で指揮を取らない。これはおそろしいことである。

他の人が我々を、そして我々の内的プロセスを指揮する。友人がやって来て、我々をパーティに招待するといふので、その友人の家へ一緒に行く。酒を一杯すすめられ、断るのは申し訳ないと思い飲んでしまう。そしたら、もう一杯つがれ、それも飲み干し、またもう一杯つがれ、それを飲み干す、ということを繰り返し、ついには酔っ払ってしまう。その友人が我々の心理的プロセスの主人であった。

このようなマインドが何かの役に立つだろうか。誰かが我々に命令するとすれば、もし皆が我々に命令する権利を持っているとするならば、一体、我々のインテレクトの自由はどこにあるのだろうか、どれがインテレクトの自由であるのだろうか。

ある異性の前にいる、としよう。すぐにその人物と同一視してしまい、ついには性エネルギーを消耗したり、あるいは姦淫をしたりする。その意味することは、その異性が我々の心理的プロセスを征服し、我々をコントロールし、自分の思うように我々を従属させたということである。こんなことが自由というのだろうか。

あやまって人と呼ばれている知的な動物は実際、自分の真のアイデンティティ（自分であること）と価値と像を否定するように教育された。我々一人一人の内にある、真のアイデンティティ・価値・像はどれであろうか。もしかしたらエゴ、あるいはパーソナリティーがそうなのか。いや、そうではない。内観的精神分析によってエゴを超えて向こうに行き、「存在（ビーイング）」を発見することができる。

「存在（ビーイング）」、それこそが、我々の真のアイデンティティ・価値・像であるのは疑いの余地がない。「存在（ビーイング）」が、K・H、すなわちコスモス・マン、マン・コスモスである。前にも述べたように、不幸なことに、あやまって人と呼ばれている動物は、自分の内的価値を否定するようた自己教育して、この退廃した現代の物質主義に転落し、地上のありとあらゆる悪癖におぼれ、間違った道を歩いている。

我々の内部で主観的に靈感を受けた、否定的な文化を受け入れて、抵抗が最も少ない道歩くことは、愚かなことである。不幸なことに、現代の人々は、抵抗が一番少ない道を進み、現代の偽りの物質主義を受け入れて自分の心理の内に居すわるのを放任するか、もしくは許容する。そのようにして、「存在（ビーイング）」の真の価値を否定するようになる。

V. 「存在（ビーイング）」の簡潔な行い

「『存在（ビーイング）』の簡潔な行い」は、我々ひとりひとりの真実の「存在（ビーイング）」が、ピタゴラス表のように正確で総合的、数学的な方法でシンプルに表れたもの、その簡潔な行為である。

「存在（ビーイング）」の簡潔な行いについてじっくり考えてもらいたい。あの高いところ、天国、廣大無辺の宇宙、星みちる宇宙において、あらゆる行いは方程式と正確な公式の結果であることを忘れてはならない。このように、単純な論理的

推定により、いつもの価値を越えた我々の本当の姿（イメージ）、心の内奥の宇宙人間は完全である、ということを声高に断言しないといけない。

しかし自分自身の「存在（ビーイング）」の乗り物として奉仕したが、本当のところは神意を理解しなかった人の悲しむべきケースもあった。

「存在（ビーイング）」のひとつひとつの行いは、疑いもなく方程式と正確な公式の結果として生じたものである。イメージ、価値、アイデンティティを変えることのできた人を通して、「存在（ビーイング）」がなんとか表現したケースがあった。そのとき、その人は実際に預言者、覚者となった。

誰かが「存在（ビーイング）」の乗り物として奉仕しても人類の利益のために無欲に働かないとき、「存在（ビーイング）」の簡潔ないっさいの行いの方程式と正確な公式とは何かをいまだ理解していない。ただ「行いの結果を放棄する」者、なんの報酬も期待しない者、同胞の利益のために愛ゆえに力を尽くそうという気になる者のみが、「存在（ビーイング）」の簡潔な行い」を確かに理解したのである。

繰り返すが、完全な自己変革を成しとげる必要がある。イメージ、価値、アイデンティティは変化しなければならない。地上の人間の若々しいイメージを持つのは何と美しいことか。けれども、まさにここで生身のからだに魂のこうごうしいイメージを持たなければならならず、そのほうがより良い。

「エゴ」のまちがった価値を持つかわりに、「存在（ビーイング）」のポジティブな価値を心とマインドに持つべきである。下品なアイデンティティを持つかわりに、「存在（ビーイング）」に仕えるアイデンティティを持たないといけない。

「存在（ビーイング）」の権化に変わる必要性について深く考えよう…。

「存在（ビーイング）」は「存在（ビーイング）」であり、「存在（ビーイング）」の存在理由はまさしく「存在（ビーイング）」だからである。「表現」と「自己表現」とをはっきり区別しよう。「エゴ」は表現できても、決して自己表現はできないだろう。「エゴ」はパーソナリティをとおして表現し、その表現は主観的である。おうむ返しをし、受け売りをし、他人の説明したことを説明するが、「存在（ビーイング）」の明白な自己表現はしない。

「存在（ビーイング）」の本当の客観的な自己表現は、考慮に値する重要なことである。「存在（ビーイング）」が我々を通して表現するときは、完全な方法で簡潔に表現する。

我々を通して言霊、「存在（ビーイング）」の言葉が表現するためには、内なる精神分析をもとに「エゴ」を崩壊しなければならない。

自己愛

女性の虚栄心については多くのことが言われてきた。実際、「虚栄心」とは自己愛が強烈に表れたものなのである。

鏡の前にいる女性は、自賛し、狂ったように自分に心酔する完全なナルシスト（自己陶醉者）である。ただ単に「かわいいわ」「きれいね」「ステキ」などと言われたいがために、女性は誰にも劣らないほど着飾り、化粧し、髪をカールさせる。

「我」はほめられるといつも喜び、他人に賛美されるためにおめかしをする。「我」は自分が美しく清純で、言葉では言えないほどすばらしく、聖人のようで、有徳だなどと信じる。誰も自分を悪人とは思わず、みな正義感のある善人だと思い上げる。

「自己愛」とは恐ろしいものである。たとえば唯物主義の狂信者は、自尊心ゆえに宇宙空間の高次元といったものを認めない。彼らは自分自身をおおいに愛し、宇宙空間、コスモスがある高次元、そしてすべての超感覚的生物の住む高次元が、自分の個人的な気まぐれに従うように当然のごとく要求する。彼らは狭い物の見方と理論、自分の愛する「エゴ」とマインドの指示を越えることはできない。

死は「エゴ」の宿命的な不幸な問題を解決できない。ただ「我」の死のみが人間の苦悩の問題を解決できるが、「我」は自分自身を愛し、決して死にたくはない。

「我」の存在する間、輪廻の輪、人間の悲劇の宿命の輪はまわりつづけるだろう。

本当に恋愛しているとき、私たちは「我」を捨て去る。実際に恋をしている人を人生において見つけるのはごくまれである。誰もが夢中になるが、それは愛ではない。好きな人と出会うと人々は夢中になるけれども、その人の中に自分自身の誤

り、性質、欠点を見つけるとき、愛する人は自分をそっくり映し出すことのできる鏡になる。実は恋人と恋に落ちたのではなく、ただ自分自身と恋に落ちて、恋人という鏡のなかに自分自身をながめて楽しんでいるのである。そこで二人は出会い、恋をしているとそのとき考える。「我」は鏡の前で喜び、あるいは自分と同じ性質、美德、欠点をもつ人のなかに自分自身を見て幸せを感じる。

自己愛をなくして初めて、マインドをデータから解放して初めて、「我」のない状態で真理というものを体験できるのである。

説教師は真理についてたくさん話すが、我々の中に自尊心が存在するときに、どうして真理を知ることができよう。

本書『弁証法の革命』を非難する人が多くいるだろう。記憶した「マインドのデータ」と複雑な理論にこれらの教えが一致しないために、あいかわらず、にせ賢人は革命的なくわだてをあざ笑うだろう。

マインドのデータ、理論、先入観などから解放されて、学者は自発的に革命的心理学を聞くことができない。統合的なマインドで、正反対の物事どうしの闘いで分裂しないマインドで、新しいものに心を開くことができない。

学者は記憶に蓄積したデータと比較するために耳を傾ける。ただ偏見と先入観という言葉にもとづいて翻訳するために聞くだけで、『弁証法の革命』の教えは幻想であるという結論に達するにすぎない。学者とはいつもそういうものであり、そのマインドはすでに退廃しきっているために新しいものを発見できない。

傲慢にみちた「我」は、すべてがその理論とマインドのデータに一致することを望んでいる。「我」はその気まぐれがすべて通り、宇宙全体がその研究室の実験に従うことを望む。

「エゴ」は自尊心を傷つける者すべてを嫌う。「エゴ」はその理論と先入観を崇拜する。

これといった理由もなく誰かを嫌悪することがしばしばある。どうしてか。ただ単に、我々が隠しもっている間違いをいくつか、その人が体現しているからにすぎない。

いが、他人がその欠点を見せたくないからである。実際、他人に難癖をつけるその間違いを、我々は心理の奥底に宿している。

この世で完全な人はひとりもない。我々はみな同類である。我々ひとりひとは、偉大なる現実の懷に潜む悪い殻なのである。

人はみなある方面では欠点がなくとも、別の方面では欠点を持つ。お金を渴望しなくとも、名声、名誉、愛などを渴望する人もいる。そうかと思えば人妻と姦通しなくとも、教義面で姦通し、宇宙友愛結社の名において信条をまぜこぜにして楽しむ人もいる。

自分の妻を嫉妬しなくとも、友情、信条、物事に嫉妬する人もいる。そのように人間はいつも同類である。

自分自身を崇拜しない人間はいない。自分自身のこと、自分のすばらしさ、才能、美德などについて話して何時間も楽しむ人々のことを我々は聞いてきた。

エゴは自分を愛しすぎて、他人の財産をうらやむ。ひとつには虚栄心ゆえに、またひとつには他の女性をうらやましがらせるために、女性はいろいろなもので着飾る。全員が全員をねたむ。全員が他人の服装、すてきなネックレスなどをねたむ。女性はみな自己礼賛し、他人よりも劣っていると思いたくはないのだ。100 パーセント、ナルシストである。

自賛しすぎて、このうえなく謙虚な聖人だと思い上がった、偽の神秘家や多くの宗派の兄弟もいる。自分の謙虚さに傲慢を感じているのである。彼らはひどく傲慢である。

心の底で神聖さ、すばらしさ、魂の美しさを鼻にかけない、偽の神秘家の兄弟はいない。

親愛なる「エゴ」はあまりにも自賛し、人がそう言わないときでさえ、完全な善人だとうぬぼれる。

自分が悪人や極道だと信じる、偽の神秘家の兄弟はひとりもない。実際には意地悪なうえに凶悪なときでさえ、みな完全な聖人だとうぬぼれる。

アヒンサー、非暴力

「アヒンサー」は「非暴力（不殺生）」という純粋なインド思想である。アヒンサーは普遍的愛から実際に思いついたものである。「ヒンサー」は「殺したいこと」「害したいこと」を意味するので、「アヒンサー」は暴力によるいっさいの殺意や害心の放棄である。

アヒンサーは利己主義の反対である。アヒンサーは利他主義と絶対的愛である。アヒンサーは正しい行いである。

マハトマ・ガンジーはアヒンサーを政策の支えとした。彼はアヒンサーのデモを次のように定義した。「非暴力とは悪との真の戦いをすべて放棄することではない。私が考えるような非暴力は、悪に対して法服よりも悪に対するより積極的でより現実的な戦いである。法服の性質そのものが、凶悪さを大きくするという結果をもたらす。私は不道徳とは対照的に精神的な抵抗をうちたて、それゆえに道徳をうちたてる。肉体の抵抗を示さないときに、より優れた鋭利な剣を交えることによってではなく、暴君を失望させることによって、私は彼の、__剣をさびつかせようと試みる。彼は攻撃を避ける霊の抵抗を私のなかに見いだすだろう。この抵抗は初めのうち暴君の理性をうばい、すぐに彼は屈伏せざるをえなくなるだろう。そして屈伏するという事実が、侵略者を辱めるのではなく、侵略者に威厳を添えるだろう。…」。

よく導かれたマインドよりも強力な武男は存在しない！

あわれにも苦しむ人類を分裂させ、裏切り、混乱させるのが「エゴ」である。利己主義、裏切り、友愛の欠如によって人類は引き裂かれてしまった。

「我」を創造したのは神でも魂でも、また物質でもない。我々自身のマインドが創造したのであり、マインドのすべてのレベルで「我」を完全に理解したとき、消滅するだろう。ゆいいつ正しい行い、正しい瞑想、正しい意志、正しい生計、正しい努力、正しい記憶によってのみ「我」を溶解できる。本当に『弁証法の革命』を望むならば、このことすべてを深く理解するのは緊急に必要である。

パーソナリティーはエネルギーで、幼児期に習慣、癖、概念などから生まれ、人生体験を重ねるごとに強くなる。パーソナリティーも「我」も崩壊しないといけ

ない。心理学の教えに関して、我々はグルジェフやウスペンスキーよりも革合的である。

「パーソナリティー」を「我」と取り違えてはならない。実際、パーソナリティーは幼時期の七年間に形成される一方、「我」とは永遠に生き続ける誤りで、「繰り返し」の仕組みによりますます強大化していく。

「我」は行動手段としてパーソナリティーを使う。「パーソナリズム（人格主義）」は「エゴ」とパーソナリティーの混ぜ合わせから生じたものである。パーソナリティー崇拜は「我」が創案した。事実、パーソナリズムが利己主義、憎しみ、暴力などを生み出す。アヒンサーは上れをすべて拒絶する。

パーソナリズムは秘教団体を完全に崩壊させる。無秩序と混乱をもたらすパーソナリズムは、どんな団体も完全に破壊しうる。

再統合（帰還）のたびに「エゴ」は新たなパーソナリティーを創造する。各人は新たな肉体との再合体のたびに異なる。

生き方を知ることは急を要する。「我」を溶解するとき、偉大なる現実、真の幸福、名前のないそれが、我々のところにやってくる。

「存在（ビーイング）」と「我」とを区別しよう。現在の人間は「我」しか持っていない。人間はいまだ成就していない存在である。「存在（ビーイング）」を獲得することは急を要し、「存在（ビーイング）」が無限の幸福であることを知る必要がある。

「存在（ビーイング）」が「優れた我」、「神聖な我」等であるというのは馬鹿げている。「存在（ビーイング）」は普遍的、宇宙的なので「エゴ」をみじんも持たない。「我」を神格化しようとしてはいけない。

アヒンサーとは思考、言葉、行為における非暴力である。アヒンサーは他人の考えを尊重し、すべての宗教、スクール、宗派、団体などに対して尊敬の念を抱くことである。

「我」は決して完全にならないので、「我」の進化を期待してはいけない。我々には全面的な意識革命が必要である。我々の認める唯一の革命がこれである。

我々は一瞬一瞬死ぬにつれて、人と人との親交がゆっくりと深まっていく。一瞬一瞬死ぬにつれて、協調性の意識が完全にライバル意識と入れかわっていく。一瞬一瞬死ぬにつれて、少しずつ善意が悪意と入れかわっていく。

アヒンサーの教義は『弁証法の革命』に、意識革命に基づいている。

善意にみちた人間はアヒンサーを受け入れる。非暴力の教義をはずして、心理に新たに秩序をもたらすことに着手できない。

「完全なる結婚」の道を歩みながら、家庭内でアヒンサーをつちかうべきである。思考、言葉、行為において非暴力をつらぬいてのみ、家庭に幸福がもたらされる。

アヒンサーは、職場、仕事場、田舎、家庭、通りなどで、日常生活の土台となるべきである。私たちは非暴力の教義を生きるべきである。

集団行動

「集団行動」とは人間機械が無差別に、全く区別なく、他の人々と交わる傾向である。

集団や群衆の中にいるとき人が何をするか見てみよう。思いきって通りに出て、誰かに石を投げる人はほとんどいないと私は確信する。しかし集団ではそうする。デモに参加して熱狂にあおられた際に、群衆といっしょになって石を投げるかもしれない。たとえ後になって「自分は どうしてそんなことをしでかしたんだろう」と自問しても、である。

集団の中の人間は、とても異なった振る舞いをする。ひとりでは決してしないことをしでかす。それはなぜだろうか。それは、否定的な印象のせいで、彼は自分一人では決してやらないであろうことをする扉を開き、結局やってしまうからである。

否定的な印象に扉を開くとき、心臓にある感情センターの秩序を乱すだけでなく、それを否定的にしてしまう。たとえば誰かに傷つけられて、怒りにみちた人の否定的感情に扉を開くとする。そのとき、傷つけた人に対してその人としまいには手を結び、事件とかかわっていないにもかかわらず立腹することになる。

仮に酔っぱらいの否定的な印象に扉を開くとしよう。酒を一杯それから二杯、三杯、十杯と受け、結局、自分も酔っぱらってしまう。

異性の否定的な印象に扉を開くと、おそらく不倫や、ありとあらゆる罪を犯すだろう。

麻薬中毒者の否定的な印象に扉を開いたならば、おそらくマリファナを吸い、あるいは気力を失わせるあらゆる種類の麻薬を吸いつくす結果になる。結論として失敗するだろう。

誰かが光、美、調和、喜び、愛、完全性という肯定的な感情を我々にもたらすならば、心の扉を開こう。しかし、憎しみ、暴力、嫉妬、麻薬、アルコール、姦淫、不倫という否定的な感情をもたらすならば、どうして心の扉を開かないといけないのか。扉を閉じよう！否定的な感情に対しては扉を閉じよう。

集団行動を考察するとき、完全にそれを修正し、人生を改善できる。

言葉のゆがみ

大砲の音、その爆発音で窓ガラスが割れる。筆法、やさしい一言が怒りや憤りを静める。しかし不調和な卑語ひとつで、いらだちや憂鬱、悲しみ、憎しみなどが生じる。

沈黙は金なりと言うけれども、黙るべきときに話すのは、話すべきときに黙るのと同様にまちがっていると言う方がいい！

罪深い沈黙があれば、卑語もある。話した言葉のもたらす結果を高潔に予測すべきである。言葉で無意識に他人を傷つけることがしばしばあるから。

「悪意にみちた言葉はマインドの世界に姦淫をもたらす」。そしてリズムの不整な言葉は、宇宙のマインドの世界に暴力を生む。

言葉で決して誰をも責めてはならない。なぜなら、決して誰をも裁くべきではないからだ。かげぐち、うわさ、中傷がこの世を悲しみと苦しみに満たした。

「性の超力学」で働くならば、創造エネルギーはあらゆる種類の変化にさらされることを理解せねばならない。これらの「性的衝動」のエネルギーは、光のパワーか闇のパワーに変わりうる。すべては言葉の質による。

完全な人間は完全な言葉を話す。『弁証法の革命』の道を歩むことを望むノーシス学は、言葉のコントロールを習慣とせねばならない。言葉を意のままにあやつる方法を学ばなければならない。

口からはいるものは人を傷つけることはない。かえって、から出るものが人を傷つけるのである！〔『マタイ福音書』15：11〕口は侮辱、陰謀、中傷、名誉棄損、論争をもたらす。これらすべてが人間を害するものである。

あらゆる種類の狂信的行為のため人に、隣人に大きな害を与えるので、それを避けなさい。他人を卑語や洗練された芸術的な皮肉で傷つけるだけでなく、声の調子、不調和でリズムの不整なアクセントでも傷つけてしまう。

聴き方を知る

聴き方を覚えないといけない。そのためには意識を覚醒させないといけない。

聴き方を知るためには、ここにいる方法を知らないといけない。傾聴者はいつも心理の国と都市へ逃れる。

人間のパーソナリティーは聴き方を知らず、同様に肉体はその乗り物なので肉体も聴き方を知らない。

人々は自分自身のこと、自尊心、自分の能力、理論でいっぱいである。

知識の入る、言葉の入る片隅や余地すらない。キリスト的な言葉を受けるためには仏陀のように腕を上向きに持つべきである。

心理的に聴くことはとても難しい。聴き方を知るためには注意深くなることを覚えないといけない。言葉をもっと受け入れないといけない。

人々は自分の心理の家にはいないというよりも、その外にいるために、前世を思い出さないのである。

自分自身を思い出さないといけない。一日の間、できるかぎり肉体をリラックスさせねばならない。

「存在（ビーイング）」を忘れるがゆえに、人々は多くのあやまちを犯す。自分自身を想起すると、素晴らしいことが起こる。

相談は必要だが、重要なのは聴き方を知ることである。聴き方を知るためには、感情センター、運動センター、思考センターにすごく注意を払わないといけない。

誤った教育は聴くことを妨げる。まちがった教育は人間機械の五つのセンターつまり思考、運動、感情、本能、性センターを害する。

マインドのデータ、理論、先入観から解放された自然なマインドで聴かないといけない。統合的なマインドで、正反対の物事どうしの闘いで分裂しないマインドで、新しいものに心を開かないといけない。

用語の正確さ

ソクラテスは、弁証法の基礎として用語の正確さを要求していた。我々の『弁証法の革命』では基礎として言葉の正確さを要求する。

人間の特徴である言葉は、個人の表現手段であり、また人間どうしのコミュニケーションの手段である。言葉は外的言語の乗り物であり、複雑な内的言語の流出や表現したものだが、「存在（ビーイング）」か「エゴ」のどちらかが言葉を使用する。

プラトンは対話篇『パイドン』のなかで自分の弟子のひとりに、慣用語法の正確さという人間の原理として、その奥深さと道徳の鋭さで有名なひとつの考えを述べていた。プラトンはこう言っている。「クリトンよ、不正確な話し方は言い間違っただけでなく、ある種の害を魂にもたらす。そのことを知りなさい」。

問題を解決したければ、考えることをやめるべきである。あらゆる意見は議論しうる。問題について瞑想して解決しないといけない。マインドと心で問題を解決する必要がある。自分ひとりで考えることを覚ええないといけない。オウムのように他人の意見をくりかえすのは馬鹿げている。

「エゴ」が消滅すると、マインドの「意見を選択する過程」は消える。意見とは、他コンセプトのが本当かもしれないという恐れによる概念の表出であるが、これは無知のしるしである。

問題を同一視しない方法を学ぶことは急を要する。まじめに自分を調査し、それからマインドと言葉の面で沈黙を守る必要がある。

心理的ロボット

知的動物は、機械的な車輪でプログラムされたロボットに似ているが、過去世と同じ動きを繰り返しかえして生きるので、時計にも似ている。

まちがって人間と呼ばれる人は、何もせず、すべてが自分に起こる心理的ロボットである。「存在（ビーイング）」は、行う唯一のものである。「存在（ビーイング）」は機械的な実体ではないので、望むものを生み出す。

知的ロボットであることをやめないといけない。ロボットはいつも同じことを繰り返しかえし、自律性を持たないからである。

心理的なロボットは月の法則に影響される。繰り返し、誕生、死、憎しみ、利己主義、暴力、思いあがり、傲慢、自惚れ、際限ない貪欲等。

私たちは恒久的な垂心を創造し、月から独立するために、性の超力学で働かないといけない。

心理的なロボットであることをやめるために自分自身を支配する必要がある。ファウストはそれを成し遂げたが、コルネリウス・アグリッパは理論づけを始めたために出来なかった。^{4***}

⁴ * ファウスト博士 DR. FAUST・・・シェイクスピアの作品に登場する実在の人物。秘教の大魔術師。他にもいろいろあるが、ある公演でトロヤのヘレネを物質化させた。別のときウィーンの祝宴でファウストを呼んだ人々は、当日プラハにあった門を通して彼を出現させた。不可視になる鍵を知っていた。（『ノーシス秘教事典』）

* コルネリウス・アグリッパ CORNELIUS AGRIPPA・・・1486－1535 中世の有名な秘教家。尊敬すべきグランド・マスターであるアバド・トリテモの弟子。むなしい主知主義に多くの時間を費やしたため大作業を終えるにはいたらなかった。（『ノーシス秘教事典』）

人々は世界開発に興味をもつが、自己開発はもっと重要である。自分自身を開発する者は、世界を支配するからである。なぜなら、自分自身を利用している者が世界を支配するからである。

人間になり、それから超人になりたい心理的なロボットは、音を維持する能力を発達させないといけないだろう。人が本当に機械であることをやめたいとき、最初の危機ミーファ、それから第二の危機ラーシを通過しないといけない。

危機を克服して心理ロボットであることをやめるための勝者の鍵は、「選択」「変化」「決心」である。ワーク全体は七つの音階（はしご）で行い、宇宙のニリオニッシアン音を獲得する。

怒り

怒りは、その原因となる問題を解決する能力と思考能力を奪いさる。明らかに怒りはひとつの否定的感情である。

敵対する二人の怒りの否定的感情は、平和も創造的理解ももたらさない。

疑いなく、怒りを他人に投射して、他人も自分と同じように怒っていると思うときはいつも、自分のイメージは崩壊し、相互関係の世界でこれは決してあるまじきことである。

怒りのさまざまな過程のために社会的、経済的、心理的にひどく失敗する。また怒りが健康にも影響することははっきりしている。

ある種の優越感を味わうため、怒りを楽しむ愚かな人々がいる。この場合、怒りは傲慢と結びついている。

怒りはまたうぬぼれ、さらには自信過剰とも結びついているのが常である。温厚は怒りよりもはるかに圧倒的な力である。

激論とは相手を納得させない、ただの興奮である。怒りに直面するとき、ふさわしい種類の感情を決断し、選ぶべきである。

優しさと理解は怒りよりも優れている。それらは怒りを克服できるので、永続的な感情である。

怒りに支配される人はみな、自分のイメージを破壊する。完全に自制する人間は、常に頂点に立つだろう。

欲求不満、恐怖、疑い、やましさは怒りのさまざまな過程を引き起こす。それらは怒りをもたらす。これら四つの否定的感情から自由になる者は、世界を支配するだろう。否定的な激情を認めることは、自重しないことである。

怒りは狂人のもので、役には立たず、我々を暴力にかりたてる。暴力の目的は我々を暴力にかりたてることであり、暴力はさらに暴力を生む。

パーソナリティー

パーソナリティー（人格）は多重で、多くの背景をもっている。そこには前世のカルマ、成就しつつあるカルマ、または結実しつつあるカルマがしまいこまれている。

未消化の印象は新たな精神的集合体（心理的付着物）となり、さらに深刻なことにはいくつものパーソナリティーとなる。パーソナリティーは同質のものから構成されているのではなく、異質のものからできていて複数である。

人生の物事を選びとるのと同様に、印象を選ばないといけない。

ある瞬間、新たな出来事の前で自分自身を忘れるならば、新たな「我」が形成され、それらの「我」がとても強力ならばパーソナリティーの中に新たなパーソナリティーがいくトラウマつか形成される。このようにして多くの心の傷、コンプレックス、葛藤ができていく。

パーソナリティーの中に宿るパーソナリティーのすべてが受け入れられるわけではなく、これが多くの心の傷、コンプレックス、恐怖症などを生み出す。

パーソナリティーの中にパーソナリティーを形成する、受け入れられない未消化の印象は、恐ろしい葛藤の原因となる。

とりわけパーソナリティーの多重性を理解する必要がある。パーソナリティー自体は多数の部分からなる。

心理的集合体を崩壊できても、パーソナリティーを崩壊しないならば、正真正銘の悟りと生きる幸せを手に入れることはできないだろう。

自分を知れば知るほど、ますます他人を知るようになる。「エゴ」のある人は物事ははっきりと見ないし、まちがいを犯す。「エゴ」をもつ人々は「判断力」を欠くため、その分析にたとえすばらしい論理性があっても失敗する。

印象を消化しないと新たな「我」が創造される。印象を選ぶことを覚ええないといけない。

問題はよりよい生活ではなく、我々に関心があるのは変わることである。「人が変わって存在するのをやめたときに、「存在（ビーイング）」が出現する」。

我々の内面に宿る好ましくない要素は、知覚を支配するため、我々は幸せと喜びをもたらす統合的知覚ができない。

カテクシス

実行力として処理されるサイキック・エネルギー、「カテクシス」は恐るべきである。知性の蓄えは「存在（ビーイング）」のさまざまな部分であり、「縛られたカテクシス」あるいは静止した潜在状態にあるサイキック・エネルギーと呼ばれる。「縛られたカテクシス」は、「エゴ」の崩壊とマインドの解放に関するワークで我々の道案内をしてくれる。

「存在（ビーイング）」の価値は、「縛られたカテクシス」を形成する。

マインドに含まれる「縛られたカテクシス」は、心理革命と総合革命に関するワークで我々を導いてくれる。

ただ「縛られたカテクシス」のみが、取引分折と構造分析によって分離された、好ましくない心理的要素を崩壊することでマインドを解放できる。^{5***}

「縛られたカテクシス」は「自由なカテクシス」とは異なる。なぜなら「自由なカテクシス」は、「エゴ」がマインドと体を支配して表現するために使うサイキック・エネルギーだからである。

力強いサイキック・エネルギーである「縛られたカテクシス」が、我々の人生を導けるようにしないといけない。

「縛られたカテクシス」が活動して、「束縛されないカテクシス」を支配し管理できるよう、心理的に働かないといけない。「束縛されないカテクシス」とは体のエネルギーのことで、「エゴ」である「自由なカテクシス」に残念ながらいつも支配されてきた。

神秘的死

ルミシアル我々はノーシス運動のメンバーに大いに苦しめられてきた。多くの者が寺院の祭壇の前で忠誠を誓ってきたし、完全な自己実現を成就するまで大作業で働くことを厳かに約束してきたし、またノーシス運動から決して離れないことを誓い涙を流してきたが、すべてむなしかったと言うのは辛いことである。ほとんど全員が逃げ出し、ののしり、冒涇し、姦淫し、姦通する敵となり、暗黒の道へそれてしまった。実際、人間のこの怒るべき矛盾は、人間が宿命的な土台と悲劇的な基礎のうえに成り立っていることに原因がある。その土台とは複数の「我」、我々全員の内面に宿る複数の「自由なカテクシス」である。

「我」が人間の動物的な低い心の奥底で繁殖するサイキック・エネルギー、「自由なカテクシス」の集まりであることを知るのは急を要する。ひとつひとつの「自由なカテクシス」は、ある自主自立を満喫している小さな「我」である。

⁵ *取引分折、構造分析・・・1990年2月号ニューズ『弁証法の革命』第1章「III. 心理分析」を参照。

これらの「我」、これらの「自由なカテクシス」は相互に戦う。「新聞を読まねば」と知的な「我」は言う。「自転車に乗って散歩に出かけよう」と運動の「我」は反対する。「おなかがすいた」と消化の「我」が言う。「寒い」と代謝の「我」は言う。これらの「自由なカテクシス」をどれも守るために、「誰も私を阻止できない」と情欲の我は叫ぶ。

レギオンつまり「我」とは「自由なカテクシス」の軍団なのである。これらの「自由なカテクシス」はすでにフランツ・ハルトマンが研究していた。彼らは人間の心の低い動物的な奥底に住んでいる。ものを食べ、眠り、繁殖し、我々の生命力または「自由なカテクシス」つまり運動エネルギー、筋肉エネルギー、神経エネルギーを消費して生きる。全体として「自由なカテクシス」を構成する「エゴ」はそれぞれ、マインドのいろいろなレベルに投影され、その欲望がみたされることを渴望して旅する。「我」「エゴ」「自由なカテクシス」は決して完全にはなれない。

人間とは九つの門をもつ都市である…。この市内には面識すらない市民が大勢住む。この市民ひとりひとり、その小さな「我」ひとつひとつはその計画と自分のマインドをもっている。彼らはイエスが意志のむちで神殿から追い出さないとはいけなかった商人たちである。その商人たちは死なないといけなく。^{6***}

人にはどうしてこれほどの内的葛藤があるのか、今理解するだろう。「自由なカテクシス」が存在する間、安らぎはありえない。複数の「我」はすべての内的葛藤の「原因の原因」である。ノーシスに忠誠を誓う「我」は、ノーシスを憎む「我」と入れかわる。要するに、人間は「永続的重心」を持たない無責任な生き物なのである。人間は不完全な生き物なのである！

人間はいまだ人間ではなく、ただの知的動物にすぎない。「我」の軍団を「霊」と呼ぶのは大変なまちがいである。実際に人間のエッセンスの中には心霊的材料、霊の材料があるが、まだ霊を持っていない。

⁶* 「幸福は九門の町に住む。これを知る者は行動を放棄し、行動にまどわされることもなく、他人をまどわすこともない」。(『パガヴァッド・ギータ』熊澤教真訳)九門とは両眼、両鼻孔、両耳孔、口、生殖器官、排泄器官のこと。

*宮きよめ… 『マタイ』 21:12-13, 『マルコ』 11:15-17, 『ルカ』 19:45-46, 『ヨハネ』 2:13-17。

「真実の霊に対応する属性を享受するためには、水と霊とから生まれる必要がある。」〔『ヨハネ』3：5〕と語った。「神秘的死」を通過しないならば霊をつくれな
い。

「我」が死んではじめて、我々自身の内なるエッセンスの中に意識の永続的中心を
確立することができる。その中心が霊と呼ばれるものである。霊をもつ人間のみ
が、目的を本当に持続できる。ただ霊をもつ人間のみには内的葛藤がなく、真実の心
の安らぎがある。

怒り、貪欲（金銭欲）、好色、嫉妬、傲慢、怠惰、大食などの爆発で、「我」は愚か
にも心霊的材料、「カテクシス」を浪費する。当然だが、心霊的材料、「カテクシ
ス」を蓄積しない間は霊をつくれな。何かをつくるには原料がいるし、無から何
も生まれなないので、原料なしでは何もつくれな。

「我」が死にはじめると、原料がたまりだす。原料がたまりだすと、意識の永続的
中心が確立しはじめる。「我」が絶対的に死んだとき、意識の永続的中心は完全に確
立される。

「エゴ」が死ぬとき、エネルギーを消費する者がいなくなるので、心霊的材料の資
本は蓄積される。このようにして意識の永続的中心が確立される。その驚くべき中
心とは霊のことである。

ただ自分のなかに意識の永続的中心を確立した者のみが、ノーシスに忠実でありえ
るし、目的を持ちつづけることができる。その中心を持たない者は、今日ノーシス
にいても明日になるとノーシスに反対するかもしれないし、また今日あるスクール
にいても明日は別のスクールにいるかもしれない。この種の人々は真の人生を送る
ことな。

「神秘的死」は『弁証法の革命』の骨の折れる困難な分野である。

厳格な理解にもとづいて「自由なカテクシス」は溶解する。併人との共同生活、
人々との交際は、全身を映して見ることのできる姿見である。人々とのかわりに
おいて、隠れた欠点が飛び出して表面化し、注意していればそのとき欠点が見え
る。

あらゆる欠点はまず知的に分析し、それから瞑想で研究しないといけない。

物質界で完全な純潔と絶対的な清浄さを達成した人が多くいるが、高次の世界で試練を受けたとき、大変な姦淫者で恐ろしい罪人であることがわかった。彼らは物質界では欠点と縁を切っていたが、マインドの他のレベルでは相かわらず「自由なカテクシス」を引きずっていたのである。

マインドのすべてのレベルでひとつの欠点を完全に理解したとき、対応する「自由なカテクシス」は崩壊する。すなわちひとつの小さな「我」は死ぬ。

一瞬一瞬死ぬことは急を要する。「我」の死とともに霊が生まれる。「縛られたカテクシス」、「存在（ビーイング）」がじゅうぷんに表現するために、複数化した「我」が完全に死ぬ必要がある。

自由なカテクシスの溶解

「自由なカテクシス」「我」を詳しく研究して、はじめてそれを完全に溶解できる。

思考過程、欲望のいろいろな働き、パーソナリティーを形づくる癖、気晴らしの詭弁、「エゴ」のごまかし、性衝動を詳しく観察すべきである。外界の衝撃の前でこれらがどのように反応するのか研究し、そしてどのように結びついているのかを見ないといけない。

「自由なカテクシス」の、複数化した「我」のすべての過程を理解するとき、「我」は溶解する。そのときにのみ、我々を通して、我々の中に神が顕現する。

怠慢

怠慢と不注意ゆえに、すべての人間は失敗する。

怠慢 negligent とは言わば、Nec Legere、not to choose 「選ばないこと」「失政に身を任せること」である。

怠慢は「エゴ」から生じ、その反対のものは直観で、こちらは「存在（ビーイング）」から生じる。「エゴ」は選択も識別もできないが、「存在（ビーイング）」はそれができる。

ただ『弁証法の革命』を実際に生きることによってのみ、もう人生で失敗しないよう「選択」できるようになるだろう。

取引

人間の考えの 99 パーセントは否定的で有害である。ここにいる今の我々は、自分自身の思考過程の産物である。

正しいアイデンティティー、価値、自己イメージを望むならば、自分自身のマインドを自己調査しないとイケない。

奥深い内観分析の難しさは、「逆転移」にある。この難しさは、「構造分析」と「取引分析」によって取り除かれる。

トラウマとして心の傷となってマインドに巣くう、好ましくない精神的集合体を「分離」し、溶解することは重要である。

「取引分析」と「構造分析」は、「エゴ」の調査探究という問題で巧みに組み合わされている。

どんな精神的集合体もあらかじめ分離してから、最終的に溶解しないとイケない。

個人特有の心理的特徴

全人類は百パーセント機械的である。無意識に、眠りこけた意識で働き、どこから来てどこへ行くのかも知らずに眠ったまま生き、深い催眠術にかかっている。

自然全体に流れる集団催眠は、いまわしいクンダバッファー器官から生じる。この人種は催眠術にかかっていて、無意識で、もっとも深い眠りに落ちている。

覚醒は、「我」、つまりエゴを破壊することによってのみ可能になる。我々は、各人の特定の心理的特性（PCPT）について何度も話してきたことを、きわめて明確に認識しないとイケない。

確かに各人は個人特有の心理的特徴をもっていて、それは事実である。独特の特徴として好色家もいれば、憎しみをいだく人も欲ばりもいるだろう、などなど。「特徴」とは個人特有の心理的要素がいろいろ合わさったものである。

それぞれの PCPF には常に特定の出来事、明確な状況が存在する。男性が好色だったら？ 特定の問題をともなった淫らな状況が、その人生に付きまとうだろう。これらの状況はいつもくり返される。

高い精神レベル（「存在（ビーイング）」のレベル）に上昇して、「心理的特徴」を形成する好ましくない要素を取り除きたいならば、PCPF を知る必要がある。

人生にはひとつの具体的事実があり、これが「自然の不連続性」で、それは明らかである。すべての現象は不連続だが、進化によって完全無欠に決して達さないことをこれは意味している。言葉のもっとも完全な意味で、我々は真実の太陽人間に変わる必要がある。

つつしみ深い淑女のレベルがあれば、つつしみのない卑しい女性のレベルもある。いろいろな精神レベルがある。

自分自身の「存在（ビーイング）」のレベル、今いる「存在（ビーイング）」のレベルを、我々は既に自覚しただろうか。自分が催眠術にかかり眠っていることを意識しているのか。

知的動物は外界の事物と同一化するだけでなく、自分自身、淫らな考え、酔い、怒り、貪欲、うぬぼれ、虚栄心、神秘的傲慢、慢心などとも同一化する。

おそらく私たちは、外面だけでなく、虚栄心やプライドとも同一視しているということを考えたことがあるだろうか。たとえば我々は今日勝利した！しかし我々がその一日に勝ったのか、それともその一日が我々に勝ったのか。ある病的で強欲で傲慢な考え、侮辱、心配、借金などと本当に同一化しなかったのか。我々が日に勝ったのか、それともその一日が我々に勝ったのかどうか確信しているか。

今日は何をしたのか。我々のいる「存在（ビーイング）」のレベルをもう認識したのか。高等な精神レベルに達したのか、またはもとのレベルにとどまったのか。

ある特定の心理的欠点を取り除かないで、高等な精神レベルに達することができる
とおそらく思うかもしれないのか。おそらく今の「存在（ビーイング）」のレベルに
甘んじるのか。もし生涯同じ「存在（ビーイング）」のレベルにとどまるつもりなら
ば、それなら我々のしていることは何なのか。

それぞれの「存在（ビーイング）」のレベルにはある決まったつらさ、ある特定の苦
しみがあり、それは明らかである。苦しむこと、問題を持っていること、現状、戦
いに全員が不平を言う。それでは質問するが、知的動物は高等な「存在（ビーイン
グ）」のレベルに達することに関心があるのだろうか。

私たちは変わりたいだろうか？我々は、経済、政治、社会、精神、家族、欲望な
ど、我々を苦しめる問題をこれ以上抱えたくないのだろうか？我々は困難から自分自
身を救うことを望むなら、我々には、より高いレベルの存在へと移行する以外に選
択肢はない。

明らかに、今の「存在（ビーイング）」のレベルにとどまる間、すでに知っている逆
境、苦々しい思いをすべて再びくり返し味わわないといけないだろう。なんどもな
んども同じ苦境に立つだろう。

高等な精神レベルに歩を進めるごとに、「自由なカテクシス」の実行力から解放され
自立していくだろう。

知的な動物は苦しみを止めたいと願っているが、変化するために何もしない。「存在
（ビーイング）」のより高いレベルに進むために奮闘しない。それでは、どうやって
変化できるのだろうか？

したがって、自分の心理的特徴（PCPF）を知らないことは、非常にまずい。高等な
精神レベルに上昇して、その PCPF を構成する好ましくない要素を取り除きたいとい
うのであれば、PCPF を知る必要がある。でないと、どうやって高等な「存在（ビー
イング）」のレベルに移るのだろうか。

すべての現象は不連続である。進化論の教義は、我々が停滞する以外には役に立た
ない。私は、進化論の教義に閉じ込められ、時が自分たちを完成させるのを待ち、
何百万年も経っても自分たちが完成しない、偽秘教主義者や誠実で善良な人々を多

く知っている。なぜでだろうか? なぜなら、そのような人々は「存在（ビーイング）」のレベルを変えるために何もしないため、常に同じ段階にとどまっているからである。

したがって、我々は進化を超えて革命の道、つまり意識の革命、あるいは弁証法の道に進む必要がある。

進化と退化は全被造物に同時に作用する二つの法則であり、自然の機軸をなすが、決して「解放」には導いてくれない。

進化と退化の法則はまったく物質的で、「存在（ビーイング）」の内心の自己実現とは無関係である。我々はそれらの法則を否定しないし、存在はするが、心理革命には役立たない。我々は革命的になる必要が、意識革命の道に参入する必要がある。

革命的にならなければ、どのようにして高等な「存在（ビーイング）」のレベルに上昇できるのか。階段のステップを観察しよう。「存在（ビーイング）」のレベルがいろいろであるようにステップも不連続である。

ある特定の活動はそれぞれの「存在（ビーイング）」のレベルに属する。より高い「存在（ビーイング）」のレベルに移るとき、飛躍し、より低い「存在（ビーイング）」のレベルでしていた活動をすべてやめないといけない。

20 年、30 年、40 年前の人生のあのころのことが今でもふと思い出されるが、もう当時のことは超越した。なぜか。より高い「存在（ビーイング）」のレベルを見いだしたからである。それは私には最も重要なこととなった。

当時の私の活動は中止、中断された。なぜなら、より高い「存在（ビーイング）」のレベルには、まったく異なった別の活動があるからである。

より高い「存在（ビーイング）」のレベルに進むならば、今の我々の「存在（ビーイング）」のレベルに属する、現在重要な物事を多く捨てないといけない。

それゆえ他の「存在（ビーイング）」のレベルへの移行は飛躍をとめない、その飛躍は反抗的で、決して進化の部類には属さず、いつも革命的、弁証法的である。

自分を神々のように感じる人間、ぶしつけ者がいて、この種の人は最悪の種類、この上なく悪趣味な誇大妄想者である。にせ秘教の知識を頭に蓄えているからといって賢者気取りになる者、もう偉大なイニシエートだとうぬぼれる者はみな、誇大妄想に陥っていて、自分のことばかり考えている。

我々ひとりひとは泥にまみれた、つまらない虫にすぎない。私がそのように話すとき、まず私自身から始める。自分のことばかり考えたり、まちがった自己イメージをもったり、自分自身について空想をめぐらしたりするのは、低い「存在（ビーイング）」のレベルにいるということである。

たとえば大金や最新型のしゃれた車を持とうとしているとか、ガールフレンドが自分を愛しているとか、また自分は偉大な紳士や賢者だとか考えることで、自分自身と同一視している。自己同一視にはいろいろな方法がある。自分自身と同一化しないこと、それから外の物と同一化しないことから始めないといけない。

たとえば自分を侮辱する人と同一化しないとき、その人を許し、愛し、その人を傷つけることはできない。そしてプライドを傷つけられても、プライドと同一化しないならば、傷つかないので何の悲しみも感じられないのは明白である。

虚栄心と同一化しないならば、継ぎはぎのズボンをはいて通りを歩いても気にならない。なぜか。虚栄心と同一化していないからである。

まず最初に自分と同一化して、それから外界の虚飾と同一化するならば、許すことはできない。主の祈りを思い出そう。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしてください・・・」〔『マタイ』6：12、〔ルカ』11：4〕。しかし私は何かほかに言う。ただ単に許すだけでは不十分で、負債を清算しないといけない。敵を許せても、負債は決して清算できないだろう。誠実にならないといけないし、負債を清算する必要がある。

主の福音書は語る。「柔和な人たちは、さいわいである。彼らは地を受けつぐであろう。」〔『マタイ』5：5〕。これは誰も理解していない寸言である。幸いな人というのは、言わば恨みを抱いていない人(怒りっぽくない人)のことである。もし恨みを抱いていれば、どうして柔和でありえようか。恨みを抱いている人はいつも計算高い。「私は彼にとっても親切にしてやった…。保護し、十分にほどこしてやった。

とてもよくしてやったというのに、この友人ときたら私にどうやって報いたのか見てごらん。今では役立たずだ。」これが恨みを抱いている人の「打算」である。

恨みを抱いている人がどうして柔和でありえよう。恨みを抱いている人は、四六時中打算で動いて生きている。だから柔和ではない。どうして幸いになることができるよう。

「祝福される」とはどういう意味か。「幸福」とはどういう意味か。我々は幸せだと確信しているのが。誰が幸福なのか。「私は幸福だ」「人生に満足している」「幸せだ」と言う人々に会ったが、その彼らがこう言うのも聞いた。「誰それにイライラする」「あいつは気に食わない」「私の熱望したことがなぜ起こらないのかわからない」。それなら彼らは幸せではなく、実は偽善者であり、それだけのことである。

幸せでいるのはすごく困難であり、そのためには、何よりもまず「柔和」になる必要がある。

「祝福されている」という言葉は「内なる幸福」を意味する。それも千年後のことではなく、今ここにおける、我々が生きているまさにこの瞬間の「内なる幸福」である。

もし同一視をしないことによって本当に柔和になれば、そのとき我々は幸福になるだろう。しかしただ単に好色、憎しみ、復讐、恨み、憤りの考えと同一視しないだけでなく、「セトの赤い悪魔たち」、心理的欠点を具現する精神的集合体を自分の中から取り除く必要がある。

たとえば、我々は恨みの過程を理解しなければいけない。恨みを「分析」しなければいけない。恨みは内面に自尊心をもっていることによるという結論に達するとき、自尊心の「エゴ」を取り除くために我々は葛藤する。しかしそれを取り除くためには理解が必要である。あらかじめ理解していないならば、自尊心の「エゴ」は取り除けないだろう。

それを取り除くためにはデビ・クンダリーニ・シャクティが必要となり、ただ彼女のみが、自尊心の「我」を含むどんな心理的欠点も崩壊できる。

自分が誰に対しても恨みを抱いていないと確信しているだろうか。誰に対しても恨みを抱いていないし、また損得の計算をしていないと、我々の誰が確信しているというのか。いったい誰が。

月の機械から解放されたいならば、恨みと自尊心の「我」を自分自身から取り除かねばならない。このことを理解していくとき、最終的解放にいたる道を進む。

我々の内面に宿るそれらの非人間的要素を実際に焼却できるのは、牡羊座の火、子羊の火、受肉した牡羊の火、インティモ・キリストの火によってのみであり、そして意識が瓶詰め状態から解放されていくにつれて、覚醒していくだろう。

全体として「私自身」「我」「自由なカテクシス」を構成する、精神的集合体のなかに閉じこめられたままでいるかぎり、意識は覚醒できない。今ここで「神秘的死」を体験する必要がある。一瞬一瞬死ぬ必要があり、ただ死とともにのみ新しいものが出現するにすぎない。胚が死ななければ植物は生まれない。我々は生き方を学び、我々が宿す月の遺産から自由になる必要がある。

ワークの方法論

PCPF（個人特有の心理的特徴）を知って取り除く前に、一般にすべての欠点に関して熱心に働きかけるべきである。なぜなら PCPF は、過去生から来るとても根深い原因をもっているからである。PCPF を知るためには、「ワークの方法論」を用いて最低五年間は疲弊することなく働きかけることが必要となる。

ワークには「秩序」が、欠点の除去には「正確さ」がないといけない。たとえば日中、ある人に好色の欠点が朝にあらわれ、傲慢の欠点が昼にあらわれ、怒りの欠点が晩にあらわれたとする。疑いもなく、相つぐ「出来事」と「表現」を見ている。そのとき、日中現れたどの欠点に、どのようにして働きかけるべきかと自問する。

実際のところ答えは単純である。夜、または瞑想の時間に、身体をリラックスさせ、続いて日中の「エゴ」の出来事と表れについて回想エクササイズに移る。それを再構築し、整理し、順番を決めたら、理解のワークに取りかかる。

まずひとつのエゴの出来事について取り組み、それに約 20 分間を費やす。それから他の心理的出来事に 10 分間費やし、他のエゴの表現に 15 分間費やす。すべては「エゴの出来事」の重大さと深刻さによる。

「自由なカテクシス」、「我自身」の出来事と表現を整理し終えたら、夜、または瞑想の時間に静かに順序正しく取り組むことができる。

ある欠点、出来事、表現についてワークするたびに、「発見」、「審判」、「処刑」という三つの要素を用いる。三要素はそれぞれの精神的集合体に適用される。エゴの行動、表れを見たときに発見する。エゴのすべての原因を知るとき、判定を下す、つまり理解する。聖なる母クンダリーニーの助けをかりて、性の超力学の賢明な実践により処刑する。

気晴らしの詭弁

「詭弁」とは、かん違いさせる偽りの推論であり、潜在意義の 49 段階で「エゴ」が考え出したものである。

思考の炎が燃え、「気晴らしの詭弁」が練られる過去の墓、それが潜在意識である。気晴らしの詭弁が知的動物を魅惑に誘い、そのため意識の眠りに引きこむ。

墓の中にあるものといえば死者の骨と腐敗物で、墓石は大変きれいだが、その上には知性の炎が致命的に燃えている。

我々が「我」を溶解したいならば、潜在意識の墓をあばき、過去の腐敗物と骨をすべて掘り出さなければならない。墓の外側はとても美しいが、内側は汚く、いまわしい。我々は基掘り人夫になる必要がある。

その人自身のためを思い、たしなめる時には、いとも簡単に他人を侮辱し、その心の奥に秘めた感情を傷つけ、屈辱を与えてしまう。怒りっぽい人、また憎んでいるとは考えなくても自分では気づかずに憎む人は、そのように考える。

金持ちになろうとして一生のあいだ悪戦苦闘する人が多くいる。彼らは働き、貯金と節約をし、どんなことにでも一生懸命になるが、そのすべての行動の密かな原動

力は隠れた「羨望」である。それは未知のまま真には現れず、潜在意識の墓にしまいこまれている。

美しい家、真新しい新車、リーダーの知性、美しい服、立派な社会的地位、莫大な財産などを羨まない人を人生において見つけるのは困難である。

ほとんどいつも市民の最大限の努力の密かな動機は「羨望」である。

食欲に恵まれ、暴食を嫌うが、いつも異常なくらい食べすぎる人々が多くいる。

配偶者をあまりにも監視する人々が多くいるが、彼らは嫉妬を嫌う。

お世辞や賞賛を嫌う人は多いが、彼らはパンを買うための小銭を得ることだけを目的として詩を書いた貧しい詩人を、謙虚さで辱めることに何の抵抗も感じない。

ある種の偽の秘教の学校や偽のオカルトの学校の生徒が多くはこの世の物事を軽蔑し、何事にも精を出さない。それはすべてが虚しいからだが、美德には熱心で、怠惰だと見なされるのを決して認めない。

義務を果たす方法を知る裁判官は多くいるが、義務の徳のために他人を暗殺した裁判官も多くいる。フランス革命のギロチンで多くの人が処刑された。

死刑執行人はみな義務を果たし、今ではその無実の犠牲者は無数にいる。死刑執行人は自分が悪いとは思っていない、みな義務を果たすからである。

刑務所は無実の人が溢れているが、裁判官は義務を果たしている所以自分が悪いとは思っていない。

怒りにみちた父や母は小さな幼児のお尻をぶったり殴ったりするが、おそらく義務を果たしている所以、良心の呵責は感じない。残酷だと見なされないかぎり、すべてを認めるだろう。

静かな沈黙したマインドで深い瞑想に沈んではじめて、潜在意識の墓の中から、内面にひきずっている秘密の腐敗物をすべて取り出すことができる。過去の腐敗物と人骨すべてがおさまった陰鬱な墓を見るのは、気持ちのいいものではない。

隠れた欠点はそれぞれ墓のなかで悪臭を放っているが、見たところ、それを燃やして灰にするのは容易である。

「理解」の火によって過去の腐敗物は灰になる。多くの心理学生は潜在意識を分析する際、分析者と被分析者、インテレクトと潜在意識、主体と客体、知覚者と知覚の対象とを分けるという間違いを犯す。

この種の分割は、「エゴ」が考え出す「気晴らしの詭弁」である。それはインテレクトと潜在意識との間に対立と葛藤をもたらし、葛藤と動揺のあるところにマインドの沈黙と静寂はありえない。

ただマインドの静寂と沈黙によってのみ、潜在意識の陰鬱な墓の中から過去の腐敗物をすべて取り出すことができる。

自分の「我」は羨望、憎しみ、嫉妬、怒り、好色などを持っていると言わず、自分を分割しないことが最善であり、自分は羨望、憎しみ、嫉妬、怒り、好色などを持っていると言う方がいい。

インドの聖典を研究すると、至高なるブラフマンについて、またアートマンとブラフマンとの合一について考えることに夢中になる。しかし、実際のところ、「気晴らしの詭弁」を弄する心理的「我」がひとつでも存在する間、生命の普遍的魂と合一するという幸せは得られないだろう。「我」が死んだとき、生命の普遍的な魂はランプの炎のように我々の中にある。

エゴのべてん

「エゴのべてん」は無制限にだます習慣であり、一連の「我」を通して処理する。

卑怯で愚かな自殺者なら皆そうするように、誰でも自分の頭を撃ち抜くという間違いを犯す可能性があるが、心理学で有名な「我」は決して自殺できないだろう。

あらゆる偽の秘教の学校の人々は、壮大な理想さらには崇高な意図まで持っているが、それはみな惨めにも主観的な頭の中に存在しつづけ、「我」のものである。

「我」はいつも凶悪でねじれており、うるわしい美德で着飾ることが時々あり、それどころか神聖な衣裳をまとうことすらある。

「我」は存在しなくなることを望む時、無欲で純粋な方法でそれを行うのではなく、別の方法で生き延びたがり、報いと喜びを切望する。

生活が機械化された近頃、自動車、飛行機、刻印機などが大量生産されている。すべてが大量生産に変わってしまったが、「我」自身も大量生産されている。

我々は一連の「我」を知るべきである。「我」は、思考、感情、欲望、憎しみ、習債などの一連の流れで処理される。

優れた「我」と劣った「我」に分けるのは百パーセントまちがいであるのを、我々はよく知っている。優劣というのは、同一物を二つに分割した部分である。優れた「我」と劣った「我」はサタン、「我」を二つに分割した部分である。

「我」を分割する者たちは、「我」を優れた「我」と劣った「我」に分割し続け、彼らのあらゆる理論と、大いに自慢する高次の超神聖な自我が、不幸な低次の自我をコントロールするままにさせておけばよい。

「我」の一部分が、「我」の別の部分を粉々にできるのだろうか。「我自身」のある部分が、「我自身」の別の部分に追放令を布告できるのだろうか。

我々にできるのは、都合の悪いことを抜け目なく隠し、自分の凶悪さを隠蔽し、聖者の顔でほほえむことであり、これは「エゴのぺてん」、あざむく癖である。自分自身のある部分が、自分自身の別の部分を隠す。これはまれなことなのか。猫は爪を隠さないだろうか。これは「エゴのぺてん」である。我々はみな内面に偽善者のパリサイ人を抱えており、外見はとても美しいが、内面は腐敗しきっている。

我々は恐ろしいパリサイ人たちに会ったことがある。マスターの清らかなローブを着て、長髪でかみそりを決して当てていない堂々たる髭をしていた。皆この男の神聖さを恐れていた。まったくの菜食主義者でアルコール飲料はいっさい飲まず、人々はその前にひざまずいていた。

この「チョコレート聖者」の名前にはふれずに、彼が神聖な道を歩むために妻子を捨てたと言うだけにとどめる。

彼はきれいごとを説き、不倫と姦淫に対しては激しく非難していたが、ひそかに多くの妾を持ち、ふさわしくない器による変態的な性交を女性信者たちに提案していた。確かに彼は聖者だった。そう、「チョコレート聖者」だった。

偽善者とはそういうものである…。「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。杯と皿との外側はきよめるが、内側は盗みと不正で満ちている」。〔『マタイ福音書』23：25〕

あなたがたは肉を食べず、アルコール飲料を飲まず、たばこも吸わない……。実際、人前では品行方正だが、内側は偽善と不正で満ちている。

パリサイ人は「エゴのぺてん」により他人の目から自分の罪を隠し、また自分自身の目からも隠す。

我々はすさまじい断食と荒行をする偽善者たちを知っていて、彼らは自分が正義と知恵に満ちている信じて疑わないが、その犠牲者はとても言葉では言えないほど泣き叫んでいる。ほとんどいつも、その悪行の無実の犠牲者は妻子だが、自分が正義と知恵に満ちていると確信して彼らは聖なる修行をつづける。

いわゆる優れた「我」は「怒り、強欲、好色などを克度しよう」と言うが、いわゆる劣った「我」はそのときアリストファネスの派手な高笑いをし、情欲のゾッとするような悪魔たちはマインドのいろいろな領域にある秘密の洞窟のなかに急いで隠れる。そのように「エゴのぺてん」は機能する。

マインドのどんな動きも「我」に属するため、「我」を溶解するためのいっさいの知的努力は無駄である。「我自身」のどんな部分も善意を抱くことができる。それがどうしたというのか。奈落に至る道には善意が敷きつめられている。

コントロールしたいという自分の一部と、コントロールされることを望まない自分の別の部分との間のゲームや誤謬は興味深い。

妻子を苦しませる聖者の苦行には胸をうたれる。「チョコレート聖者」の温和さはすべて滑稽である。知ったかぶりの博識は賞賛に値する。だからどうだというのか。

「我」は「我」を破壊できず、我々の子孫に永久に生き続ける。

私たちは、あらゆるむなしい努力やぺてんの呪縛から自由にならないといけない。

「我」が「我」を破壊しようとしても、その努力は無駄である。

思考の無益な闘いとは何かを深く本当に理解してはじめて、内側と外側の行動と反応、秘密の答え、奥にひそむ動機、隠れた衝動などを理解してはじめて、そのときマインドの堂々たる静寂と沈黙を手にすることができる。

普遍的なマインドの大洋の清らかな水の上で、恍惚状態で、複数化した「我」のいたずらのすべてを見つめることができる。

「我」がもはや隠れられなくなった時、それは死刑を宣告される。「我」は隠れるのが好きだが、隠れることができなくなった時、その哀れな者は消えうせる。

心が平静な時のみ、我々は見かけではなく、あるがままの「我」を見る。「我」を見ること、そして理解することが全体として統合的になる。それを理解すると、「我」はばらばらに消え失せる。なぜなら、「我」は必然的に粉々になるためである。

マインドの海の静けさは産物ではなく、本来の状態である。思考の荒れ狂う波は、「我」の怪物が引き起こした事故にすぎない。

愚かな強いマインド、頑固なマインド、「時間がたてば平静になる。いつかそこにたどり着くだろう」と言うマインドは、失敗を余儀なくされる。マインドの平静さは時間から生まれなためである。時間に属するものはみな「我」から生まれる。

「我」そのものが時間から生まれる。

部品をひとつひとつ知的に寄せ集めて機械を組み立てるように、思考の平静さを組み立てようとする者は本当に失敗する。なぜならマインドの平静さは、組立や分解、編成や解体、接合や分離ができるいろいろな部品で出来ているわけではないからである。

努力

真実を体験するのに「努力」はいらない。人々は何事にも努力するのを習慣にしている、「努力」しなければ真実を体験できないと思い違いしている。

日々の生計をたてたり、フットボールの試合をしたり、大変な重荷を持ち運ぶには努力がいるかもしれないが、真実を体験のに「努力」がいると思うのは馬鹿げている。

ひとつひとつの問題の奥にひそむ真実を理解しようとするとき、「理解」が「努力」に取ってかわる。

マインドのいろいろな領域に隠れた各欠点をすべて理解するのに、「努力」はいらない。

「羨望」が社会機関のもっとも強力な原動力のひとつであることを理解するのに、「努力」は必要としない。どうして大勢の人々が進歩したがるのか。どうして美しい邸宅と最新流行型の高級車を持ちたがるのか。誰もが他人のものをうらやみ、「羨望」とは他人の幸福に対するに後悔である。

優雅で上品な女性は、それほど優雅でない他の女性にうらやまれるが、それは闘争と悲しみを大きくするだけである。持たない者は持ちたがり、誰にもひけを取らないためだけに、断食さえして、服やありとあらゆる装飾品を買う。

偉大な大義を掲げるすべての者は、羨望家に死ぬほど憎まれる。無能者、敗者、貧乏人の「うらやみ」は、裁判官の法服、神聖さと支配者のローブ、賛同される詭弁、謙遜の美に変装する。

自分が嫉妬しているということを完全に理解すれば、当然そのとき「羨望」は終わり、そのかわりに他人の幸福と利益を喜び輝く星が現れる。

貪欲をやめたいと願いながら、貪欲でないことを望む人々がいるが、そこに貪欲の一形態がある。

純潔の美德を手に入れようと努力する男性がいるが、街で美しい少女を見ると、お世辞を言ったり、愛想よくする。もし少女が友達なら、手厚くもてなし、美しい言葉をいい、ほめちぎり、少女の美点を賛美したりせざるをえない。その媚態すべての根底には、潜在意識の闇にひそむ「好色」という秘密の動機がある。

何の努力もせずに欲望のあらゆる策略を理解すると、欲望は消滅し、その代わりに純潔の汚れなき花が生まれる。

これらの美德は努力によって獲得できるものではない。「我」は、美德を獲得しようと努力すると強化される。「我」は、装飾品、メダル、称号、名誉、美德、美しい性質などを愛する。

ギリシアの伝説によれば、哲学者アリスティッポスは自分の智恵と謙虚さを示すためにつぎはぎだらけの古いマントを着て、哲学の杖を握り、アテネの街を歩いたという。アリスティッポスが自宅にたどり着いたのを見て、ソクラテスは「おー、アリスティッポスよ、服の穴を通しておまえの虚栄心が見える」と叫んだ。

自分がとても謙虚だと思いこんでいる知ったかぶり、見栄っぱり、うぬぼれやは、アリスティッポスの衣を着る。謙虚さとは、きわめて異国情緒あふれる花であり、自分の謙虚さを鼻にかける者は「傲慢」にみちている。

実生活で新たな問題に悩まされるたびに、我々は多くのむなしい努力をする。問題を解決するために「努力」に訴え、闘い、苦しむが、そういう時にはせいぜい馬鹿げたことをしでかし、人生をますます複雑にするだけである。

幻滅した人、失望した人、もはや考えようもしない人、死活問題を解決できない人はそのマインドがすみきって平静になったとき、もう希望を抱かないとき解答を見いだす。

努力によって真実を理解できない。真実は、夜盗のように誰も予測しない時にやってくる。

意識的あるいは潜在意識的努力を一切しないとき、マインドが今ある以上のものになろうと努力しないときにのみ、瞑想中の超感覚的知覚、悟り、問題の解答が可能となる。

「傲慢」も気高さに変装し、マインドは今ある以上のものになろうと努力する。湖のように穏やかなマインドは真実を体験できるが、マインドがそれ以上の何かになろうとする時、緊張状態、葛藤状態になり、その時真実の体験は不可能となる。

真実を意見と混同してはならない。真実はあるものであるとか、真実はなんらかの書物だとか、なにがしかの信念や概念だなどと意見を抱く人は大勢いる。

真実を体験したい人は誰でも、真実を信念、考え、意見、理論と混同すべきではない。

私たちは、直接敵、実践的現実的に真理を体験すべきである。マインドがひっそりと沈黙してはじめて真実体験が可能となり、瞑想によってこれが達成される。

真実を体験することが基本である。真実を体験できるのは「努力」によってではない。真実は「努力」の産物、たまものではない。真実は深い「理解」によって我々のところにやってくる。

大いなる業に取り組むには努力が、創造エネルギーの変換には「努」が、生き、闘い、インテグラル（完全な、総合的、全体的）な革命の道を踏破するには努力が必要となるが、しかし真実を理解するためには努力はいらない。

心理的奴隷

我々が第三世界の大惨事の瀬戸際に立っていることに少しも疑いの余地はなく、だからこそ私たちは『弁証法の革命』と題したこの本を執筆した。

時代は変わり、思考の厳かな嵐のなかで新たな時代が始まろうとしている。今、革命的な心理額に基づいた新しい革命的な倫理が必要とされている。

根本的な倫理がなければ最も優れた社会的、経済的手法は使いものにならない。個人が「我」の溶解に関心を持たなければ自分自身を変えることは不可能である。

心理的は共同生活をだいなしにする。心理的に誰かに依存するのは束縛である。もし我々の考え方、感じ方、行動の仕方が、一緒に暮らしている人々のそれらに左右されるなら、我々は奴隷にされている。

我々は「我」を溶解したいと望む多くの人々から、いつも手紙を受け取るが、彼らは妻、子供、兄弟、家族、夫、上司等に対して不平を言う。それらの人々は「我」を溶解するための環境を要求し、安楽に「エゴ」を絶滅させたいと望み、いっしょに生活する人々に立派に振る舞うよう求める。

これらすべての中で最も面白いのは、これらの惨めな人々であり、彼らはさまざまな言い訳を探し、逃げ出したい、家や仕事などを捨てたりしたが、それにより自分自身を深く理解しようとしていることである。

哀れな人々…、彼らの崇拜する苦しみが、当然、彼らの主人である。これらの人々は、自由になることを学んでおらず、その行動は他人の行動に依存している。

我々が純潔の道を進み、まず妻に純潔であってほしいと熱望するなら我々は失敗する。もし酒飲みをやめたくても、酒を勧められたとき周りが何というかを気にして、あるいは友達が腹を立てるかもしれないと悩むなら、決して酒飲みをやめないだろう。

もし怒りっぽく短気でかんしゃく持ちや激怒をやめたくても、第一条件として我々は、一緒に生活する人々が優しく落ち着いており、我々を悩ますようなことは何もしないように要求するなら、我々はひどく失敗する。なぜなら彼らは聖人ではなく、いつ何時でもこちらの善意をふみにじるからである。

最悪の困難、障害は最良の機会を与えてくれる。いかなる困難もなく、あらゆる快適さに囲まれ賢者たちがかつて存在した。「我」を絶滅させることを望むその賢者たちは、困難な状況を自ら作り出さねばならなかったのである。

「我」を溶解したいなら、我々は自由である必要がある。他人の行動に依存する人々は、「我」を溶解することはできないだろう。我々の行動は自分自身のものでなければならず、他人に依存してはいけない。我々の思考、感情、行動は、内から外に、他に依存しないで独立して流れ出るべきである。

困難な状況では、内部と外部の衝動、思考、感情、行動、反応、意志作用等を研究するのにすばらしい機会を得る。

他人と一緒に過ごすことは、全身鏡にたとえることができる。そこに映るのは我々の現実の姿、そして虚像ではない生の姿である。他人との生活は驚くべきである。もし油断なく警戒していれば、自分の最も秘密の欠点をたえず発見することができる。思いも寄らないときに欠点は姿を表し、外に飛び出す。

「もう私は怒りはない。」と言う多くの人々を我々は知っているが、彼らは少しでも挑発されると、怒鳴り、その目は怒りに燃える。「もう私は嫉妬はない。」と言う人々もいるが、配偶者がよき隣人にほはえみかけるだけで、その顔は嫉妬で青ざめる。

人々は他人と暮らす上で生じる困難に不服を言う。まさしく困難が「我」の溶解に必要なすべての機会を与えてくれる、ということを分かろうとしない。共同生活は手ごわく恐ろしい学校で、その教科書は多くの巻からなり、その教科書とは「我」である。

事実、もし本当に「我」を溶解したいなら、我々は自由である必要がある。他人の行動に依存する者は自由ではない。ただ本当に自由になる者だけが、「愛」とは何かを知っている。奴隷は真実の「愛」というものを知らない。もし他人の思考、感情、行動に縛られるならば、決して「愛」を知ることはないであろう。

心理的束縛を終わらせると、我々の中に「愛」が生まれる。心理的奴隷の複雑なしくみをすべて、マインドのあらゆる領域で大変深く理解する必要がある。

心理的奴隷制にはさまざまな形態があります。本当に「我」を解消したいのであれば、これらすべての形態を研究する必要がある。心理的奴隷制は内部だけでなく外部にも存在する。我々がまったく疑わない、親密で秘密のオカルト的な奴隷制が存在する。

奴隷は自分が愛していると信じているが、実際はただ、恐れているだけである。奴隷は真実の「愛」を知らない。

夫を恐れる妻は、夫を熱愛していると信じているが、実際はただ、恐れているだけである。妻を恐れる夫は、妻を愛していると信じているが、実は恐れているのである。妻が他の男と駆け落ちするのでは、気難しい性格になるのでは、あるいは自分とのセックスを拒否するのではないかなどと心配しているのかもしれない。

上司を恐れる労働者は、自分は上司を非常に気に入っている、上司を尊敬している、上司の関心を気づかっているなどと考える。心理的奴隷は誰も愛とは何か知らず、心理的奴隷状態は「愛」とは相いれない。

二種類の行為がある。一番目は外から内へ向かうもの、二番目は内から外へ向かうものである。一番目は心理的奴隷の結果であり、反応によって生じる。殴られれば殴りかえす、侮辱されれば粗野に応える。二番目の行為は最善であり、もう奴隷ではない者、他人の思考、感情、行動にもはや悩まされない者が行う。この種類の行動は他人に依存せず、正直で、しかも公正である。殴られても祝福で応える。侮辱されても沈黙を守る。誰かが我々を酔わせようとしても我々は飲まない、友人が怒るとしても、等々。

これで読者は、なぜ心理的な自由が「愛」と呼ばれるものをもたらすのか、そのわけを理解するだろう。

カルキアン・パーソナリティー

我々は、自分が行っているワークについてますます意識を高めないといけない。ノーシス連動とそこらにある也のすべての偽秘教、偽神秘団体などとの違いを知ることとは不可欠である。まず第一に、実行すべきワークを理解したいというのであれば、自らを位置づけ、焦点を絞る方法を知らないといけない。

現在世界にある様々な学校、ありとあらゆる偽秘教、偽オカルトの学校を全体的に見てみると、いとも簡単にその起源を発見できる。

あるときローマで、催眠トランスに何度も陥った修道女の事件が起こった。修道女には告解師がおり、その助けを借りて不幸なトランスの原因の原因を明らかにしなければならなかった。まず、かつて修道女には恋人がひとりいて、修道院にいるにもかかわらず恋人の写真を一枚保存している、ということを告解師は知った。告解師が写真を持ってこさせると、修道女がそれを見るだけでトランスに陥ることにすぐに気づいた。告解師はある心理学者に相談する決心をし、修道女に心理実験を受けさせた。そのとき、トランス状態になったのは恋人の写真のせいではなく、写真の枠に使われている燦然と光り輝く数個の石のためだと解明できた。

調査は続行され、まもなくあらゆる種類の光りものは人間を催眠状態に陥らせると結論づけられた。結果として実際にある学派が創立された。催眠状態によって患者

の心理状態をある方法で改められることが立証でき、それゆえ患者や病人を治療するために催眠を利用することが決定された。

このようにして、催眠療法を行う有名な医師たちが生まれたのである。そのとき催眠術、カタレプシー（強硬症）、降霊術などの大勢の信奉者がこの世に現れた。リチャード・シャルコット、ルイス・セア・ウリベ、セサル・ロンブローゾ、カマイル・フラマリオンなどが記憶に残っている。

その催眠術師の学派の中でとりわけ人目を引いたのが一人のイギリス人（ちょうど今、名前は思い出せないが）と有名なシャルコットであった。最初の人物に関してはハナスムセンの特質をすべて持っていた。もう一人の人物は疑う余地なく「マザコン」であった。私はシャルコットのことを言っている。彼の実験はかなり注目に値するが、彼は家族に甘やかされた「赤ちゃん」だったので、彼のしたことはすべて驚異であった。^{7***}

- 1) 肉体だけを持つ人々。死後、エッセンスを瓶詰にする悪魔の軍団のみが残る。
- 2) 創造したアストラル体を持つが、停滞したまま死ぬ人々。ワークをやめて黒魔術に堕ちる。新しい生まれ変わりでワークを続けないなら、必然的に退化する。
- 3) 高次的体を創造したが、エゴをまだ除去していない人々。エゴを除去しないなら、すぐ後の生まれ変わりにおいて、ゆっくりと退化する。
- 4) 転落した神々。同様にエゴを除去する決心をしないなら、再び退化せねばならない。〔『ノーシス秘教辞典』 『ノーシス秘教用語辞典』〕

ところで、このくだりをすべて概説し、動物磁気、催眠学、カタレプシー（強硬症）、降霊学、その他多くの似たような事柄を述べる時、ただ一つの意図がある。すなわちカリ・ユガのこの暗黒時代にある、さまざまな偽秘教、偽のオカルトの学校の起源を読者に示すためである。^{8***}

⁷ * ハナスムセン・・・二重の重心をもつ、聖なる母の流産。第二の誕生の後も、生きたエゴを持ち続ける。四種類ある。

⁸ * カリ・ユガ・・・クリタ・ユガ（黄金時代）、トレータ・ユガ（銀時代）、ドバパラ・ユガ（銅時代）に続く鉄の時代、末世。ヒンズー教という争いと罪にみちた現世。紀元前 31 02 年から 432000 年間つづくという。カ

フォックス・ド・ミルヴィル姉妹の時代、彼女たちは、世界中のさまざまな科学者の目の前に3年連続で現れ続けた幽霊、有名なケイティ・キングの具現化の道具として機能した。ナポリのエウサピア・パラディーノが活躍した時代、ヨーロッパ全土が心霊現象で沸き立っていたころ、東洋色の強い神智学が登場した。そしてもちろん、これらの組織を訪れたことがある人なら誰でも知っているように、これらの学校では常に心霊主義とヒンドゥー教の色合いを帯びた理論が混在している。神智学と心霊現象は切っても切れない関係にある。

現存するさまざまな団体の起源を知るとき、神智学が心霊主義と混じりあっているのは驚くに値しない。神智学者たちがタントリズムを前にして驚くのは、ほとんど正常ではない。それは秘教の学校ではなく、ただの偽の神秘の学校にすぎないからである。

疑う余地なく、あの催眠術師たちの学派から、当然のごとく多くの分派や団体が枝分かれした。それらを偽バラ十字、偽ヨガ等と呼ぼう。それらは無数にあるため、すべての名称を知るには辞典をひく必要があるだろう。

しかし問題の核心に迫ろう。そのような学派の土台は何か。進化論の教義である。大げさに取りざたされたその教義はどこから来たのか。ダーウィン氏によるものである。

信じられないように思えるが、ダーウィン氏は名士、秘教主義者、偽の秘教研究者、真剣な志願者を大勢うち負かした。事実は事実であり、それを否定することはできない。

西洋のいくつかの偽の秘教協会がでっちあげた「転生」の思想は偽りである。クリシュナ神は全人類が転生するとは決して言っていない。仏陀、神々、太陽の英雄達のみが「転生」する権利を持つにすぎないと言ったのである。残りのものは万物の永劫回帰の法則に従い、これは明白である。^{9***}

リ・ユガが終わると世界は破滅し、のちふたび これらの新たな四つの時代が来る。これが無限にくり返されるという。

⁹ * 転生（リーインカーネーション）・・・ただ神々、半神、英雄、タイタン、聖王、マスター、人類の指導者のみが物質界層で新たな人生を送るために転生する。転生とは「生まれ変わる個性」を意味する。複数化した我を持つ人々の場合、この涙の谷にもどり、回帰すると言うが、それは転生とは呼べない。（『ノーシス秘教辞典』）

さて、これらの主観的で矛盾した曖昧で不正確な学派から西洋に広まった、この種の病的な結果が、「カルキアン・パーソナリティー」であった。つまりこのカリ・ユガ時代に特有のパーソナリティーである。

東洋では、ヒューマノイド（人間そっくりの生物）全員が「存在（ビーイング）」の高次的実在体を所有しているとは決して言われたことがない。だが、誰もがすでにそれらの高次の乗り物を所有していると、偽の秘教、偽のオカルト学派が人類に信じさせるのは容易だった。まるでヒューマノイド全員がその乗り物一式を本当に所有しているかのように、「人間の七部作」というテーマを確信をもって論じるのに彼らは異存はない。

「カルキアン・パーソナリティー」は不敬、非礼である。偽の秘教、偽のオカルト学派のこの種のパーソナリティーは、真実の帰依と本当の信仰心の意識だけでなく、古代の長に対する崇拜の念も失ってしまった。そのため、実に叡智ある宗教によって導かれることができたはずの人類は、おかしな知ったかぶりに墮落し、「カルキアン・パーソナリティー」を形成してしまった。

「カルキアン・パーソナリティー」を真に秘教的なパーソナリティーと照合する仕方を知ることが重要である。その違いは何か。「カルキアン・パーソナリティー」は知識をひけらかし、進化の教義に閉じこめられ、人間の内的構成に関しては誤解しており、タントラの神秘を知らず、脊柱における火の蛇の発達を恐れ、そのうえ理論を詰めこんだために自己満足感を生み出した。

疑いもなく、「カルキアン・パーソナリティー」は自己欺瞞の犠牲者である。何も達成していないのに、すべてを達成したと思いこみ、最悪なことに崇拜の念を失い、本当の正真正銘の信仰心を忘れ、創造主ロゴスの前で謙虚さも失ってしまった。これが「カルキアン・パーソナリティー」である。

我々は「カルキアン・パーソナリティー」の道を歩むことはできず、また進化論の教義とや、すでにヒューマノイド全員が、実在体をもう形成した、非の打ち所のない

*（永劫）回帰の法則…あらゆるエッセンスは、108回の人生を1サイクルとして、それを3000サイクルくり返して、物質界に顕現する。1サイクルごとに自己実現のチャンスがある。ある人生でマスターの位に達したエッセンスは、意識的に来世に転生できる。

い完全な人間だと信じる教義、魔力をもつ火の蛇と強烈な体験とを恐れるような教義などといった間違った教義を認めることはできない。「カルキアン・パーソナリティー」の道よりも、むしろ真実の智慧の道を歩むほうを我々は選ぶ。それはタントラの道、「エゴ」溶解の道、そして自分自身の惨めさと無力さを認める道でもある。自分つまらないもの、泥まみれの惨めなミミズにすぎないことを認める方を選ぶ。もちろんだが、自分の内で自分自身に働きかけるのを気づかう。我々は自分自身の、我自身の溶解を望む。

我々は創造エネルギーの知的パワーを用いる。偽秘教家、偽神秘家をそれはどおびえさせるキュクロプス（一つ目巨人）の鍛冶場で働く。我々はこうして百パーセント革命的な、違った、異なった道にいるが、それは恐ろしいほど古く、あらゆる時代の耐え難い暗闇の中で失われた道でもある。

確かに「カルキアン・パーソナリティー」の特徴は、はっきりしている。何よりもまず、「うぬぼれ」と恐ろしいほどの「傲慢」、そして理論に基づくひどい「虚栄」。たとえば精神分析と超心理学などの学派において、なんという恐るべき傲慢とうぬぼれが真の「カルキアン・パーソナリティー」を持つ人々の心を奪うのを見てみよう。これらの人々はあるグループのなかで傑出するだけでなく、テレビに出演し、出版物やラジオで目立ち、秘教で「ベネノスキリアン」と呼ばれる一種のバイブレーションで完全に世界を害する。^{10***}

彼らはまったく「うぬぼれ屋」で、中世の人々を蔑視し、自分たちが超文明人だと信じ、智慧の「極致」にいたったと考える。あまりの「傲慢」ゆえに無限、外宇宙の征服を考え、中世の賢人たちの迷信だとみなすものをあざ笑う。これは「カルキアン・パーソナリティー」の一種である。

どのようにして、それらのカルキアン・パーソナリティーに自分たちが間違っていることを理解させることができるだろうか。

¹⁰ * ベネノスキリアン・・・創造エネルギーの変換（性エネルギー昇華）をしない人々に生じるネガティブなバイブレーション。精液が変換という特別のショックを受けないとき、ひどく変質し、いまわしいクンダバッファー器官を発達させる。（『ノーシス秘教辞典』）

それを否定するだけで十分ではないのだろうか。それらの「カルキアン・パーソナリティー」は理性をあやつり、それが戦闘の武器、十八番なので、我々は、推理の過程とは何かを彼らに理解させないといけない。

ドイツの偉大な思想家でケーニヒスベルクの哲学者エマヌエル・カント氏が『純粹理性批判』『実践理性批判』という著書を書いたことを、「うぬぼれ屋」で傲慢なそれらの人々に知らせないといけない。

エマヌエル・カント氏を研究すれば、散文論法、大論法、三段論法で彼が我々を解説する方法だけでなく、『純粹理性批判』で内容の概念を分析する方法もわかるだろう。^{11***}

明らかに、外界の感覚的知覚によってマインドは形成され、ちょうど素朴な感覚の組み合わせに基づいた内容の概念をつくる。この見地からして、理性は五感の世界に属さないものは何も知ることができない。なぜなら内容の概念はただ感覚の組み合わせだけで出来ているからであり、それゆえ理性は感覚をとおして受け取った情報のみに限定される。主観的理性は「直観」について何を知ることができるのか。

「先験的な観念」について、ただ外界の感覚的知覚にのみ基づく内容の概念から逃れるものについて何を知ることができるのか。何も！

「カルキアン・パーソナリティー」の絶対に知らない別の種類の理性がある。「客観的理性」のことについて声高に触れたい。明らかに客観的理性は考識の情報を基盤に持ち、その情報で機能する。

正真正銘の秘教で意識は「ソースタット (Zoostat)」と呼ばれる。

客観的理性は、ギリシア・ローマ時代が始まる前に発達した。中央アジアで栄えた偉大なアーリア人種の第一亜人種の原始アーリア人は、客観的理性を発達させた。太陽のリシ（聖仙）たちの時代に先立つ第二亜人種の人々は、客観的理性を所有した。ファラオたちの古王朝のエジプト人、バビロニア人、アフガニスタンやトルキ

¹¹ * 三段論法・・・大前提、小前提、結論の三段からなる推論の方式。「AはBなり、BはCなり、ゆえにAはCなり」の類。散文論法、大論法、三段論法とはその結論が別の三段論法的前提として使われる三段論法。大論法とは他の三段論法の結論を前提の一つとする三段論法。

スタンやイラクの賢人たちも客観的理性を使ったが、ギリシア人の推論とともに客観由理性は事実上終わりを迎えた。^{12***}

言葉遊びをはじめて、外界の感覚的知覚に基づく主観的推論をついに確立したのはギリシア人であった。彼らは客観的理性を押し殺し、地上から排除してしまった。そのとき以来、人類はただ主観的推論、外界の感覚的知覚、および感覚を通して受け取った情報のみを所有するだけになる。

内容の概念は「感覚の組み合わせ」などに基づいていて、主観的理性は前述の要素に当てはまらないものについては何も知ることができない。感覚的な主観的理性はリアリティー、神、生と死の神秘などについて何も知ることができない。主観的理性は、不完全な五感であるその活動範囲外のものすべてにまったく無知である。

疑う余地なく、心（心臓）の能力がいくつか存在する。それらの特性は、インテレクトとその単なる推理過程とをはるかに超えたものであり、心の能力について感覚的な主観的理性は何も知らない。

ベエダの聖地には次のように述べている古写本がひとつ存在する。「心臓センターを瞑想する者は、タットワのヴァーユ（風の霊氣的原理）を支配し、またシッディ（聖者たちの超能力）も獲得するであろう」。

ホセ・デ・クペルティーノ Jose de Cupertino めことを今思い出した。彼は空中に 70 回浮揚したと言われ、1650 年ごろに起こったこの魔術的出来事ゆえに列聖された。心臓センターを彼が発達させていたのは疑いもない。「お祈りをされていて浮かび上がろうとするとき、君はどうして叫び声をあげろのですか」という枢機卿（教皇の最高顧問）の質問に、彼は答えた。「火縄銃に火をつけると、火薬がごう音をたてて爆発します。同じことが神の愛に燃え上がった心臓に起こるのです」。

¹² * 各人種は七つの亜人種からなる。アーリア人種のそれは以下のとおり。第一亜人種：中央アジア発祥。第二亜人種：インドで栄えた。第三亜人種：ペルシア、カルデア、エジプトで栄えた。第四亜人種：ギリシア人とローマ人からなる。第五亜人種：ゲルマン人とイギリス人等からなる。第六亜人種：中南米でナワトル族、インカ族、マヤ族等からなり、スペイン人の征服者たちと混血した。第七亜人種：前述した六つの亜人種がすべて混血した結果、アメリカ合衆国で形成されつつある。『ノーシス秘教辞典』)

そのように実際的なしかたで、ホセ・デ・クペルティーノはヒーナス状態の鍵を与えてくれた。ヒーナス状態に入ることができるように、心臓を発達させないといけない。

非凡な聖クリスティーナはたえず浮かんでいた。すでに亡くなって（亡くなったと信じられていた）埋葬されようとしていたとき、突然、棺桶の中から起き上がり、教会の鐘つき塔まで浮揚したのである。

数え切れないほどのケースを語りつづけることができる……。確かにアッシジのフランシスのケースがある。彼の世話をしていたよき修道士が食事を持ってきたとき、修道士フランシスは祈りにあって、すでに浮揚していた。よき修道士はフランシスにもう食事を与えられなかったことがしばしばある。アッシジのフランシスがすでにあまりにも高いところにいて手が届かなかったため、近くの雑木林にときどき消えうせるほどであった。

これらの神秘家は全員、心臓センターを発達させていた。そのセンターを発達させなければ、ヒーナス状態に熟達することはできない。

一般的に、インテレクトが発達した者は、ヒーナス状態に入るのに大いに苦しむ。なぜなら心臓の力を消費して確かにインテレクトは発達するものの、心臓の力を吸い、心臓のパワーを失う。つまり心臓のパワーをインテレクトと交換するのである。

知的になるよりも、きっと心臓のパワーを持つほうがいいだろう。だからといって教師は心配するにおよばない。高等感情をつちかい、偉大なマスターたちの高次音楽に親しみ、瞑想を深めることにより、心臓はもう一度発達できる。もっと神秘的に、もっと深く敬虔に献身的になるならば、心臓は再び発達していく。それはとても興味深いことである。

そのうえ、親愛なる読者よ、我々が知り、理解しないといけないのは、人間が真実の意識、偽りの意識という二つの意識に分かれるということである。

この世に生まれてくるとき、人は「存在（ビーイング）」の内心の自己実現に必要なすべての情報（それは自然が託したものである）をエッセンスに携えてくるが、し

かしどうしたのか。人は入学して、役立たない偽りの教育と多くの助言と指示、規則を受ける。けっきょく「偽りの意識」を創造し、足跡をたどるのに、道を進むのに、「存在（ビーイング）」の自由を獲得するのに必要な情報の保管場所である「真実の意識」は、あそこ心の奥底に押しこまれ、哀れにも潜在意識という名で呼ばれる。これほど馬鹿げたことを読者は見たことがあるか。

我々は自分自身に正直になり、次のことを認めねばならない。すなわち、我々に形作られたこの「偽りの意識」は、すべての理論、小学校・中学校・高校などで学んだすべてのこと、その他多くの物事、つまり年長者の手本とか、我々の生活する社会の偏見とかで出来ている。それは「本物の意識」ではない。

我々の中にある間違いを、言われてきたこと、校則、高校の授業などにもとづくこの「偽りの意識」を取り除くべきである。我々にただ「真実の意識」、「存在（ビーイング）」の「高次意識」のみが残るように、その「偽りの意識」を完全に取り除き、決定的に一掃するのは重要である。

これら現代の精神分析家、これらの有名な精神科医、心理学者、超心理学者、催眠術師の信奉者などが「存在（ビーイング）」の「真実の意識」を窒息させ、抑圧し、取り除こうとますます努力する様を見てみよう。あらゆる手段を講じて、我々の所有するその「偽りの意識」をだんだん強化しようと望むのである。

メスメルは驚異的な人物で、人間には二重意識が存在していることを感じとり、それを研究しようと決心した。偽りの「意識」があり、また心の奥底にしまいこまわれている、言わば過小評価されている正真正銘の真実の意識があることにメスメルが気づいたとき、もちろん催眠術とは正反対の動物磁気の実験を始めた。

哀れなメスメル。彼は当時、大いに物笑いの種にされ、今だに物笑いの種にされている。彼は批判されたし、今日でもまだ批判されている。催眠学の多くの教科書は、メスメルへの反対意見で始まっている。はっきりとその「偽りの意識」に異議を唱え、「偽物」「本物」の二重意識が存在していることを発見したために、彼は催眠術師に嫌われている。世論の厳かな判断の前で「偽りの意識」の正体を暴いたメスメルが、ほとんど滅ぼされたのは明らかであり、それは生の現実である。

ところでテーマからあまりそれないように、私が言いたいのは次のことである。「偽りの意識」というゴミを捨て、「真実の意識」に、「本当の意識」に注意を払うよう努めることにより初めて精神的に発達できる。

「偽りの意識」で何を理解するというのか。生まれてこのかた形成されてきたもの、手本、家族全員の指示をもとにつくられたもの、小学校や中学校などで形成されたもの、過去、現在、未来のすべての社会的偏見で形成されたもの。

それはすべてゴミ箱の底に投げ捨て、働くために「真実の意識」を浮かばせないといけない。つまり働くためには幼児になり、児童、小さい子供になり、理論を持たずに真実の智慧を利用しないといけないのである。

だから私は本章を書いた目的は、的を射るため、この世にいる状況を認識するため、そして「カルキアン・パーソナリティー」を形成するすべてのスクール、宗派、教団の道を行かずに、我々が異なっているのを理解するためである。それだけである。

強情

「強情」とは間違いをしつこく指摘することであり、それゆえすべての間違いの原因が「エゴ」、「我自身」であると私はこれほど力説しているのである。私が「エゴ」に反対意見を述べるというので知的動物がイライラしても構わない。なんとしても「強情」に続けていこう。

ふたつの世界大戦が終わり、世界は第三次世界大戦の瀬戸際にある。世界は危機に瀕しており、いたるところ貧困、病気、無知がはびこっている。

ふたつの世界大戦は人類に不利益しか残さなかった。第一次世界大戦は恐ろしいインフルエンザを残し、1918年には無数の人命を奪った。第二次世界大戦は第一次世界大戦のペストよりも悪い精神的なペストを残した。新しい世代を完全に毒した忌まわしい「実存哲学」のことを言っているが、それに対抗して『弁証法の革命』が発表された。

我々は全員この社会的混乱をつくった張本人であり、その中に生きている。社会的混乱を解消し、本書の教えに沿ってよりよい世界をつくるために全員で働くべきである。

不幸にも人々は利己的な「我」のことしか考えずに、「第一に我、第二に我、第三も我！」と言う。すでに言ったことだが、もう一度くりかえすと、「エゴは心理革命（革命的心理学）が確立する秩序を破壊する」。

もし本当に心の底から『弁証法の革命』を望むならば、まず人の根本的な変換が必要となる。

完全で根本的、決定的な精神的变化の必要性を認める人々が多いが、あいにくなことに特別な刺激と動機を必要とする。

順調だねと言われたり、肩をポンとたたかれたり、美しい励ましの言葉をかけられたりするのが好きである。

励みになるととても美しい詩、なんらかの信念やイデオロギー、あるいはユートピアを変えるために求める人々が多い。

変わるための励みとして、いい職の当てを要求する人がいる。変わるための励みになる、いい婚約とかすばらしい結婚を要求する人がいる。

行動のいい動機がなければ誰も変わろうとはしない。人々は「刺激」が大好きである。そのような「刺激」は中身がからっぽで見せかけだけなので、当然、無駄だと言えるが、哀れな人々はそのことを理解しようとはしない。

「刺激」が人生において、数世紀の歴史において、ある人の中に完全な根本的、決定的変化を引き起こせたことは決してなかった。

肉体の死と共に破壊できない一つのエネルギー中枢が、どんな人の中にも存在し、世界にとっては不幸なことだが、それは我々の子孫に永遠に生き続ける。その中枢とは「我」、我自身、自分自身である。「我」と呼ばれるそのエネルギー中枢内に、根本的な変化をもたらすことが大至急、必要である。

軽い肩たたき、きれいごと、うるわしいおべっか、結構な「刺激」、とうとい励みなどは、「我」と呼ばれるそのエネルギー中枢（我々自身の中にある）にいかなる根本的变化ももたらせないだろう。

とても真剣に心から、「我」と呼ばれるその中枢内に根本的变化を望むならば、心の惨めさ・貧しさという自分の悲しむべき精神状態を認め、そして人類のために無欲に働くために自分の利益のことは忘れないといけな。これは自己犠牲、無私、まったくの自己放棄を意味する。

財布をお金でもっともっと一杯にすることしか頭にないならば、我々自身の中に根本的变化はありえない。

「我」、我自身の望みとは成長、発展、進化、地球上の偉人との付き合い、そして勢力、地位、財産の獲得などである。自分自身の内面の表面的変化は役に立たず、何も変わらないし、誰も何も変えない。

我々ひとりひとりの内で、心の奥底から変わる必要がある。そのような変化は、ただ内面に巣くう中枢、「我」にのみ起こりうる。陶工が茶碗を割るように、その「利己的な中枢」を壊さないといけな。

我々ひとりひとりの内に、奥深い完全な本当の根本的变化をもたらすために、「我」を緊急に絶滅させる必要がある。今の我々のありさまのように、現実の姿のように、我々はせいぜい自分の人生を憂鬱なものにし、隣人をひどく悲しませるだけである。

「我」はあふれんばかりの名誉、徳、お金などを求める。喜び、名声、信望などを欲しがり、拡大したいという気違いじみた渴望に駆られ利己的な社会を創造する。その社会にあるものといえば、口論、残酷さ、飽くことなき強欲さ、際限のない果てしない野心、戦争等ぐらいである。

不幸にも我々は、「我」のつくりだした社会の構成員である。この社会は役立たずで、有害、危険である。ゆいいつ「我」を根本的に絶滅させることにより、我々は完全に変われるし、また世界を変えることができる。

本当に「我」を根こそぎ絶滅させたいならば、マインドが穏やかに澄みわたるよう安らかな思い出を持ち、それから自分自身を知るために、冷静に自己観察することが緊急に必要である。

滝のようなどしゃ降りを凝視して、それを切り抜ける人のように、自分自身をじっと見つめるべきである。

代理人を探しては、酒をやめたかわりに喫煙しては、妻を捨てて別の女性と結婚しては、ある欠点を捨てて別のと取りかえては、もしくはあるスクールを去って別のスクールに入っている、人生において誰も「我」を溶解できない。

もし本当に自分自身のうちで根本的な変化を願うならば、我々にとって建設的、肯定的に見える物事すべて、古い習壊すべて、まちがった風習すべてを捨て去るべきである。

「マインドは我の本拠地である」。我々ひとりひとりの内に真実の草食を起こすためには、「本拠地」にて変化をもたらす必要がある。

絶対的な自己放棄・犠牲と我々の不幸な現状を理解することによってのみ、いかなる「刺激」や動機もなしに、実際に「我」を根絶できる。

エゴの状態

「エゴ」の状態は次のように分類される。

・「ステレオサイキック」 STEREOPSYCHIC : 五感を通して受け取り、印象の世界と結びついている外界の知覚と密接に関係する「同一化」状態。

・「ネオサイキック」 NEOPSYCHIC : 情報「処理」の状態。知的動物が経験するさまざまな状況すべてを良くも悪くも解釈する。この状態で、「パーソナリティー」という悪い秘書は働く。

・「アルケオサイキック」 ARCHAEOPSYCHIC : 49 の潜在意識レベルに見られる「逆行」状態- 「エゴ」の記憶。「写真」と「録音」で保管されている過去の思い出。

ブルータイムまたは安息療法

デルフォイの〔アポロン〕神殿の神秘めいた敷居には、むき出しの石にギリシア語の金ノスケ テ イブスム言がひとつ刻まれていた。“NOSCE TE IPSUM”、「人間よ、汝自身を知れ、さすれば宇宙と神々を知らん」。

自己の研究、落ち着いた内観、それがマインドの静寂と沈黙のなかで結局終わるのは明らかである。

インテレクトの表面的なレベルだけでなく、潜在意識の 49 室のそれぞれでもマインドが静まり沈黙するとき、そのとき新しいものが到来し、エッセンス、意識は解放され、霊の覚醒、エクスタシー、サマーディが訪れる。

瞑想を毎日実践すると、我々は根本的に変わる。「我」を全滅させるために働かない人々は、スクールからスクールへと飛びまわって生き、「永続的な重心」を見いださず、「存在（ビーイング）」の内心の自己実現を達成せずに、失敗したまま死んでしまう。

マインドの二元性、正反対の物事どうしの葛藤、インテレクトの大波から解放され脱却して、初めて意識は覚醒できる。潜在意識、インフラ意識、無意識のどんな葛藤も、エッセンスの解放の障害となる。

あらゆる正反対の物事どうしの葛藤は、それがどんなにつまらない無意識的なものであっても、闇に包まれた未知の点を人間の原子地獄では表している。自分自身のそれらの人間以下の面を観察し知ることは、マインドの絶対的な静寂と沈黙を達成するのに不可欠である。我のない状態でのみ、全面的な革命と『弁証法の革命』を体験し、生きることができる。

ブルータイムあるいは安息療法には基本的ルールがあり、それなくしてマインドを苦しめる足かせから自由になれないだろう。これらのルールとは以下のとおり。

1. 一「リラックス」：瞑想のために身体をリラックスできるようになるのは不可欠である。どの筋肉も緊張してはいけけない。思いどおりに眠気を引き起こし、調節することが緊急に必要である。明らかに、眠りと瞑想とを賢明に組み合わせることで、いわゆる悟りの境地に達する。

2. 一「回想」：回想を通して何を求めるのか。知的動物は機械的な日常生活のせいで、われを忘れ、魅惑におちいる。眠りこけた意識で歩き、起きた瞬間にしたことを忘れ、その日の最初の考えとか行動、自分のいた場所を知らない。

回想の目的は、過去のすべての行動を自覚することにある。瞑想に沈んで回想する際、マインドに不服を言うのではない。回想の始まるときから望む人生のときまで、過去の状況の思い出を引っ張り出す。思い出と同一視せずに、それをひとつひとつ研究するべきである。

じょうりょ 3. 一「静観（静慮）」：どんな考えが生じようとも、それが生じる前の心理状態をまずじゅうぶんに認識しないといけない。マインドを冷静に観察し、インテレクトのスクリーンに現れる想念形態のすべてにじゅうぶんに注意を払う。

マインドがざわめく間、自分自身のマインドを見張る監視者となり、しばらく立ち止まって、マインドを観察するのは不可欠である。

4. 一「心理分析」：考え、思い出、愛情、感情、感傷、恨みなどがマインドにわき起こりつつあるとき、すぐにそれらひとつひとつの根源と起源を調査、研究、究明する。

心理分析の間、考え、思い出、イメージ、連想が潜在意識の奥底からわき起こりつつあると、すぐにそれらすべての起源、原因、理由、基本的動機を調査、検討、研究するべきである。

5. 一「マントラまたは公案」：この段階のねらいは a) 我々の内宇宙のなかでマントラや公案の魔力を混ぜ合わせる。b) 意識を覚醒させる。c) 非常な高電圧のクリスティック原子を、内なる靈魂に蓄積する。

この心理的ワークで、インテレクトは完全で「ユニトータル（全一）」で申し分のない静寂で深遠な受動的状態をとらないといけない。マインドの統制を解く公案や言葉により、マインドは「ユニトータル」な受動的状態になる。

6. 一「最高の分析」：内観をとおして自分自身を知ること。深い瞑想のさいちゅう、心を内に向けるのは不可欠である。

この状態で、崩壊したい「我」あるいは欠点を理解する過程で働く。ノーシス学徒は精神的集合体に集中し、マインドのスクリーン上にそれを維持する。ともかく、自分自身に正直になるのは不可欠である。

最高の分析は二語からなる。

a)「自己探究」：人生で初めて欠点が表れたのはいつなのか、最後にもっとも強く表れたのはいつなのか。それを意識の奥底、49の潜在意識レベルで調査する。

b)「自己発見」：何が「我」の栄養なのか調査する。どんな種類の我が欠点から生じるのかを知るために、欠点をいろいろな部分に分割し、それらをひとつひとつ研究する。

7. —「自己審判」：研究している欠点を被告席にすわらせる。意識におよぼす被害、および審理中の欠点を消し去るとき人生にもたらされる利益を判定する。

8. —「祈り」：聖なる母クンダリーニ、内なる個人的な母にとっても熱心に訴える。正直に話しかけ、すべての欠点と過ちに心を向ける。「我」をその根源から崩壊できるのは聖なる母しかいないからである。

ルミシアルできるときはいつも瞑想室—ノーシス寺院にいわせるのは楽しく興味深い。

外界の感覚的知覚を避けるために、いつも目を閉じて瞑想を実践するのは絶対必要である。

エゴのなきがら

「原子地獄でエゴのなきがらを性的、電氣的力によって崩壊させねばならない」。時間がエゴのなきがらを崩壊してくれるなどと期待してはならない。

ソロモンは貴いダイヤモンドによって宝石を磨いたが、そのダイヤモンドとは賢者の石のことである。

「エゴのなきがら」を崩壊させて、「肉体は傷つきやすく弱点があり、老いと死にさらされるので二度と肉体を創造しない」ように、すべての努力を傾けるべきである。

疑いもなく、「カルマ」が体を創造する。

心理的ワークをしないために現代人は深遠ではなく、表面的であるのが好きである。人々はすべての文明をあざ笑うことができると信じている。

コンセプト今日、人間のマインドは概念によって退廃した。頭に浮かぶあらゆる概念は、言われてきたこと、学んだことから生じる。

セルフ「セルフコンセプト」（自己イメージ）は、経験と自分特有の考え方に基いている。 グルジェフは、知識に関してはまだまだこれからである。^{13***}

クリシュナムルティは誰の心も読んだことがないので、確かにセルフコンセプトを持っている。

内面に「セルフオーソリティー」（自己権威）を持たないとき、宇宙の調和は破壊され、均衡が崩れる。

もし自制心を失うならば、どうやってセルフオーソリティーを持つつもりなのか。ただ内側に「存在（ビーイング）」を持つときにのみ、初めて「セルフアクション」（訳注：自己行為、独自の行動）が可能となる。

「エゴのなきがら」を心理の原子地獄で崩壊させるときにのみ、賢者の石、セルフコンセプト、セルフアクション、セルフオーソリティーがありうる。

サイキス創造

空間の征服と物質への浸透ゆえに外見はとてもきらびやかに見える現代文明は、ホモ、レズ、麻薬中毒という退廃的道德の「ハンセン病」にむしばまれている。

¹³ * 下線部は本書では「自分特有の考え方の経験」となっていますが、意味不明のため『ごくわずかの人のために』（1991年別冊ニューズ 11月号7頁）のほうを採用しました。

他の文明でも起こったように、この文明は自滅するべく退化の段階に入った。誇り高いローマ帝国の歴史的証明がそのことを我々に示している。急激な変化が厳格な道徳的国家の偉大さに生じて、ローマ帝国が悪徳に耽ったとき、かつては古代世界を征服した共同体のローマ帝国に、退化のきざしが現れた。

私は何を根拠にそう主張するのか。疑いのない決定的事実にもとづいて、である。イギリスのような偉大な文化は今、現代の世代の精神を汚染し墮落させる「心理のハンセン執しか輸出していない。イギリスのグループ、セックスピストルズは既成の権威にまっこうから刃向かいかねないが、それも否定的に、である。彼らは傑出した人物として登場し、パンクロックの創始者で、汚い言葉にみちた歌、体制に対してだけでなく、それどころか眠りこけた意識で聴く聴衆自身に対しての直接攻撃に用いるテーマにみちた歌をつくりだす。

汚らわしさはセックスピストルズの旗であり、骨の髄まで腐ったこの哀れな人類への個人的メッセージである。

セックスピストルズは攻撃的なグループであり、やりたい放題をし、パンクロックの宗教のように際立っている。反エリート主義のイギリスの労働者階級の若者四人が作る、皮肉にみちた愛に反対する歌、弾圧と攻撃に反対する歌。宗教 religion という言葉が、「神との合一」を意味するギリシア語「religare」から来ているのを忘れて、これらの知的動物がひとつの宗教を創造できるというのは馬鹿げている。けれども、これら退廃した人々にはどんな種類の神がいるのだろうか、また若者たちはなんとこのグループをまるで偉大なもののように、催眠状態で崇拜するというのである。

むげんセックスピストルズに表されろ音楽の傾向は、実生活において無間地獄のような雰囲気をかもしだす。ロンドンのワンハンドレッドクラブ(百クラブ)のコンサートに参加する、もっとも甚だしい霊的、心理的無知に陥った何百人もの若者が、これを保証している。

バンクの波は反対をものともせずに進み、数え切れないほどの国際的な雑誌に、その独自のファッションがすでに掲載されている。ぼろぼろの服、装飾品として用いられるあらゆる器具のがらくた、色とりどりに彩色されたショートヘアー、すべて

に反対するスローガンが書かれたシャツやサンダル。これは、人類のわずらう、また人類をあまりに墮落させる、心理的ハンセン病の症状の明らかなしるしである。

セックスピストルズの「衝突」の多くは、肉体の闘争性一怒りーがファッションとなる。いとも簡単にセックスピストルズの舞台自体から侮辱の言葉が浴びせられ、それどころか瓶で殴られる。これはしばしば乱闘に発展し、そこから監獄行きや病院送りになることすらある。こうした侮辱的な言葉や物を投げつける行為のすべてに混じって、何百人ものイギリスの若者がセックス・ピストルズを愛している、なぜなら彼らは最高だからだと叫んでいる。ブリューワー・ストリートのパラダイス・クラブでのいくつかのコンサートで、そのような状況が起きた。

好奇心をそそるが、セックスピストルズのバンドを統率するリーダーは、以前は歌ったことのないジョニー・ロットン、シッド・ビシャス、ポール・コック、そしてステイプ・ジョーンズである。イギリスでは彼らは誰をも尊敬せず、われらの国メキシコにはほとんど来れそうにない。

このパンクの流行のような周期的な進化と退化なくして、生命は理解しえないと私は考える。周期的な進化と退化は、動植物、人間、星、星座に見られる。

歴史的な周期にも進化があり、その後、退化が起こるのは避けられない。退化のために岩石は風化・浸食し、太陽は粉々になり、子供は老人となり、樹木は石炭となり、大陸は大洋の底に沈み、あるいは水面に浮上する。

本書で提示されている我々の仮説は、ハンセン病のない、「心理発生」に基づく新しい文明の基盤を確立することを目指している。言い換えれば、それはまず人間（真の人間）の創造に基づき、その後、精神的および性的超動力学（本書で強調してきた）を通じて超人の創造へと進むことになる。

私の教えを広めるノーシス協会には、希望者全員が入会できる。進歩向上し、今ここで「心理発生」を自分自身の中で実現したいという熱い願いを持つ者ならいつでも参加できる。

「心理発生」を自分自身の中で実行していない者は、自分の才能と能力をほんの一部しか使っていない。それで心理から最大限の利益を獲得する方法を学ぶために、

私はこれらの章で提供する心理に関する教えを実践するよう、読者に勧めるのである。

各人の中には無尽蔵の知識への無限の可能性が眠っている。今すぐにでも自分自身に「心理発生」を行うワークを開始する、まさにその瞬間に開花する偉大な心理的能力の芽を、我々は全員持っている。人間はその存在にかかわることすべてを知る能力がないといけないし、これは自由意志と同じように自然な出来事である。

なぜ我々はここにいるのか。どこから来たのか。どこへ行くのか。このことすべてをここで知り、教義と理論から解放されるべきである。

私が示してきた心理学的訓練を通して、私たちは精神的に向上することが可能である。つまり、我々自身の中で「心理発生」を実行し、自然のさまざまな側面と接触することができる。

「心理発生」のワークをしていく際、個人的に克己していくのがわかり、深遠な秘教的知識にそのように近づいていく。数えきれないほどの長い歳月の流れを通してずっとそこに存在してきたその知識は、多くの空虚と疑問に対する答えを心から求めているすべての人々が利用できるもので、知らず知らずのうちに、偉大なる師の不滅の示唆に答えているだろう。「求めなさい、そうすれば見つかるだろう」〔『ルカ』 11：9〕

つまるところ、「心理発生」は、古代のデルフィの神穀に刻まれた次の言葉に基づいていると言える。

「汝に警告する。汝がいかなる人間であっても、おー、自然の神秘を探ろうと望む汝よ。汝自身の内に探しものを見つけないならば、外にもそれを見つけれないであろう。汝自身の家の良さを見出せないならば、いかにして他の良さを見い出すつもりなのか。汝には宝の中の宝が隠されている。おー、人よ、汝自身を知れ。そうすれば宇宙と神々を知るであろう。」

印象の変換

人生の変容について話していくが、これは深く決意すれば可能である。

変換とは、あるものが別のものになることを意味する。あらゆるものが変化の影響を受けやすいというのは当然のことである。

物質にはよく知られた変化が存在する。例えば、砂糖がアルコールに変わり、それが発酵の作用によって酢になることは誰も否定できないだろう。これは分子物質の変化である。元素の化学的寿命についてはよく知られている。たとえば、ラジウムはゆっくりと鉛に変化する。

中世の錬金術師たちは鉛を金に変えることについて話した。しかし、それらは必ずしも純粹に物理的な金属の問題に言及しているわけではない。彼らは通常、この言葉で、人格の鉛が精神の黄金に変わることを示そうとしたのだ。したがって、これらすべてのことを振り返る価値がある。

福音書では、成長できる種子に匹敵する地上の人間という考えは、再び生まれた人間の再生という考えと同じ意味を持っている。穀物が死ななければ植物は成長しないのは明らかである。あらゆる変化には死と誕生がある。

ノーシスでは、人間は通常 3 つの栄養素を吸収する 3 階建ての工場であると考え

る。通常、食物は工場の下層階に相当し、胃で処理される。空気は当然 2 階に関連し、肺に相当する。そして印象は間違いなく 3 階、つまり脳に関係している。

我々が食べる食べ物は絶えず変化する。これは疑う余地のない事実である。人生のプロセスは、それ自体が変容である。宇宙のあらゆる生物は、ある物質を別の物質に変換することで生きてい。たとえば、植物は地球上の水、空気、塩分を新しい重要な植物物質、つまりナッツ、果物、ジャガイモ、レモンなど我々にとって有用な要素に変換する。つまり、すべては変革なのである。

太陽光の作用により、様々な自然の発酵が起こる。通常、地球の表面全体に広がる生命の敏感な膜が、すべての宇宙の力を惑星世界の内部に導いていることは疑いの余地がない。しかし、あらゆる植物、あらゆる昆虫、あらゆる生物、そして誤って人間と呼ばれている知的動物でさえも、特定の宇宙の力を吸収し、同化し、それを変換し、無意識のうちに惑星有機体の下層に伝達します。このような変化した力

は、我々が住む惑星有機体の経済全体と密接に関係している。疑いなく、それぞれの生物は、その種に応じて、特定の力を変換し、それを地球内部に伝達して世界の経済に貢献している。したがって、存在するすべての生物は同じ機能を果たしている。

我々が生きるために必要な食べ物を食べると、当然ながら、それは少しずつ、我々の存在に欠かせないあらゆる要素に変換される。我々の体内で物質を変換するこれらのプロセスを実行するのは誰でしょうか？それは本能センターであることは明らかである。このセンターの知恵は本当に素晴らしい。

消化はそれ自体が変換である。胃の中の、つまり人間の有機体のこの3階建ての工場の下の部分にある食べ物は、変化を受ける。胃を通過せずに何かが入ってきた場合、体はビタミンやタンパク質を吸収することができず、単に消化不良になってしまう。このテーマについて考えてみると、我々は変革を起こす必要性を理解するようになるだろう。

物理的な食べ物は変化することは明らかだが、我々に考えさせることがある。それは、教育を受けた印象の変化が我々の中に存在しているかどうかである。

本来の自然の目的のためには、誤って人間と呼ばれている知的動物が実際に印象を変換する必要はない。しかし、人は、いわば背景知識を当然に持ち、自分自身で印象を変えることができ、その必要性の理由を理解しなければなりません。

印象を変えることができれば素晴らしい。ほぼすべての人は、実際の生活の領域で自分自身を見ており、この物質世界が彼らが切望し、求めているものを与えてくれると信じているが、これは本当に大きな間違いである。生命そのものは、単なる印象という形で我々、我々の身体の中に入り込んでくる。まず最初に理解しなければならないのは、印象の世界と密接に関係する秘教的なワークの意味である。

それらを変革する必要性があるのだろうか。実にその通り！心に浮かんだ印象を変えなければ、人生を真に変えることは不可能である。

これらの文章を読んでいる人は、ここで何が言われているかをよく考えるべきだ。我々は非常に革命的なことを話している。なぜなら、誰もが物質的なものは現実だ

と信じているからである。しかし、もう少し深く見てみると、我々が毎瞬間、あらゆる瞬間に実際に受け取っているものは、単なる印象に過ぎないことがわかるだろう。

好きな人や嫌いな人を見たとき、我々が最初に抱くのは、その性質に関する印象ではないだろうか。これを否定することはできない。人生は印象の連続であり、無知な啓蒙者が信じているように、もっぱら物質主義的な種類の物理的な物ではない。人生の現実はあるあなたの印象なのである！

我々が提示している考えは、把握や理解することがそれほど単純ではないことは明らかである。読者は、人生はそれ自体として存在するが、その印象として存在するのではないと確信するかもしれない。彼らはこの物質世界から非常に影響を受けているので、明らかにこのように考える。たとえば、あちらの椅子に座って、この色のスーツやあの色のスーツを着ている人を見たとする。我々に挨拶する人、我々に微笑みかけてくれる人などは、我々にとって本当に誠実な人である。

しかし、それらすべてについて深く瞑想すると、印象こそが真実であるという結論に達する。これらは感覚の窓を通して自然に心に届く。

人生は印象という形で我々にやって来る。そして、まさにそこに、我々が自分自身を磨く機会が存在する。まず、何をすればいいだろうか。我々はすべき作業を理解しなければならない。どうすれば自分自身の心理的变化を達成できるのだろうか。そう、我々が毎瞬間、あらゆる瞬間に受け取っている印象に取り組むことによってである。この最初のワークは「第一の意識のショック」と呼ばれている。これは、我々が外の世界について知っていることすべてであるこれらの印象に関係している。現実の物、現実の人間はどれくらい大きいのだろうか。

もし我々に、例えば、見るための目、聞くための耳、あるいは、体内に取り込んだ食物を味わうための口といった感覚がなかったら。我々にとって、物質世界と呼ばれるものが存在するのだろうか。もちろん、絶対に否である。

我々は毎日、内面的に変革していく必要がある。我々の心理的な外見を変えるには、我々に降りかかる印象に取り組む必要がある。

ここで教えられていることの意義を、自己観察から始めて自分自身の努力を通じて十分に考えてみると、秘教的なワークの実践面では、すべてが印象の変化とそこから自然に生じる結果に密接に関係していることがわかる。

印象の変容に関する研究をなぜ「第一の意識的ショック」と呼ぶのだろうか。なぜなら、「ショック」は純粹に機械的な方法では観察できないものだからである。これは機械的に行うことは決してできず、自覚的な努力が必要である。このワークを理解し始めると、人が自然の目的に奉仕する機械的な人間であることをやめ始めることは明らかである。

たとえば、否定的な感情、怒りの気分、同一視、自己への配慮、連続する自己、嘘、自己正当化、謝罪、我々が陥っている無意識の状態などに関する作業はすべて、印象の変換と、これらすべてから生じる結果に関係している。ある意味では、自分自身に対する取り組みを、変容という意味で解剖に例えるのが適切だろう。印象が入るところに変化の要素を形成することが必要であり、これを忘れないようにしよう。

ワークを理解することで、人生をワークとして受け入れることができ、そしてあなたは真に自己を思い出す絶え間ない状態に入るだろう。印象の変換の恐ろしい現実感が自然にあなたに伝わるだろう。印象自体は、通常、あるいは超通常と言った方がよいかもしれないが、自然にあなたをより良い人生へと導き、あなた自身の変化の始まるの時には、もはやあなたに作用しなくなるだろう。しかし、あなたが同じように考え、同じように人生に取り組み続ける限り、あなた自身に変化が起きないことは明らかである。人生の印象を変えることは、自分自身を変えることである。このまったく新しい考え方は、このような変革を実現するのに役立つ。この議論全体は、我々自身を根本的に変革する方法にのみ基づいている。変革しなければ何も達成されない。

もちろん、人生は我々に常に反応することを要求していることは理解できるだろう。これらすべての反応が我々の個人的な生活を形作る。人生を変えるということは、自分自身の反応を変えることである。外部の生活は、我々に、いわば定型的な

方法で絶えず反応することを強いる単なる印象として届く。我々の個人的な生活を形作る反応がすべて否定的なものであれば、我々の人生も否定的なものになる。

人生は、心に届く印象に対する絶え間ない反応として起こる、一連の否定的な反応の連続で構成されている。したがって、我々の課題は、人生における印象を変え、このような否定的な反応を引き起こさないようにすることである。しかし、これを達成するには、瞬間瞬間に自己観察することが必要である。

したがって、我々自身の印象を研究することが急務である。

印象は主観的かつ機械的な方法でもたらされることを許してはならない。そのようなコントロールから始めることは、人生を始めること、より意識的に生き始めることに等しい。個人は、印象が機械的に届くのを我慢することができる。このように行動することで、印象を変容させ、意識的に生き始める。

第一の意識のショックとは、我々に伝わる印象を変換することである。マインドに届いた印象を、その瞬間に変えることができれば、我々の存在に有益な素晴らしい結果を得ることができるだろう。

我々は、いつでも印刷結果に取り組み続けることができる。もちろん、それらは機械的な影響なしに消滅する。なぜなら、この機械的な影響は我々の精神にしばしば壊滅的な影響を及ぼすからである。

この秘教的なノーシス主義の作業は、印象が入り込むところまで実行されなければならない。なぜなら、印象は人格によって機械的に間違った場所に分配され、古い反応を呼び起こすからである。

これを簡単に説明してみよう。次の例を見てみよう。透明な湖に石を投げ込むと、湖の中に印象が生まれ、石が与えた印象に対する反応が中心から周辺へと伝わる波として現れる。

ボールが壁に向かって投げられると、壁がその衝撃を受け、その後、ボールが投げた人のところに戻るという反応が起こる。まあ、直接当たらないかもしれないが、ボールは跳ね返る、それが反応である。

さて、心を湖として想像してみよう。突然、ある人物のイメージが現れ、そのイメージは、心に浮かぶ我々の例の石のようなものである。つまり、心は印象という形で反応する。印象とは、心に届いたイメージによって生み出されるものであり、反応とは、そのような印象に対する反応である。

世界は印象で構成されている。たとえば、イメージは感覚を通じて我々の心に届く。テーブルが到着したとか、テーブルが脳に入ったと言うことはできない。それは不合理だが、テーブルのイメージがそこにあるため、我々の心はすぐに反応し、「これは木製のテーブル、または金属製のテーブルだ」などと言う。

あまり心地よい印象ではないもの、例えば、侮辱する人の言葉などもあるだろう。侮辱する人の言葉を変換することはできるだろうか。

言葉は言葉であり、それで我々に何ができるだろうか。そのような言葉が我々に与える印象を変えることは可能である。ノーシス主義の教えは、「我々は同胞の不快な顕現を歓迎しなければならない」という命題を通して、我々の内なるキリストである第二の力を結晶化することを教えている。

前の命題は、侮辱者の言葉が我々に与える印象を変える方法を提供する。仲間の人間からの不快な兆候を歓迎すること。この仮定は、自然に我々を第二の力、つまり我々の中にあるキリストの結晶化へと導くだろう。キリストが我々の中に現れ、形を成すようになるのだ。

もし我々が物質世界について印象以外何も知らないのであれば、物質世界は厳密に言えば人々が信じているほど外部のものではないことになる。エマニュエル・カントは正しくこう言った。「外側にあるものは内側にある。」内面が重要ならば、内面を変えなければならない。印象は内部的なものであり、我々が見るすべての物体や物、すべてのものは印象の形で我々の中に存在する。

印象を変えなければ、我々の中では何も変わらない。欲望、貪欲、自尊心、憎しみなどは、我々の精神の中に絶えず振動する印象として存在する。

こうした印象の機械的な結果は、我々が自分の中に持ち、通常自己と呼んでいる非人間的な要素のすべてであり、それらが一緒になって私自身、つまり「我」を構成している。

例えば、ある人が挑発的な女性を見て、その印象を変えないとすると、その結果、その好色な性質の印象が、その人の中に彼女を所有したいという欲望を生み出すことになるだろう。このような欲望は、受けた印象の結果となり、我々の精神の中で結晶化し、形をとり、別の集合体、つまり非人間的な要素、全体として自我を構成する非人間的な要素の合計に加えられる新しいタイプの欲望的な自己になる。

我々の中には、怒り、貪欲、色欲、嫉妬、傲慢、怠惰、そして暴食がある。なぜ怒りがあるのか。なぜなら、多くの印象が我々の内面にまで届いたにもかかわらず、我々はそれを決して変換させなかったからである。怒りの印象の機械的な結果が、我々の精神の中に存在し、振動し、絶えず我々に怒りを感じさせる自己を形成している。

なぜ貪欲なのか。確かに、お金、宝石、あらゆる種類の物質的なものなど、多くのものが我々の貪欲さを刺激する。それらの物、それらの対象は、印象の形で我々にやって来て、我々は、それらの印象を何か他のもの、美への魅力、喜びなどに変換しないという間違いを犯した。そのような変換されない印象は、当然ながら、我々が今心の中に抱えている貪欲な「我」に変わる。

なぜ性欲なのか。すでに述べたように、さまざまな形の欲望は印象の形で我々にやって来る。つまり、エロティックなイメージが我々の心の中に生じ、それに対する反応が欲望なのである。我々はこれらの好色な波、この不健康なエロティシズムを変えなかったため、当然、その結果がすぐに現れた。我々の精神の中に新しい病的な「我」生まれたのである。

したがって、今日我々は、自分自身の中にある印象とその機械的な結果に取り組まなければならない。我々の心の中には、怒り、貪欲、暴食、傲慢、怠惰、嫉妬、欲望といった印象があり、我々の中には、そのような印象の機械的な結果、つまり、今や理解し排除する必要がある、喧嘩好きで怒鳴り散らす自己の集団も存在する。

我々の人生におけるそのような作業は、印象をどのように変換するかを知ること、また、過去に変換されなかった印象の機械的な結果をどのように排除するかを知ることである。

外界自体は存在しない。存在するのは印象であり、印象は内部的なものであり、そのような印象に対する反応は完全に内部的なものである。

誰も、木そのものを見ているとは言えないだろう。木の画像は見ているが、木自体を見ているわけではない。エマニュエル・カントが言ったように、そこにあるもの、誰もそれを見ることはできないが、物のイメージを見ているのだ。つまり、木や物の印象が我々の中に生じ、これらは内的なものであり、マインドのものである。

自分自身の内面的な修正を行わなければ、結果はすぐに現れる。つまり、新たな「我」が誕生し、それが我々の本質、意識をさらに奴隷化し、我々が生きる夢をさらに強化することになる。

物質世界との関係において自分の中に存在するすべてのもの（それは単なる印象に過ぎない）を本当に理解すると、それらの印象を変容させる必要性も理解し、そうすることで自分自身の変換が起こる。

中傷や侮辱する者の言葉ほど人を傷つけるものはない。そのような言葉が我々に与える印象を変えることができれば、その言葉は価値がなくなり、つまり資金のない小切手のようなものになる。確かに、侮辱する者の言葉は、侮辱される者の言葉以上の価値はない。したがって、侮辱された人がその価値を認めなければ、繰り返すが、その人の言葉は不渡り小切手のようなものである。これを理解すると、人はそのような言葉の印象を、例えば愛や侮辱者に対する同情など、何か他のものに変換する。これは当然、変換を意味する。このようにして、我々は現在の印象だけでなく、過去や未来の印象も常に変えていく必要がある。

我々の中には、過去に変換しなかったという過ちを犯した印象が数多くあり、意識が自由になり目覚めるためには、今や分解され消滅させられる必要がある自己であるこれらの印象の機械的な結果が数多くある。

私が言っていることをよく考えることが重要である。物や人は、我々の心の中にある印象に過ぎない。これらの印象を変えれば、我々の生活は根本的に変わるだろう。

たとえば、ある人がプライドを持っている場合、それは無知に基づいている。たとえば、ある人が自分の社会的地位やお金に誇りを感じるのはそのためである。しかし、例えば、その人が自分の社会的地位は純粹に精神的な問題であり、自分の心に届いた一連の印象、つまり自分の社会的地位についての印象であると考えているとしたら、そのような状態は単なる精神的な問題に過ぎないと考えたり、自分の価値の問題を分析したりすると、自分の立場が印象の形でマインドの中に存在していることに気づくだろう。お金や社会的地位によって生み出される印象は、心の外的な印象に過ぎない。それらは心の印象に過ぎないということを理解するだけで、そこに変化が起こる。すると、プライドは自然に衰え、崩壊し、謙虚さが自然に我々の中に生まれる。

印象の変容のプロセスの研究を続けながら、別のことを続けていこう。たとえば、好色な女性のイメージがマインドに浮かんたり、マインドに浮かんたりする場合、そのようなイメージは印象であり、それは明白である。我々は理解を通してその好色な印象を変えることができる。その瞬間に、この女性が死に、その体が神殿の中で塵と化すと考えるだけで十分であり、また、想像力でその体が墓の中で崩壊していくのを見たなら、その好色な印象を貞淑さに変えるには十分すぎるほどであろう。それを変換しなければ、それは性欲の別の「我」に加わることになる。

理解を通して、マインドに浮かぶ印象を変えることが重要である。外の世界が通常信じられているほど外部の世界ではないというのは、極めて論理的である。世界から我々に届くものはすべて内部的なものであり、それは内部的な印象に過ぎないからである。

誰もマインドの中に木、椅子、家、宮殿、石を置くことはできない。すべては印象という形で我々の心に浮かぶ。それだけなのだ。我々が外部と呼んでいるが、実際には我々が信じているほど外部ではない世界の印象。理解を通じて印象を変えることが不可欠である。もし誰かが我々に挨拶し、我々を褒めたとしたら、そのおべっ

か使いが我々の中に引き起こす虚栄心をどうやって変えることができるだろうか。明らかに、賞賛やお世辞は我々の心に届く印象に過ぎず、心は虚栄心という形で反応する。しかし、これらの印象が変換されれば、虚栄心は存在しえない。おべっか使いの言葉はどのように変化するだろうか。理解を通してである。自分が宇宙の片隅にいる極小の生き物に過ぎないことを本当に理解すると、人はすぐに自分でそれらの賞賛やおべっかの印象を何か別のものに変換する。人は自分の立場を理解しているため、そのような印象を、それが実際何であるか、つまり塵、宇宙の塵に変換する。

我々が住んでいる銀河系は何百万もの世界で構成されていることはわかっている。地球とは何だろうか。無限にある塵の粒子である。そして、もし我々はその粒子の微生物であると言ったら、どうなるだろうか。我々がお世辞を言われたときにこのことを理解していれば、お世辞や称賛や賞賛に関連する印象を変えることができ、結果として誇りという形で反応することはなくなるだろう。

このことについて深く考えれば考えるほど、印象を完全に変換する必要性が理解できるようになるだろう。

我々が外部として見るものはすべて内部のものである。自分の内面に取り組まなければ、習慣を変えることができず、間違った道へ進んでしまうだろう。別の人間になりたいなら、自分自身を完全に変える必要があり、まずは自分の印象を変えることから始めなければならない。動物的、獣的な印象を信仰の要素に変換することによって、性的変容、変態が我々の中に生じる。

疑いなく、印象のこの側面は明確かつ正確に分析される価値がある。我々が受け取ったり獲得したりした人格は、人生の印象を受け取るが、実質的には死んだものであるため、それを変換することはない。

もし印象が本質に直接伝われば、それが変換されることは明らかである。なぜなら、実際、本質はそれを人間という機械の対応する中心に正確に沈着させるからである。

性格とは、我々が獲得するすべてのものに当てはまる言葉である。人生のあらゆる側面からの印象を、その性格がその質と関連性に応じて限定的かつほぼ定型的な方法で翻訳していることは明らかである。

この点に関して、ノーシスの秘教的な研究においては、人格は、あらゆる考え、概念、先入観、意見、偏見を扱う、職場の出来の悪い秘書に例えられることがある。辞書、あらゆる種類の百科事典、参考書などがたくさんあり、その独特な考え方に従って、精神的、感情的、肉体的中心（知的、運動的、感情的、本能的、性的）の中心と結びついている。その結果、または当然の結果として、ほとんどの場合、間違っただセンターとの通信が発生する。つまり、到着した印象は間違っただセンター、つまり、それらに対応していない場所に伝達され、当然ながら誤った結果が生成される。

よりわかりやすくするために例を挙げよう。女性が紳士をととても思いやりと敬意を持って扱うとする。紳士が心で受け取っている印象が人格によって受け取られ、それが間違っただセンターに送られていることは明らかである。彼はたいてい女性を性センターに送り、この紳士は女性が自分を愛していると固く信じるようになり、論理的に、女性に愛情表現をしかけるのにそれほど時間はかからない。間違いなく、もしその女性がその紳士に対してそのような思いを持ったことがなければ、当然ながら、彼女は驚かざるを得ないだろう。それは印象の変換がうまくいかなかった結果である。ここで、人格がいかに悪い秘書であるかが理解できる。疑いなく、人の人生は、出来事が実際に何を意味するのか全く理解せずに参考書で変換を探し、その結果、何が起こるかを心配することなく、ただ自分の義務を果たしているという気持ちでそれを伝えるこの秘書にかかっている。

これが我々の内面の状況である。この寓話で理解すべき重要なことは、我々は人格を獲得すべきであるにもかかわらず、残念ながらその人格が我々の人生を支配し始めるということである。

確かに、これは特定の人々にのみ起こると想像するのは無意味である。それは誰にでも、どんな人にでも起こる。

この証拠は、我々に伝わる印象によって生み出される特徴的な反応が数多くあるという観察の中に見出される。残念なことに、こうした機械的な反応が我々を支配している。自らを自由派と呼ぼうが保守派と呼ぼうが、革命派と呼ぼうがボルシェビキ派と呼ぼうが、言葉の意味において善と悪を問わず、人生においては誰もが人生そのものによって支配されていることは明らかである。

外界からの影響に対するこれらの反応が我々自身の人生を構成していることは明らかである。この意味で、人類は完全に機械的であると断言できる。

人間は皆、人生において、その存在の実際的な経験となる膨大な量の反応を形成してきた。あらゆる行為は反応、つまり特定の種類の行為を生み出すことは明らかであり、そのような反応は経験と呼ばれる。

重要なことは、例えば、自分の行動や反応をよりよく理解するために、マインドをリラックスさせることができるようになることだ。この「精神的なリラクゼーション」というものは素晴らしい。ベッドか快適な椅子に横になり、すべての筋肉を辛抱強くリラックスさせてから、すべての考え、欲望、感情、記憶をマインドから消し去る。心が静まる時、マインドが沈黙しているとき、我々は自分自身をよりよく知ることができる。静寂と精神的な沈黙の瞬間にこそ、我々は実際の生活におけるあらゆる行動の厳しい現実を直接体験することになるのである。

マインドが完全に休まっているとき、我々は、数多くの要素や副次的な要素、行動や反応、欲望、情熱などを、自分たちとは異質なものと見なし、自分たちや自分の性格をコントロールできるようになる適切な瞬間を待っている。だからこそ、沈黙とマインドの静けさが大切なのだ。明らかに、理解を緩和することは、我々を個人の自己認識に導くため、言葉の完全な意味で有益である。

したがって、人生のすべて、つまり外的な人生、我々が見て経験するものは、各人にとって、物質世界から来る印象に対する反応なのである。

人生というものは、誰にとっても同じ、固定した確固としたものだと考えるのは大きな間違いである。確かに、人類に存在する人生に対する印象は無限であるため、同じ印象を持つ人は一人もいない。

信じられないかもしれないが、すべての人間は「集団催眠」状態にある。このような催眠状態は、忌まわしいクンダバッファ器官の残留状態によって生み出される。これが排除されると、さまざまな精神的集合体または非人間的な要素が残り、それらが一緒になって私自身、つまり自己を構成する。これらの要素と副次的な要素は、意識を調整し、催眠状態に保ちます。つまり、集団催眠が存在するのだ。全員が魅了されているのだ！

マインドは五感の世界に囚われており、どうすればそこから独立できるのか理解できず、自分自身が神であると固く信じている。我々の内的な人生、つまり思考と感情の真の人生は、単なる推論や知的概念と混同され続けている。しかし同時に、我々が本当に生きている場所は思考と感情の世界だということを我々はよく知っている。これは誰も否定できないことである。

確かに、人生とは我々の人生に対する印象であり、我々が望めば、そのような印象を変えることができるのは明らかである。しかし、すでに述べたように、感覚の催眠術は非常に強力であるため、これを理解するのは非常に難しい考えである。

人生とは我々の印象であり、それは変化することができる。我々は自分の印象を変えることを学ぶ必要があるが、五感の世界に執着したままでは自分自身の中で何かを変えることはできない。

私が「革命的心理学の書」で述べたように、経験から、ノーシス主義の秘教的研究が否定的なものである場合、それは自分自身の責任によるものであることがわかる。

感覚的な観点から言えば、目や耳を通して見たり聞いたりする外の世界のこの人やあの人責任があるということになる。これらの人たちは我々が悪いと言うだろうが、真の責任は我々が人々に対して抱く印象にある。我々は、心の底では従順な羊である人を邪悪な人間だと思い込むことがよくある。

人生について我々が抱くすべての印象を変えることを学ぶことは非常に重要である。「我々は、仲間の人間からの不快な行為を歓迎することを学ばなければならない。」

マインドの胃

先の「印象の変換」で研究したように、三種類の食物が存在することを我々は知っている。おのおのが呼吸、本来の意味での食物、および印象と関係する。

食物の消化の結果、生命力は血に同化・吸収される。呼吸の結果として、人間の生命にとって非常に価値ある酸素が吸収される。印象の吸収または消化の結果、他の二つよりも繊細なエネルギーが吸収される。

五感は印象に相当する。快・不快という二種類の印象が存在する。

人間は生きざまを知る必要があるけれども、そのためには印象の「消化・変換」を覚えなさいといけなさい、これは「理解」のためにきわめて重要である。

本当に生き方を知りたいならば印象を変換しないといけなさい。マインドに届く印象はすべて水素 48 である。哀れにも人類は機械的に生きる。人間はチャクラを活性化するために水素 48 を水素 24 に変換し、マインドを強化するために水素 24 を水素 12 に変換し、意志を強化するために水素 12 を水素 6 に変換する可能性がある。

今日ではマインドを変換し、新たな精神レベルに上昇する必要がある。そうしないと、印象はいつもの間違った場所に届きつづけるだろう。人々は物事をいろいろな角度から見られるし、また自分は卓越していると信じているが、人間のマインドは先入観と偏見に制約されていることに気づいていない。

現代ではマインドの器官を変換しないといけなさい、我々は違った異なった存在にならないといけなさい。印象の変換・消化に耐える、高等思考の器官を緊急につくりあげる必要がある。

消化器には食物を吸収するための胃があるように、また呼吸器系には酸素を吸収するための肺があるように、人間機械は「マインドの胃」を創造するべきである。それを肉体の胃と混同したり解釈したりしてはならない。

印象を消化する前に変換しないといけなさい。知的動物を何か別のものにするために、ノーシスの教えは前述の胃を創造することを可能にし、容易にしてくれる。

変換の必要性を理解しなかったら、変換は必要となりえない。ノーシスの知識を獲得する際、この理解が芽生える。

人のことについて違ったふうに建設的に考えるとき、それは自分が変わりつつあるという兆しである。「今の自分でない存在となるために、今の自分であることをやめないといけない」。人は自分自身のために自分をなくさないといけない。この結果、自分ではない何者かが現れる。

印象の変換の道において自分自身に正直になり、自分を納得させ〔自分を信じ〕てはならない。はじめは「正当化」するが、そんな「正当化」は自尊心の産物かもしれないので注意深く観察しないとといけない。

印象をもつ前の行動の原因と動機とを発見しないといけない。印象を変換するとき、すべては新しくなる。

意識が目覚めた人間は、過去・現在・未来の印象がもたらす状況を修正できる。環境を変換できないなら、環境と他人にもてあそばれ続けるだろう。

ただ神秘友愛結社 *Occult Fraternity* のマスターのみが、ただちに印象を変換できるが、その一方で人間機械は印象を変換しない。

人生には高等な世界という目的がある。ノーシスの教えは高等な世界を生き、そして不死不滅の太陽人間として生きることが教えてくれる。もし高等な世界を受け入れないと、明らかに変換は無意味となる。

今あるようなマインドは何の役にも立たない。マインドを組織し、作り直し、取りついたりする、すなわち新しい高等思考レベルにする必要がある。

印象を変換できるようになるためには、起こったとおりに場面を再現し、我々を傷つけたのは何なのか調べないといけない。印象を消化しないと食物を摂取しないだろうし、摂取しないと「存在（ビーイング）」の高次的体は衰えるだろう。

「我」は水素 48 に支配され養われる。毎日、毎時、新しい「我」がいくつか誕生して生きているのである。たとえば蚊や雨などに悩まされ、いつも複数の「我」の増減がある。

良い印象も変換すべきである。心理状態に影響を及ぼした印象が日中に三つあったなら、夜にそれらの印象を研究し、きちんとした方法を用いて変換すべきである。ひとつひとつの「我」は他のものと結びつき、関連している。いくつかの「我」は連動して、同じ場面をもたらす。

印象を変換するためには分析的になり、思慮深くならないといけない。このようにして新たな能力が開花する。人々が変換しないなら、おかしい恥ずべき状態にいつづける。消化しないなら退化しつつある。

その日のうちに印象を消化しないといけない…。太陽が読者の怒りに隠れるのを許してはならない。物事をありのままに見て、何かの犠牲にならないように、マインドの器官－マインドの胃－を創造しないといけない。

日々の印象の変換法

就寝前、次のような仕方で日々の印象を変換するのは緊急に必要である。

1. 完全なリラックス。
2. 瞑想状態に達する。
3. 起こったとおりに場면을よみがえらせる。
4. 問題を引き起こした「我」を、自分自身の内部でさがす。
5. 冷静に観察しつつ、「エゴ」を被告席にすわらせ、裁判にかける。
6. 「問題の我」(I－problem)を崩壊させてくれるよう聖なる母タンダリニーに願う。

第2章

像、価値、アイデンティティ

マインド力学では、マインドが機能する理由と原因について何か知る必要がある。

マインド力学では、マインドのいろいろな機能の理由と原因について知るのは緊急に必要である。

人間のマインドの潜在力を本当に知りたいというのであれば、ひとつの現実的な方法が必要となる。

我々は、価値の質、アイデンティティ、自分自身の像を改善する必要がある。私が思うに、価値と像とアイデンティティを変えるのは基本である。

まちがって人間と呼ばれる知的動物は、その正真正銘のアイデンティティと価値と像を否定するよう教育されてきた。

いちばん抵抗の少ない道を進んで、マインドに、内面に主観的に据え付けられた否定的文化を受け入れるのは馬鹿げている。我々は客観的な文化を必要としている。

そのように、いちばん抵抗の少ない路線を進んで、この退廃した時代の主観的文化を受け入れるのは、疑いもなく馬鹿げている。

像、価値、アイデンティティということに関して、全面的革命と決定的変化を通る必要がある。

人の外側のイメージと、その人を取り巻くさまざまな環境は、外側のイメージと心理過程の産物そのものである。

自己イメージは異なる。それは内なる KM、コスミックマン、コスモスマン、私たちの神聖な原型、真の「存在（ビーイング）」である。

イメージ、価値観、アイデンティティを根本的に変えなければならない。これは統合革命である。我々には「存在（ビーイング）」のアイデンティティ、「存在（ビーイング）」のイメージにおける「存在（ビーイング）」の価値が必要です。

心の中に蓄えられた知性の蓄えを発見すれば、それを解放することができる。知性の蓄えは、自我の崩壊と精神の解放に関連する作業において私たちを導く「存在（ビーイング）」のさまざまな部分である。心の中に含まれる知性の蓄えは、心の解放に関連した作業において私たちを導く。「存在（ビーイング）」の価値が知性を構成する。知性の蓄えは、「我」の消滅と精神の解放に関連する心理的作業において私たちを導き、方向付ける「存在（ビーイング）」のさまざまな部分である。

マインドと「存在（ビーイング）」を常に区別しよう。マインドが「我」の中に閉じ込められていることを受け入れると、その人が成熟し始めたことを示す。

「我」の解体に関しては、構造分析と取引分析を組み合わせる必要がある。

知性の価値だけが、望ましくない精神的要素の崩壊を通じてマインドを解放することができる。

自己批判

私たちは自分自身に正直になり、「自己批判」という巨大なメスで自分自身を分析しなければならない。他人の間違いを批判するのは馬鹿げている。重要なのは、自分自身の間違いを発見し、分析と深い理解を通じてそれを解消することである。

集団行動は、各個人が自分の行動を完全かつ絶対的に認識しながら個別に行動できる場合にのみ可能になります。

弁証法革命のシステムは、せっかちな人にとっては非常に長く思えるだろう。しかし、他の方法は存在しない。心理的および社会的秩序において迅速かつ即時の変化を望む人々は、厳格な規範、精神の独裁を作り出し、他人がどう考えるべきかを知りたいことを望むのではなく、むしろ何を考えなければならないかを指示する。

あらゆる突然の変化は、その変化自体の目的を挫折させ、人間は再び自分が戦ってきたものの犠牲者となってしまう。いかなる組織の失敗の原因もすべて私たち自身の中にある。

自己イメージ

自分自身を正しく認識し、想像し、評価するというこのことは、非同一化という素晴らしい教義と混同されるべきではない。

老朽化し退化した文化を心に留めておくのではなく、我々は自らを再教育する必要がある。

我々は自分自身について正確な概念を持つ必要がある。誰もが自分自身について誤った概念を持っています。自分自身を再発見し、自分自身を知り、自分自身を再教育し、自分自身を正しく再評価することが不可欠である。

「我」の中に閉じ込められたマインドは、「存在（ビーイング）」の真の価値に気づいていない。マインドは、これまで知らなかったことをどうやって認識できるのだろうか？

精神的な自由はマインドを解放することによってのみ可能になります。

自己アイデンティティに関する誤った概念はマインドを閉塞させる。外部は内部の反映に過ぎない。

人間のイメージは外見上のイメージを生み出す。外部は内部を映す鏡である。すべての人は、その人自身の精神プロセスの結果である。

人間は、自分自身を正しく認識し、評価し、想像したいのであれば、自分のマインドを自己探求しなければなりません。人間の思考は 99%が否定的で有害である。

自己崇拜

社会における相互作用の中には、自己発見、自己啓示が存在する。

実際、共存においてマインドが敏感に知覚している時、隠れた欠陥が表面化し、飛び出し、そして我々はそれらがあるがままの形で見ると、

すべての人間は心の奥底ではナルシストであり、自分自身を愛している。劇場の舞台に立つ歌手を観察してみなさい。彼は自分自身に夢中で、自分自身を崇拜し、自分自身を偶像化している。そして拍手が降り注ぐと、彼は自己崇拜の頂点に達す

る。なぜなら、それこそがまさに彼が望んでいることであり、切望していることであり、限らない渴望をもって待ち望んでいることだからである。

実際、虚栄心は自尊心の生きた現れです。「我」は他人に崇拝されるために自分自身を飾り立てる。

「我」が子供の性格を支配し始めると、自発的な美しさは消え、愛する自我の過大評価が始まり、子供は世界を支配し、地球上で最も強力になることを夢見るようになる。

自己評価

いわゆる自己評価や内なる評価を自然に表現させる人は、良心の声に導かれて正しい道を歩むだろう。

自己評価に従う人は皆、実際に、そして自分自身の権利によって、良き市民、良き夫、良き宣教師、良き父親などになる。

内なる矛盾を知るためには、自分自身を自己発見する必要がある。自分自身を発見した人は、複数化された「我」を解消することに成功することができる。

内なる矛盾は「我」の多元性に基づいている。我々が内に抱える途方もない矛盾は、我々の人生を痛ましいほど苦しいものにする。我々は労働者でありながら権力者になりたがる。兵士でありながら将軍になりたがります。我々は自分の家を手に入れようと考え、手に入れた後は、疲弊した別の家が欲しくなるので、それを売ってしまう。

我々は何にも満足せず、観念の中に幸福を求めるが、それらもまた過ぎ去る。私たちは、今日は我々と共にあり、明日は我々に敵対する友人との共存の中に幸福を求める。すると、すべてが幻想であることがわかる。

人生で我々に幸福を与えるものは何もない。矛盾が多すぎる我々は惨めな人間である。

複数化された「我」に終止符を打つことが必要である。このようにしてのみ、私たちの矛盾と苦しみのすべてにおける秘密の起源に終止符を打つことができる。

すでに「我」を解消した人々は、実際に PCC を所有している。

世の中には多くの流派やシステムがあり、蝶のように学校から学校へと飛び回り、常に内なる矛盾に満ち、常に不満を抱き、常に道を探し求め、たとえそれが目の前に迫っていても、それを見つけないことができない人々が多くいる。複数化された「我」は、彼らに真実と人生の道を見せることはない。悟りの最大の敵は「我」である。

「なんと素晴らしい山なのだろう！」と彼は隠遁生活を送っていた山について語った。

「私はあなたに山について尋ねるのではなく、むしろ道について尋ねます。」

「山を越えられなければ、道を見つけないだろう。」と師は答えた。

「我」もまた、善行を行い、心理的性格を改善する多くの功德を得ることはできるが、悟りに到達することは決してできない。

我々は悟りを求めなければならない。そうすれば、他のすべてはそれに加えて与えられるだろう。PPC がなければ悟りを得ることは不可能である。

複数形の「我」を解消せずに、永続的な意識の中心を持つことは不可能である。

自己概念

知的情報や他人の考えは経験ではない。博識は実験ではない。三次元のためのリハーサル、試験、証明は一つのものではない。

意見、概念、理論、仮説は、特定の現象についての検証、実験、完全な認識を意味するものではない。

知性から独立し、あらゆる現象についての知識と直接的な経験を与えることができる、マインドよりも優れた能力が存在するに違いない。

マインドから解放されることでのみ、我々は何が現実であり、あらゆる現象の背後にある潜在的な状態が何であるかを真に体験することができる。

世界は単なる幻想であり、大宇宙の日の終わりには必ず消滅する。

私自身、あなたの身体、私の友人、物、私の家族などは、結局のところ、ヒンズー教徒が「マヤ」と呼ぶ幻想、つまり、遅かれ早かれ宇宙の塵と化す無駄な精神形態なのである。

私の愛する人、私の周りの最も大切な人々などは、現実には存在しない単純な精神形態である。

快楽と苦痛、賞賛と侮辱、勝利と敗北、富と不幸といった知的な二元論は、マインドの苦痛のメカニズムを構成する。

我々がマインドの奴隷である限り、自己の理想的な形と真の幸福は我々の中に存在することはできない。

マインドの奴隷である限り、誰も自己の理想的な形と真の幸福を築くことはできない。

何が現実であるかは、書物に書かれた仮定や外来の考えではなく、直接的な経験の問題である。

知性から解放された人は誰でも、根本的に変化する要素を経験し、感じるができる。

我々がマインドから解放されると、マインドは柔軟で弾力性のある有用な手段となり、それを使って我々は自分自身を表現できるようになる。

優れた論理は、精神から解放されることは、実際には意識を目覚めさせること、つまり自動性を終わらせることと同じであると考えるように我々を促す。しかし、本質を突き詰めよう。他人の屈辱的な考えから離れるべきなのは誰、あるいは何だろうか？これらの質問への答えは明らかである。我々の魂の一部である良心は、自らを解放することができ、また解放すべきものである。

偽の文学の外国の思想は、我々の生活を惨めにするだけです。真の幸福は、我々が知性から解放されたときにのみ可能になる。

しかし、我々は、この望ましい意識の解放には大きな障害があることを認識しなければならない。私は、対立する者たちの壮絶な戦いについて言及したい。

本質、または意識は、残念ながら、イエスとノー、善と悪、高と低、私のものとあなたのもの、好きと嫌い、快と苦痛など、相反する二元論という厄介な知的二元論の中に閉じ込められて生きている。

マインドの海に渦巻く借り物の観念の嵐が止み、対立するものの闘争が終わると、本質は逃れて現実の中に沈み、自己観念、種子観念をその輝きのすべてにおいて発散することを深く理解することは明らかに素晴らしいことである。

第3章

モーチャオ

中国語「モー」は「静かな」とか「平静な」を意味し、「チャオ」は「熟考・内省すじょうりよる」とか「観察する」を意味する。したがって「モーチャオ」は「静慮」や「止観」と訳せる。

困難で骨の折れるのは、すべての潜在意識レベルでマインドの完全な沈黙を達成することである。

単なる表面的レベル、インテレクトのレベル、すなわちいくつかの潜在意識の領域で静寂と沈黙を達成するだけではじゅうぶんではない。なぜならエッセンスは、インフラ意識と無意識の二元性に瓶詰めにされたままだからである。

空の状態にあるマインドは、あまりにも表面的で中身がなくインテレクトに頼っている。マインドの完全な沈黙と静寂を本当に手に入れたければ、静かに内省する必要がある。

けれども、生粋のノーシス主義において「平静さ」と「内省」という用語が、非常に深遠な多くの意味をもっているのは、もちろんわかる。したがって、その特別の含蓄のなかで「平静さ」と「内省」という用語を理解せねばならない。

平静さの感覚は、静けさや安らぎという言葉で通常言い表されるものを超越しており、推理、欲望、矛盾、言葉を越えた最高の状態を意味する。俗世の喧騒を逃れた境地を表しているのである。

同じように、内省の意味は、問題やアイデアを熟考するという意味でいつも使われているものを超えている。ここでは思考活動や黙考ではなく、それ自体の体験に常に啓発された、内省する、澄みきった一種の「客観意識」を意味する。

それゆえ、「平静な」はここでは無思考の平静さであり、「内省」は澄みきった強烈な意識を意味する。

平静な内省、それは無思考の静寂にある澄みきった意識なのである。完全な平静さが続べるとき、真の深遠な悟りが開ける。

分散したマインドと統合されたマインド

マインド力学において、マインドが機能する原因と理由を知ることは緊急に必要である。その原因と理由を解明してはじめて、マインドを有用な道具にできる。

ただマインドのさまざまな機能の理解と知識によってのみ、インテレクトを解放できる。

ただマインドのさまざまな仕組みを知ることによってのみ、我々はマインドから自由になり、マインドを有用な道具にできる。

本当に自分自身のマインドを全面的に支配したいのであれば、自分自身を知るのは後回しにできない。

偉大な医師ヒポクラテスは、マインドの伝統的なマスターの一人であった。人間のマインドは制約されている。

エゴを溶解してはじめて、鎖につながれていない意志がありうる。マインドは人間に従順な機械装置になるべきである。人間のマインドが制約されているという事実を認めるとき、じゅうぶんに成長し始める。

マインドが所有する知性を発見すれば、マインドを解放できる。分散したマインドのかわりに統合的なマインドが必要である。

瞑想の革命

瞑想のテクニックを獲得すると、我々は悟りの高みと、弁証法的改革にまで達することができる。

我々は、自然に静まっているマインドと、力で静めたマインドの違いを理解しなければならない。

もし、マインドを力で静めるなら、それは真の静寂ではない。それは暴力によってつくられたものである。一見静寂のようだが、もっと深いレベルを覗いてみると、そこには大暴風がある。

暴力的に沈黙させたマインドは、真の沈黙状態にあるのではない。その内側の奥底でマインドはざわつき、叫び、絶望に満ちている。

瞑想の間、思考の本源を修正しようとしてはならない。その思考の本源が我々の支配下の状態にあるとき、悟りは自然にやってくる。

マインドを支配下に置くことによって、思考によってつくられた我々の足かせを破壊することができる。マインドの静寂、沈黙を獲得したいのなら、瞬間から瞬間へと生きること、一瞬、一瞬を生きること、一瞬、一瞬を束にして生きるのではなく、まさに今の一瞬を生きることが必要である。

一瞬、一瞬からすべてのものを獲得しなさい。まさに今のこの瞬間はノーシスの子供だからである。それぞれの瞬間は完全であり、生命があり、極めて重大な意味をもつ。今のこの瞬間は、ノーシス主義者にとって特別な性質を持つ。我々は「瞬間の哲学」を愛する。

マスター・ウモンは弟子たちに次のようにいった。「歩く時は歩きなさい。座る時は座りなさい。しかし、ためらってはならない。」

瞑想のテクニックにおける最初の学習は、あらゆる知識にまさる、神聖なる平和の控えの間である。

思考の最も高尚な形は無思考である。静寂、沈黙のマインドを獲得すれば、「我」はそのすべての情欲、欲望、貪欲、恐れ、愛着などと共に姿を消す。

「我」の姿がなく、マインドが休んだときのみ、仏性が目覚め、インティモと結合し、我々をエクスタシーへと導く。

「モナド、偉大なる真実、存在の本質の高次的実在体をまだ持たない人間に浸透する。」と、スブズの黒魔術の学派が主張しているが、それは偽りである。

スブズの恐ろしい狂信者たちに浸透するものは闇の存在である。それは彼等自身の身振り、行為、野獸的で馬鹿げた言葉に現れている。これらの人々は闇に憑依されている。

マインドを静寂、沈黙状態にする目的はたったひとつそれはエッセンスをマインドから解放することである。その結果、エッセンスはモナド、もしくはインティモと融合し、いわゆる「真実」を体験できる。

エクスタシーの間、「我」の姿がないとき、エッセンスは火の霧の世界を自由に生き、「真実」を経験することができる。

マインドが受動的な状態で、完全な静寂、沈黙にあるとき、エッセンス、または仏性はマインドから解放され、エクスタシーがやってくる。

エッセンスは正反対の物事どうしの闘いにはさまれ、常に瓶詰め状態にある。しかし、その闘いが終わり、沈黙が完全化したとき、エッセンスは自由な状態となり、瓶は粉々になる。

我々が瞑想を実行しているとき、マインドは数々の記憶、欲望、激情、心配事、夢中になっている物事などに襲われる。

我々は、注意と散漫の闘いを避けるべきである。我々がマインドのこれらの攻撃者と戦うとき、注意力の散漫と注意力の間に闘争が生ずる。このメンタルな攻撃者を放っているのは「我」である。この闘いがあるところに、静寂と沈黙は存在しない。

我々は自己観察と理解を通じてこの「我」を破棄しなければならない。マインドに現れる一つ一つのイメージ、一つ一つの記憶、一つ一つの思考を調べなければならない。全ての思考にはプラスとマイナスという二つの極があることを覚えておこう。

入ることと、出ことは同じ事柄の二つの局面である。食堂と浴室、高さと低さ、快と不快などーこれらは常に同じ事柄の二極である。

マインドに現れるそれぞれのメンタルな形の二極を調べなければならない。覚えておこう。これらの極性を学ぶことによってのみ、それらの分裂を統合できるということ。

あらゆる精神的な形態は、統合すれば消すことができる。

例をあげよう。婚約者の思い出が我々を襲うとしよう。彼女は美しいだろうか？考えてみよう。美は醜さの対極である。その婚約者は若いうちは美しいが、年をとれば醜くなる。この二つの極を一つに統合しなければならない。彼女に思いをめぐらすことは無価値である。彼女は幻想であり、どんなに美しく見えてもいつかは枯れる花である。

インドでは、この自己観察と精神の研究は、プラティヤーハーラと適切に呼ばれる。

小鳥のように飛び交う思考は、我々自身のマインドの空間を通り過ぎていく。思考は次から次へと絶え間なく列を作って現れるが、何の跡も残さない。

「我」によって投影されたこれらの無限に続く思考の行列は、結局は尽きてしまい、マインドは静かになり、沈黙する。

自己実現を成し遂げた偉大なるマスターは次のように言った。「無限の、思考の投影者である『我』が完全に姿を消した時にのみ、マインドには生みだせ得ない静寂が起こる。この沈黙は尽きることがない。それは時間に縛られるものではない。それは計ることができない。『我』が休息するときだけ、それはやってくる。」

このテクニック全体は次の二つの原理に要約される。

(1) 深い内省

(2) 広大なる平静さ

この無思考の瞑想テクニックによって、マインドの核心部分を働かすことができる。それはエクスタシーを生み出す。

このマインドの中心部分がいわゆる仏性、エッセンス、意識であることを覚えておこう。

仏性が覚醒したとき、我々は悟りを得る。我々は仏性、意識を目覚めさせる必要がある。

ノーシス主義者は瞑想のプラクティスを実行すべきである。西洋式、東洋式いずれの座り方でもよい。

目を閉じなさい。そうすれば、外的世界へ意識が散漫するのを避けられる。

また、肉体を身長にリラックスさせるとよい。どの筋肉も緊張させないように。

仏性、エッセンスは霊に形を与える精神的な物質、内的仏教原理、霊的要素、原料である。

仏性は我々が内的に持つ最高のもので、深い内的瞑想によって覚醒する。

哀れな知的動物が、いわゆる真理を体験する可能性を秘める唯一の要素が本当にこの仏性なのである。

知的動物は、存在の本質を具現化することができない。それは、いまだに高次的実在体を持たないからである。しかし、仏性を覚醒させれば真理を知ることができる。そのために知的動物ができるたった一つのこと―それが瞑想の実践なのである。

機械的連想

イサンはマスター・コイセンに鏡を送った。コイセンは僧たちに鏡を見せて、こう語った。

「この鏡はイサンのものか、私のものか？ おまえたちはイサンのものと言うが、ではどうして私の手のなかにあるのかな？ 私のものと言うが、鏡はイサンの手から私が受け取ったのではないのかな。話してくれ、話してくれ、でないと、こっぴどみに割ってしまうぞ」。

僧たちは相反するそれら二つの考えの間を右往左往するばかりで、マスターは鏡を粉々に割ってしまった。

エッセンスが正反対の物事の上に瓶詰めされているかぎり、エクスタシーはありえない。

バビロニアの時代、偉大なアバターラ、大聖アシアタ・シーマシュの菩薩がこの世に現れた。

墮落していなかったこの菩薩は、あらゆる菩薩のように本質的存在の高次の実在体を正常に発達させていた。

責任を果たせる年になると、彼はヴェジニアナ山に行き、洞窟に入った。伝説によると、彼は意図的、自発的な苦しみを伴った、それぞれが四十日続く、三回にわたる凄まじい断食を行ったという。

第一回目の断食は祈りと瞑想に費やした。

第二回目の断食は、全生涯と前世を調べ直すのに費やした。第二回目の断食は決定的で、マインドの機械的連想を断ち切るのに費やした。彼は食事をせず水を飲むだけで、三十分ごとに二本の胸毛を引き抜いた。

正反対のものごとの基礎になる二種類の機械的連想がある。

a 一考え、言葉、語句などの機械的連想

b イメージ、形、物、人などの機械的連想

ある考えから別の考えを連想し、ある言葉から別の言葉を連想し、またある語句から別の語句を連想し、こうして正反対の物事どうしの闘いが起こる。

ある人から別の人を連想する。誰かの思い出がマインドに浮かぶ。あるイメージから別のイメージを連想し、ある形から別の形を連想し、こうして連想の闘いがつづく。

アバターラ、アシアタ・シーマシュの菩薩は、口では言えないほど苦しみ、百二十日もの間断食し、すさまじい修行をし、内心の難い瞑想に没入して、マインドのしくみを切り離し、そのマインドはしんと静まりかえり、すばらしい沈黙に入った。

その結果、真実の本質的存在を具現し、それと共にエクスタシー状態になった。

アシアタ・シュマシュはアジア各地に、僧院をいくつか建て、意識の目覚めた支配者をいたる所に創設するという偉大な仕事を成し遂げた。'

この菩薩は「存在（ビーイング）」の高次の実在体を持っていたので、瞑想中に真の「存在（ビーイング）」を具現できたのである。

「存在（ビーイング）」の高次の実在体を持っていない者は、神または「存在（ビーイング）」が自分の中で働いたり具現したりできない。だが、「存在（ビーイング）」と融合してそのエクスタシーに加わるために、確かにエッセンスを解放できる。

エクスタシー状態で、我々は生と死の神秘を学ぶことができる。司祭つまりインティモ、「存在（ビーイング）」がやってくるまで、生と死の儀式を学ばないといけない。

「我」の姿が消えるときだけ「存在（ビーイング）」の幸福を体験できる。「我」が存在しない時にのみ、エクスタシーがやってくる。

マインドのしくみを解除するとき、東洋の人々が袋の破裂、虚空の噴出と呼ぶものがやってくる。そのとき歓喜の叫びがある。エッセンス、仏性が正反対の物事どうしの闘いから逃れ、聖者たちのコミュニケーションに加わるためである。

マインドの支配

我々が、マインドからますます独立していかないといけないことは明らかである。

マインドは、我々全員を閉じこめている牢獄、監獄である。自由とは、時間にもマ

インドにも属さない自由とはどのようなものか本当に知りたいのであれば、脱獄する必要がある。

とりわけマインドを「存在（ビーイング）」に属さないものと見なさねばならない。人々はあいにくマインドとまったく一体化して、「私は考えている」と言い、自分がマインドであると感じている。

マインドの強化に打ちこむ学校が存在する。通信教育講座を行って、マインドパワー開発法などを教えるが、それはすべて馬鹿げている。我々を閉じこめている刑務所の鉄格子を強化するのは正しくない。前述したように時間には属さない真の自由を知るために、必要なのは、その鉄格子を破壊することである。

我々が知性の監獄のなかにいるかぎり、真の自由は体験できない。

マインドそれ自体はとても痛ましい監獄であり、マインドをもってして幸福になった者は誰もいない。今日にいたるまで、マインドをもってして幸福になった者はひとりも知られていない。マインドはすべての人を不幸・不運にする。人生のなかで最も幸福なときというのは常に、マインドが働いていないときで、確かに一瞬であった。しかし生涯そのときのことは忘れられないだろう。その瞬間、幸せとは何かを知ったが、一秒しか続かなかった。マインドは幸せとはどんなものか知らず、監獄である！

マインドから解放されたいなら、マインドを統御できるようにならねばならない。それも他人のマインドではなく、自分のマインドである。

支配するべきものとして、まだ言わば飼い慣らす必要のあるものとして、マインドを見るように学ぶことは不可欠である。思い出そう。聖なるマスター、イエスが枝の主日にロバに乗ってエルサレムに入城することを。そのロバは、従わせないといけないマインドを表している。我々がロバに乗るべきで、ロバを我々に乗せられるべきではない。

あいにく人々はロバの乗り方を知らないため、マインドの犠牲者となっている。マインドはあまりにも愚鈍なロバなので、本当にロバに乗りたいならそれを制御しなければならない。

瞑想中はマインドと話をするべきである。疑いが脳裏をかすめるなら、その疑いを「解剖」する必要がある。十分に研究解剖されると、その疑問は記憶に何の痕跡も残さずに消えうせる。しかしその疑問が長びいたり、絶えず宜雄mんと闘おうとすると、そのとき葛藤が生じる。あらゆる疑いは瞑想の妨げとなる。けれども疑問を拒絶することによってではなく、それを分析して本当はその背後に隠れているものを知ることによって、疑問を取り除こう。

マインドに居すわるどんな疑いも、瞑想の妨げとなる。そういうときは疑いを分析、解体し、粉々にしないとイケない。それと闘わずに自己批判というメスで切り開き、きめ細かな容赦のない解剖をする。そのようにしてはじめて、疑いはつまらないものだと気がつき、疑いのなかで現実のことや架空のことを突きとめるだろう。

したがって、疑問は時として概念を明確にするのに役立つこともある。きめ細かな分析によって疑いを取り除き解剖する時、なんらかの真実が発見される。その真実から、より奥深いもの、より多くの知恵、より多くの英知が得られる

智恵というものは自分の直接の経験をもとに、深い瞑想をもとに磨かれる。くり返すが、マインドと話をする必要がしばしばある。なぜなら、マインドに静かに沈黙してほしいとき、馬鹿なこと、くだらないおしゃべり、正反対の物事どうしの闘いにマインドは何度もとらわれ続けるからである。そういうときは、次のように言ってマインドに質問する必要がある。「おいマインドよ、おまえの望みは何か。さあ答えるんだ」。瞑想が深いものであれば、何らかの表象が浮かぶかもしれない。その表象、像、イメージに答えがある。それからマインドと話をして、物事の現実をマインドに教えないとイケない。その答えが間違っていることをマインドに教えるまで。マインドの心配は役立たないこととその役立たない理由をマインドに教えるまで。こうしてついにマインドは静寂にひたり沈黙する。しかし、まだ悟らないことを認めるなら、混沌状態、その観いと絶えまないおしゃべりによる支離滅裂の混乱が相変わらず続くようなら、もう一度マインドを呼び出して命令し質問せねばならない。「おまえの望みは何か。さがし求めているのは何か。どうしてうるさく付きまとうのか」。まるでマインドが部外者であるかのように、はっきりマインドと話さな

いといけない。確かにマインドは部外者で、本質的存在には属さないからである。マインドを部外者のように扱わねばならない。非難し、叱らねばならない。

禅をの上級者は柔道に慣れているが、彼らの「心理的柔道」は来日する観光客には理解できない。たとえば柔道のけいこをしている僧たちを見てみよう。互いに取り組みあって、単なる体操のように見えるが、そうではない。柔道のけいこをしているとき、彼らは実際はとんど肉体に気づいておらず、その闘いで本当に自分自身のマインドを支配しようとしている。柔道の闘いとは、ひとりひとりの自分自身のマインドとの闘いなのである。それゆえ心理的柔道の目的はマインドを従わせること、科学的、技術的にマインドを扱って従わせることにある。

残念ながら、相変わらず浅はかで愚かな西洋人はもちろん柔道の表面しか見ず、柔道を個人的防御と解釈し、禅とチャン〔訳注：禅の中国語読み〕の原理を忘れてしまったが、それは実に悲しむべきことであつた。まったく似たようなことがタロットに起こった。周知のとおり、タロットには昔の智慧のすべてが秘められている。いっさいの宇宙法則と自然法則が含まれているのである。

たとえば性の秘儀に反対意見を述べる人は、タロットのアルカナ 9 に反対意見を述べている。したがって恐ろしいカルマを犯しているのである。進化の教義の側に立って話をする人は、タロットのアルカナ 10 の法則を破っている。

タロットはすべての人の「ものさし」である。私の著書『黄金華の神秘』で述べたように、著者というのは好きなことを書く自由がある、と言ってその本の稿を終えた。しかし、もし宇宙法則に違反して、高等カルマであるカタンシアのもとに転落したくないのであれば、『黄金の書』タロットという「ものさし」を忘れてはならない。

この短い余談の後で私が言いたいのは、非常に神聖で神智にみちたタロットはポーカーゲームに、娯楽のいろいろなカード遊びになりはてたということである。人々はその法則、その原理を忘れてしまった。昔の神殿の、密儀の神殿の聖なる湖が、今日では水泳のためのプールに変わってしまった。

アトランティスにあった古代ネプチューンの密儀の深奥な科学、闘牛の科学である闘牛術は、その原理を失い、今日では低俗な闘牛サーカスに変わってしまった。そ

ういうわけで、まさしくその動きと静止のそれぞれにおいて自分のマインドを従わせるという目的があった「柔道、禅、チャン」が退廃し、西洋ではその原理を失い、現在では個人的防卸のためだけに使われる単なる世俗のものに変わりてたのは不思議ではない。

柔道の心理的な側面を見てみよう。私自身、柔道を練習していないため、今、私が皆さんに物理的な柔道を教えようとしていると言っているわけではない。私が皆さんに教えているのは心理的な柔道である。人はマインドを支配する必要があり、マインドが服従できるようになることが求められ、マインドが従うように強い叱責が必要である。

クリシュナムルティはこのことを教えておらず、禅もチャンも教えていないが、今私の教えているものは「黄竜の第二の宝石」に、智慧の第二の宝石に属する。第一の宝石のなかに禅を含めることができるが、しかし禅では第二の宝石は説明できない。とはいうものの、確かにその心理的柔道は紹介にはなるが。

第二の宝石はマインドを支配し、鞭打ち、叱責する際の規律を意味する。マインドというのは、乗り慣らさないといけない、我慢のできないロバである！

したがって、瞑想中にマインドの静寂と沈黙に達したいのであれば、様々な要素を考慮せねばならない。無秩序を研究する必要がある。そうしてはじめて秩序を確立できるからである。我々のなかで「注意」しているものと、またそうでない「不注意」なものとを知らないといけない。

瞑想に入るときはいつも、マインドは二つの部分すなわち「注意を払う部分」と「注意を払わない部分」に分かれる。「注意」を払わないといけないのは、「注意している」部分ではなく、まさに我々のなかで「不注意」な部分である。不注意な部分を注意している部分にするために、我々のなかで注意していないものを何とかして深く理解して、その方法を研究するとき、マインドの静寂と沈黙に達するだろう。

しかし思慮分別をもって瞑想し、自分自身を審理し、我々のなかで不注意なものを知らないといけない。我々のなかで不注意なものを意識する必要がある。

マインドを統御すべきだと私が言うとき、マインドを統御すべきものはエッセンス、意識である。意識を覚醒させると、マインドを支配する能力をよりいっそう獲得し、そのため我々のなかで「無意識」なものを意識する。

マインドを統御し、それと話をし、叱責し、意志の鞭で打ち、服従させるのは緊急に必要である。この教えは黄龍の第二の宝石に属する。

私の真の「存在（ビーイング）」、サマエル・アウン・ベオールは、古代の中国に転生し、チョウ・リと呼ばれた。私は黄龍教団に加入したが、意識を覚醒させ、『弁証法の革命』を生き、総合的革命を達成する者に、「黄龍の七つの宝石」を届けるよう命じられた。

本当に第二の宝石を最大限に利用したいのであれば、とりわけマインドと同一視すべきではない。というのは自分がマインドだと感じるなら、「私は推理している！」「私は考えている！」と言うなら、その場合でたらめを主張しており、黄龍の教義と意見が一致していないからである。「存在（ビーイング）」は考える必要がなく、推理する必要がないためである。推理するのはマインドである。「存在（ビーイング）」は「存在（ビーイング）」であり、「存在（ビーイング）」の存在理由はまさしく「存在（ビーイング）」である。「存在（ビーイング）」今あり、常に存在し、これからも永久に存在するものである。一つひとつの太陽に鼓動する生命のように、「存在（ビーイング）」は一つひとつの原子に鼓動する生命である。思考するのは「存在（ビーイング）」ではなく、推理するのは「存在（ビーイング）」ではない。我々は「存在（ビーイング）」を全部は具現していないが、その一部は具現していて、これがエッセンスとか仏性で、我々のうちにある魂、心理、精神的な物質である。この生命のあるエッセンスが、マインドを支配する必要がある。

我々のなかで分析するのは複数の我である。我は崩壊させて宇宙の砂ぼこりにすべきマインドの形態、精神形態にすぎないからである。

今ごく特別なことを研究しよう。誰かが我を溶解し除去するというケースが起こりうる。我の溶解にくわえて、その人がメンタル体を創造するというケースもまた起こりうる。明らかにその人は知的な個性を獲得するが、まさにそのメンタル体からも自由にならねばならない。なぜならそのメンタル体も、どんなに非のうちどころ

のない完全なものであっても、やはり推理し考え、「最高の思考法というのは無思考」だからである。考えるかぎり、最高の思考法には達していない。

「存在（ビーイング）」は考える必要がない。それは常に存在し、これからも存在し続けるだろう。したがって、つまり、マインドを服従させ、それに質問しなければならない。他人のマインドを従わせるのは黒魔術であるため、その必要はない。誰かのマインドを支配するのは最悪の種類の妖術であるため、その必要はない。必要なのは自分自身のマインドを従わせ、支配することである。

繰り返すが、瞑想中は、「注意している」部分と「注意していない部分」という二つの部分に分かれる。我々のなかで「不注意」な部分を意識する必要がある。我々が意識するとき、不注意な部分には、疑問といったさまざまな要素、があることを証明できる。人間のマインドに存在する疑いは多くある。それらの疑いはどこから来るのか。たとえば無神論、唯物論、神秘主義を見てみよう。それらを細かく分けると、いろいろな形の懷疑論、無神論、唯物論の存在することがわかる。唯物論者で無神論者だと言われる人々がいるけれども、たとえば彼らは妖術や呪術を恐れる。彼らは自然を敬い、自然のなかに神を見るすべを知っているが、独自の方法である。ある人が霊的なことや宗教的なことについて彼らに話すとき、自分は唯物論者で無神論者だと宣言する。その無神論というのは初期の形態にすぎない。

唯物論と無神論の別の形態、すなわちマルクスレーニン主義、疑い深い懷疑論が存在する。実はその無神論の唯物論者は何かを探しており、存在せずただ単に消え、完全消滅したいと望んでいる。聖なるモナドについては何も知ろうとせず、それを憎む。言うまでもなく、そのように振るまい続ければ、彼は好きなように崩壊するだろうが、それがその無神論者の唯物論者の喜びであり、存在するのをやめ、地球の重心に向けて地獄界へと降下していくだろう。自己崩壊、それが喜びなのである。彼らは滅びるだろうが、実は確かに存在しつづけ、エッセンスは解放されて新たな進化に戻り、新たな退化をへて、何度も何度も様々なサイクルの顕現に戻り、同じ懷疑論と唯物論に陥るだろう。結局のところ、どういう結果が現れるのだろうか。決定的にすべての扉が閉ざされる日、三千サイクルが終わる時、その時そのエッセンスはモナドに吸収され、自分の番がやって来て生命の普遍的、霊的な懷にマスターの位なしで入るだろう。そのエッセンスが本当に欲しがっているものは何な

のか。自らの信じる無神論において探すものは何なのか。その熱望とは何なのか。その熱望とはマスターの位を拒絶することであり、実際にそれが望みで、それを達成しても評価せず、ついには、マスターの位のない一つの聖なる火花として終わる。

懐疑論の形態は様々である。カトリック教徒、使徒派、ローマカトリック教徒と言われる人はいるが、彼らの説明によればおおよそ唯物論者で無神論者なのである。しかし日曜日ごとにミサに行き、聖体を拝領し、告解する。これは懐疑論の別の形態である。

これまで存在し、これからも存在するであろう懐疑論と唯物論のすべての形態を分析すると、懐疑論も唯物論も、単一ではないことに気づく。実は懐疑論と唯物論には無数の形態がある。それらは単純に知的なもので、マインドの問題だから無数なのである。つまり懐疑論と唯物論はマインドに属し、「存在（ビーイング）」には属さない。

ある人がマインドを超越した時、時間には属さない真実を意識する。その人が唯物論者にも無神論者にもなれないのは明らかである。

一度でも「言葉」を聞いたことのある者は、時間もマインドも超越している。

無神論というのはマインドから生まれ、扇子のようなマインドに属する。唯物論と無神論のすべての形態は多種多様であり、一個の巨大な扇子に似ている。現実というのはマインドを超越している。

無神論者と唯物論者というのは無知で、かつて「言葉」を聞いたことがなく、神の言葉を知ることもなく、かつて音の流れのなかに入ったこともない。

マインドの中で無神論と唯物論は生まれた。それらはマインドの形態、現実性を持たない架空の形態である。真の現実というものはマインドに属さず、確かな現実というものはマインドを超越している。

現実を知るためにマインドから独立することは重要である。知的に現実を知るためではなく、実際に真に現実を体験するために、である。

「注意していない」ものに「注意」を払う際、懷疑論、不信、疑いなどのいろいろな形憑を理解できる。どんな、いかなるたぐいの疑いでも理解するとき、本当にそれが望むものを理解するためには、それをばらばらに解剖」しないといけないからである。いったん完全に疑いをばらばらにしたら、マインドに何の痕跡も残さずに、記憶にごくわずかな痕跡さえ残さずに疑いは消える。

我々の中で注意していないものを観察するとき、マインドの中で正反対の物事どうしの闘いも目にする。まさにそのとき、それらの正反対の物事をばらばらにし、そこに本当にあるものを見ないといけない。また、我々が無視し、どこから、そしてなぜ生じるのかわからない思い出、感情、欲望、心配、不安を解剖しないといけない。

マインドの注意を呼び起こす必要があるというのを思慮深く検討する際、重大なポイントがひとつある。つまりマインドは従いたくないため、我々はマインドにうんざりするのである。その場合マインドを責め、マインドに大声で話しかけ、面と向かって対峙して、場所柄をわきまえない変わり者のようにマインドを扱うしかない。マインドを意志の鞭で打ち、容赦のない言葉で従うまで叱責しないといけない。マインドが理解するように何度も話さねばならない。理解しないならば、厳しく命令しないといけない。

マインドと同一視しないことが不可欠である。マインドを鞭打ち、服従させねばならない。マインドが荒々しいままであるなら、もう一度鞭打たねばならない。そのようにマインドを離れ、我々は時間に確かに属さないもの、真実に到達する。

時間に属さないものを何とかしてか覗き込むことができれば、根本的に変換する一つの要素を体験することができる。ただマインドから離れるときにのみ体験できる、時間には属さない、ある変革的要素が存在する。マインドからどうにか脱出して、「存在（ビーイング）」の内心の自己実現を達成するまで、我々は激しく闘わねばならない。

我々は、何度も何度もマインドから独立し、音の流れ、音楽の世界、エロヒムの言葉が響く世界、確かに真実が統治する世界に入る必要がある。

我々がマインドのなかに閉じこめられている限り、真実について何を知ることができよう。他人の言うことのみである。しかし我々は何を知っているというのか。重要なのは他人の言うことではなく、我々が自分自身で体験することである。我々の問題は、いかにしてマインドから脱出するか、ということにある。そのためには、自由になるためには科学、智恵が必要であり、それはノーシスの中に見いだされる。

マインドが静で、沈黙していると思っても、神秘体験が訪れないときがある。それは、マインドが静かでも、沈黙もしていないからである。実はマインドは闘い続けている。実はおしゃべりを続けている。その場合、瞑想を通してマインドに立ち向かい、マインドと話をし、叱責して、その望みを尋ねないといけない。こう言おう、「マインドよ、なぜ静かにしない。どうしてうるさく付きまとうのか」。何らかの回答をするマインドに対して我々は別の説明で答え、納得させよう。納得しようにしないなら、叱責して意志の鞭をふるうことにより、従わせざるをえない。

マインドの支配は、正反対の物事について瞑想することを超越している。たとえば憎しみの思い、悪い思い出に襲われたとしよう。それなら、憎しみの思いを理解しようとしなさい、愛というその反対命題（アンチテーゼ）を理解しようとしなさい。愛のあるところに、どうしてその憎しみがありえよう。何のために。

たとえば好色な行為の記憶が浮かぶとする。その場合、聖杯と神聖な槍をマインドに思い浮かべなければならない。そしてこう言おう、「どうして私は妄想で聖なるものを冒瀆しないといけないのか」。

もし背の高い人のことを思い出したなら、背の低い人のことを見るべきである。鍵は統合にあるため、それは正しいだろう。

常に「統合）」を探す方法を知っておくといいだろう。なぜなら「正（テーゼ、命題）」から「反（アンチテーゼ、反対命題）」に進まなければならないが、真実はどちらにもないからである。正と反には議論があり、それが本当に必要なことである。「肯定」「否定」「議論」「解決」である。邪念と逆のことを理解することによる、邪念の肯定と否定。議論。智恵に到達してマインドが静まり沈黙に入るまで、

それら二つの思いが実際はどうか、議論しなければならない。人は、そのようにして実行するべきである。

以上は注意していない部分を観察する意識的プラクティスの一部である。しかし、「これは背の高い人の記憶である」と単純に言って、背の低い人と対比させるだけでは、それは正しくない。高い低いは同一物の二つの側面にすぎず、重要なのは高い低いではなく、その背後にある真理である—こう言うのが正しいだろう。高低はマインドの見せかけの二つの現象である。そのようにして「統合」と「解決」にいたる。

我々の「不注意な部分」は、「潜在意識」、「支離滅裂なもの」、マインドに浮かぶ大量の記憶、何度も何度も我々を襲う過去の思い出、記憶の残骸などで形成される。

潜在意識の構成要素を受け入れたり、拒絶したりしてはいけない。注意していないものを単に意識すればいい。そのようにして、注意していないものは、自然に自発的に注意しているものになる。不注意なものは注意深いものになる。

日々の生活を絶えまない瞑想状態にしなければならない。瞑想とは、家やルミシアル（*訳注：ノーシスの神殿）にいたときにマインドを静める行為だけでなく、平凡な日常生活にまで及び、生活は事実上不断の瞑想となる。そのようにして真実が本当に到来する。

マインドは本質的にエゴである。だが、メンタル体を形成する精神物質が残るように、エゴを破壊するのは緊急に必要である。だがマインドはいつも存在する。重要なのはマインドから解放されることであり、マインドから自由になり、マインドなしで純粋な魂の世界に解脱する方法を学ばねばならない。マインドを超越しており、また時間にも属さないその音の流れのなかに生きるすべを知るのである。

マインド、そこにあるのは無知である。真の智慧はマインドにはなく、それを超越する。マインドは無知なために、重大な誤りをたくさん何度も何度も犯す。

マインドの宣伝をする者、マインドの力を保証する者、他人のマインドコントロールを人に教えたりする者はなんと愚かなのだろう。マインドは誰も幸せにしたこと

がない。真の幸福はマインドをはるかに超えている。マインドから独立してはじめて幸福を知ることができる。

夢（眠り）は「無意識に特有なものである。意識を覚醒させるとき夢を捨てる。夢とはマインドの投影にすぎない。あるとき高次元の世界で私自身の体験したケースを覚えている。不注意で油断したのは一瞬にすぎなかった。私は、どのようにして夢がマインドから生じるのかを見た。すでに私は夢を見始めようとしており、一瞬私から逃げ出した夢の中で反応した。しかし、私はその過程に気づき、自分自身のマインドから逃れたこの石化した形態からただちに離れた。もし私が夢を見ていたら、どうなっていたのだろう。そこで、そのマインドの形態にもてあそばれただろう。人が目覚めると、「不注意」で油断した瞬間に夢は逃れることができ、夜明けまで一晩中もてあそばれることがすぐにわかるだろう。

我々にとって重要なのは、意識を覚醒させて夢を見るのをやめる、思考するのをやめることである。この思考というのは宇宙的な物質であり、マインドである。アストラルそのものでさえメンタル物質の結晶したものにすぎず、物質界もまたマインドの凝縮したものである。したがってマインドは物質でとても粗雑であり、物質的状态あるいはヒンドスタン人の言うようにアストラル・マナスという状態にある。とにかくマインドはアストラル状態でも物質的状态でも粗雑で有形である。

マインドは物理的物質または形而上的物質だが、いずれにせよ物質なのである。それゆえ我々を幸せにすることはできない。真実の幸福、本当の智慧を知るためには、マインドから離れて本質的存在の世界に生きるべきであり、それが重要である。

我々はマインドの創造力は否定しない。存在するすべてのものは明らかに凝縮されたマインドである。しかしマインドで何が得られるのか。マインドは我々に幸福をもたらしたのだろうか。マインドを使ってすばらしいことを成し遂げ人生においてたくさんの物事を創造できる。偉大な発明品はマインドの凝縮したものだが、この種の創造は我々を幸福にしなかった。

マインドは物質なので、必要なのは物質というその牢獄から独立して脱出することである。マインドから離れ、物質を超えて幸福な創造物のように、生命のように魂

の機能で生きないといけない。物質は誰も幸せにしなかったし、美しい形をしていても常に粗雑である。

真の幸福を求めるなら、物質ではなく霊に幸福を見いだすだろう。我々はマインドから解放される必要がある。マインドの牢獄から脱出するとき、真の幸福が訪れる。マインドが物事、発明品、驚異、奇跡を創造できるのは否定しないが、それが我々に幸福をもたらしてくれるのだろうか。我々の誰が幸福なのか。

マインドが我々に幸福をもたらさないのであれば、マインドから離れて幸福をよそに探さねばならない。我々が霊の世界でそれを発見するのは明らかである。しかし知らねばならないのは、マインドから逃れる方法、マインドから自由になる方法であり、それが多数のノーシス文献および本書『弁証法の革命』の論文で私の渡したプラクティスと研究の目的である。

我々には3パーセントの意識と97パーセントの潜在意識がある。「意識」している部分は、「無意識」や「潜在意識」の部分を導き、叱責し、意識化の必要性を教えなければならぬ。けれども意識的部分は、潜在意識の部分を叱書する必要がある。意識的部分が潜在意識的部分を導くというのは、きわめて重要な心理的エクササイズであり、夜明けに実践できる。そのようにして無意識の部分は少しずつ意識化されていく。

試行主義

試行主義、それは魂を拘束するマインドの本質を研究する科学である。試行主義は秘教的試験の科学である。

試行主義、それは知性の牢獄を研究できる内なる智恵である。

試行主義は、個人的マインドの誤りを知りつくすことを可能にする純粋科学である。

人間のマインドは恐怖と渴望から自由になるべきである。人間のマインドは蓄積欲、愛着、憎しみ、利己主義、暴力などから解放されるべきである。

人間のマインドは、正反対の物事どうしの闘いにマインドを分裂させる推理過程から自由になるべきである。

気の滅入るような選択過程で分裂したマインドは、インティモの道具としては機能できない。

推理の過程を「理解」の美しさに変えなければならない。

概念の選択過程はマインドを分裂させ、誤った行動と無駄な努力のもととなる。

欲望と渴望はマインドの足かせとなる。そのため人間は、ありとあらゆる過ちを犯し、その結果カルマを積むことになる。

恐怖は、安全でいたいという欲望をマインドにもたらす。その欲望が意志を束縛し、自分で自分を防壁内に決定的に取じこめる囚人に意志を変えてしまう。防壁内には人間のあらゆる不幸と悲惨が潜んでいる。

恐怖はあらゆる種類の劣等感をもたらす。死の恐怖が人間を武装させ、たがいに殺し合いをさせる。ピストルをベルトにさす人間は臆病者、腰抜けである。勇敢な人間は誰も恐れないので、武器を持たない。

人生への恐怖、死への恐怖、飢えへの恐怖、悲惨への恐怖、寒さと裸への恐怖。これらがあらゆる種類の劣等感を生じさせる。恐怖は人間を暴力、憎しみ、搾取などへと導く。

人間のマインドは牢獄から牢獄へと生きるが、それぞれの牢獄とは学校、宗教、間違った概念、偏見、欲望、意見などである。

人間のマインドは、正反対の物事どうしの闘いでマインドを分裂させる痛ましい推理過程を伴わずに、誠実に統合的に流れ出す方法を覚えるべきである。

インティモの道具として役立つよう、マインドは子供のようになるべきである。人生は永遠の瞬間にすぎないので、常に現在を生きるべきである。

我々はあらゆる種類の先入観と欲望から解放されるべきである。我々はただインティモの衝動のもとにのみ行動するべきである。貪欲、怒り、好色の巣窟はマインドにある。貪欲、怒り、好色が霊を阿鼻地獄に落とすのである。

人間はマインドではない。マインドは罪の四つの体のひとつにすぎない。人間がマインドと同一視するとき、奈落に落ちる。^{14***}

マインドとは、枝の主日に天のエルサレムに入るために乗るべきロバにすぎない。

マインドがつまらない表象で我々を攻めたてる際には、このようにマインドに話そう。「マインドよ、これらの表象を退けなさい。私はそれらを受け入れない。おまえは私の奴隷であり、私はおまえの主人だ」。

憎しみ、恐怖、怒り、渴望、貪欲、好色などの表象でマインドが我々を攻めたてる際には、このようにマインドに話そう。「マインドよ、これらの表象を私から取り払いなさい。私はそれらを受け入れない。私はおまえの主人、所有者であり、この世の終わりまでおまえは私の奴隷なので、私に従わねばならない。」

今、我々に必要なのは、テレマの人、精神の奴隷とならない意志の強い人である。

^{15***}

第4章

インテレクト

学習することは、自発的な瞑想によって意識化しないとイケない。でないと知性を破壊してしまうことになる。

したいときにはいつでも、中断することなく「インテグラル（完全）な瞑想」を実践しないとイケない。瞑想は機械的であってはならない。

本質的存在と知識の間に数学的バランスをとらないとイケない。 $20 + 20 = 40$ ； $40 - 20 = 20$ 。

知的人間は理論を通してしか物事を見ない。二種類の知性がある。一般に知られた「感覚的知性」と、本質的存在の与える「意識的知性」。

¹⁴ * 罪の四つの体…肉体、エーテル体、アストラル体、メンタル体。

¹⁵ * テレマ：魂の真の意志

本質的存在の客観的理性にはグレードがあり、ルシファーの角にある三叉の武器の数によって測定される。

内的マインドを開くとき、理論、仮説（推測）、先入観をまくしたてる必要はなくなる。

主観的科学は、感覚的マインドに閉ざされて仮説と推測の中に生きる者に属する。

（同一著者による『大いなる反乱』第12章「三つのマインド」参照）〔『ニューズ・夏号1992年8月27日発行』〕

純粋科学は、内的マインドを持つ者、三角形と八角形と直角定規のなかで発達する者のみが到達しうる。

知性

知性をマインドと混同してはならない。あらゆるマインドには、ある量の知的価値が存在する。

我々自身の外に知的価値をさかす必要はなく、我々自身の内にある。

あらゆる人間の知的価値は変わらないし、また尽きることもない。知性の蓄えは一定である。

ポジティブな価値があらわれると、実際に知性は喜んでそれを受け入れる。

すでに知っていることを意識するという唯一の目的をもった、ひとつの新しい革命的教育法が必要である。

アイデンティティ、価値、イメージ。自己評価したいとき、自分の正しいアイデンティティ、価値、イメージを持つことは後回しにできない。

覚醒した知性

なんとかしてエゴの死体を崩壊させた者は、「覚醒した知性」を獲得する。

「覚醒した知性」とは、霊に仕える知性のことである。イエス・キリスト、彼は「覚醒した知性」をもっていたが、知性を霊に仕えさせた。

現実というものには物理現象が必要だと信じるところに、唯物論者の大きな間違いがある。しかし、彼らのいう「現実」とは結局、唯物論の知性の産物であり、覚醒した知性の産物ではない。

物質的なものも精神的なものもエネルギーであり、それゆえ精神は物質と同じくらい現実なのである。

物質は精神的なものと同じくらい神聖である。唯物論的な知性が、『弁証法の革命』によって「覚醒した知性」に変わらないかぎり、物質と魂が相関的、弁証法的に振るまうことが理解できないだろう。

時間

時間とは人生であり、時間に左右されない者は人生を支配する。

短期間のうちに生存競争を行わせるよう、生存競争は束の間にかかる。

人生の短さは、総合的な革命で人生を向上させるよう奮起するには十分な動機となる。

知性によって、生命の時間を最大限に活用し、その短さを延長しなければならない。自我の不器用でつまらない行為で時間を無駄にしてはいけません。

第5章

理解

その世界、「理解」の世界において、すべてのものは抽象的で、一見したところ支離滅裂である。「理解の世界」に第一歩をすすめる際、つじつまの合わないことが起こる。

マインドと心理的宇宙は大混乱にあり、そのため連想や次から次へと生じる感情などはない。

49 の潜在意識レベルには、豊かな情報を含む莫大な量の記録があるけれども、残念ながらそれらは無秩序で混乱している。

理解の世界で働くとき、イメージと言葉は「公案」の形で浮かぶ。^{16***}

欠点を理解する最初のワークでは眠気の助けがいる。この理解の過程において、人は混乱した段階に達しが、そこでのイメージはまとまりがなく、色はまだ不鮮明で、あまり輝いていない。

欠点を理解する際の主な障害のひとつは、マインドは気をそらす傾向があるため、研究中の「心理的要素」に集中できないことである。

理解の世界で、ひとつの「我」に働きかけようとするとき、すべてが闇に包まれ、まったく何も見えなくなり、意識はたえずその輝きと鮮明さを失い、ただちに魅惑に陥る。

思考と感情の流れは、欠点の理解に邪魔となる。ひとつの「我」を理解しようとする際、我々は「真っ暗な虚空」に投げ出され、一種の記憶喪失におちいり、自分が何をしているか、自分が誰でどこにいるのかわからなくなる。

エロスの力と創造エネルギーは、「理解」のもっとも素晴らしい助けとなる。

精液の実体を射出しない性の秘儀の間に変換あるいは昇華された創造エネルギーは、49 の潜在意識レベルを開き、隠れていたすべての「我」をそこから引き出す。それらの心理的集合体はドラマ、喜劇、映画という形で、象徴とたとえ話を通して現れる。

理解の鍵は「創造力」「インスピレーション」「直観」という三つの心理的のカギにあると書かれている。

¹⁶ * 公案・・・禅宗で、修行者を悟りに導くために課す問題。

想像力

賢者にとって想像することは見ることである。想像力とは魂の透明さである。

想像力を獲得するには、ひとつのことに思考を集中する方法を覚える必要がある。それを覚える者は奇跡的な偉業を成し遂げる。

「想像的認識」を獲得したいノーシス主義者は、集中する方法を覚え、瞑想法を知らねばならない。ノーシス主義者は瞑想の実践中に眠りを誘発するべきである。

瞑想は正しくないといけない。マインドは正確でないといけない。内的感覚がまったく完全に発達するためには、論理的思考と正確な概念が必要である。

いかなる焦り、忍耐のなさも失敗をもたらすので、ノーシス主義者には強い忍耐がいる。

『弁証法の革命』の道には忍耐、意志、絶対的に意識的な信仰が必要である。

ある日、眠りの中で、瞑想中に遠くの光景、景色、顔、数、シンボルなどが現れたら、それはすでに進歩しつつあるというしるしである。

ノーシス主義者は「想像的知識」に少しずつ到達し、少しずつイシスのベールをはぎ取っていく。

意識を覚醒させる者は「想像的知識」に到達し、象徴的なイメージの世界で行動する。

眠っている最中や、瞑想時に「エゴ」を理解しようとしている最中に見ていたシンボルを、今では眠らずに見る。かつてはそれらのシンボルを眠りこけた意識で見ていたが、今や、身体が熟睡しても、覚醒意識でシンボルのなかで行動する。

インスピレーション

「想像的知識」に到達する際、ノーシス主義者はシンボルを見るものの、それを理解しない…。彼らは、自然全体と「エゴ」は、自分が知らない生きた聖典であることを理解する。その場合必要なのは、自然の神聖なシンボルと「エゴ」の抽象言語を解釈するために、「靈感を受けた知識」に昇華することである。

「靈感を受けた知識」は、自然のシンボルと「エゴ」の不明瞭な言語を解釈する能力を授けてくれる。

シンボルの解釈はとても微妙である。迷信、悪意、疑惑、傲慢、虚栄、狂信、偏見、先入観、憎しみ、羨望、強欲、嫉妬などのない状態で、シンボルは冷静に分析するべきである。それらの要素はみな「我」に属するからである。

「我」がシンボルの通訳・解釈に干渉すると、「存在」が我々の内的な心理状態について象徴的に与えたい指導の意味、秘密の文章の意味が変わってしまう。

解釈はまったく分析的、高度に科学的、また本来は神秘的でないといけない。「自由なカテクシス」－「エゴ」、我自身－のない状態で「見」、「解釈」できるようにならない。

まったくの「我」がまったく不在の状態で、自然のシンボルと「縛られたカテクシス」つまり本質的存在のシンボルの解釈法を知らないといけない。けれども自己批判を徹底するべきである。自分が多くのことを知っているというノーシス主義者の

「我」が信じる時、賢く決して誤らないと感じ、それどころか「我」が不在の状態で見えて解釈していると思ひ込むからである。

哲学的類推の法則、照応の法則、数のカバラにもとづく解釈法を知らなければいけない。ダイアン・フォーチュンの『神秘のカバラ』と自著『タロットとカバラ』を推薦する。それらを研究するといひ。

憎しみ、恨み、嫉妬、羨望、傲慢などを抱いている者は「靈感を受けた知識」には到達できないだろう。

靈感を受けた知識まで昇華すると、物体は偶然には集合しないことを理解する。実際、自然のすべての心理現象、およびすべての物体は相互間で密接に有機的に結びついており、内的に相互に依存しあい、制約しあう。現実には、どんな心理的現象もどんな自然現象も、それを単独で考察するならば、完全には理解できない。

万物は絶えまなく運動し、変化し、静止しているものは何もない。あらゆる物体に内的な闘いがある。物体は正であると同時に負である。量は質に変わる。

過去、現在、未来の物事の相互関係を、「靈感を受けた知識」をとおして知ることができる。

物質とは凝縮したエネルギーにすぎない。エネルギーが無限に変化については、史的唯物論も弁証法的唯物論もまったく無知である。

エネルギーは光速の二乗と質量の積に等しい。我々ノーシス主義者は、形而上学と弁証法的唯物論の間に存在する反対命題の闘いから離脱する。形而上学と弁証法的唯物論は、無知の二極、まちがった二つの対立物である。

我々は別の道を行く。我々はノーシス主義者であり、生命を全体として考える。物体は、価値の一定の合計にとって乗り物として機能する、空間内の一点である。

すべての形態、心理的価値、自然の間に存在する密接な関係を、「靈感を受けた知識」をとおして研究できる。

弁証法的唯物論は価値を知らず、ただ物体を研究するだけである。形而上学は価値も物体も知らない。

我々ノーシス主義者は無知の二つの対立から離れ、総合革命を求めて人間と自然を総合的に研究する。

「靈感を受けた知識」に到達したいノーシス主義者は、音楽に深く集中するべきである。エジプトのイニシエーションを思い出させるモーツァルトの『魔笛』、ベートーベンの九つの交響曲、その他多くの偉大なクラシック音楽作品、中でもワーグナーの『パルジファル』は我々を「靈感を受けた知識」へと昇華させてくれるだろう。

ノーシス主義者は音楽に深く集中し、蜂が自分の作業の成果である蜂蜜に没頭するように、音楽に没入するべきだろう。

ノーシス主義者が「靈感を受けた知識」に到達したら、「直観的な知識」に備える必要がある。

直観

直観の世界は数学の世界である。直観の世界に上昇したいノーシス主義者は数学者にならねばならない。あるいは少なくとも算数の概念を持たねばならない。

数学の公式は「直観的な知識」を授けてくれる。ケプラーの公式とニュートンの公式は、直観認識を開発するエクササイズとして役立つ。

ノーシス主義者が粘り強く気長に実践するなら、自分自身の内なる「存在」、「縛られたカテクシス」が大作業で教え導いてくれるだろう。そのときマスターのひざもとで学び、直観的知識に自らを高めるだろう。

「想像力、インスピレーション、直観」は『弁証法の革命』に欠かせない三段階である。「直接的知識」の三段階を踏破した者は、超意識を獲得する。

その世界に「我」、「エゴ」、「自由なカテクシス」は入れない。直観の世界は生命の普遍的霊の世界である。

人間の問題

抜け目のない、いまいましい、悪魔のインテレクトは問題をつくり出しても、解決はできない。

何も解決しない理論が氾濫するが、すべてを複雑にしてしまう。人生の死活問題は相変わらず続き、第三次世界大戦はひどく差し迫っている。

まちがって人間と呼ばれる知的動物は、「貧弱な主観的理性」をたいへん誇りに思っているが、それは何も解決せず、すべてを複雑にする。

思考の恐るべき闘いは、明らかに問題解決に歯が立たないことが実証された。

世界危機の現代、確かにあふれているのは、すべてを解決しようとはするが何も解決しない「知ったかぶり」である。

「知ったかぶり」は愚かな接ぎ木で大地の産物を損ない、結核、ポリオ、チフス等のワクチンで子供を汚染する。「知ったかぶり」は何でも知っているが、何も知らな

い。自分たちの創造したすべてのもので損害をもたらし、賢いことを鼻にかける。

「マインドは解決不可能な問題をつくり出すが、それな悪趣味なゲームである」。

昨日と同じく今日もまた、哀れな人間、哀れで惨めな類人猿は、自分の知らない力で動かされる機械的なおもちゃにすぎない。

どんな宇宙での出来事も星のどんな大異変も、ある種の波動を発するが、人間と呼ばれる不幸な動物に受け取られると、世界大戦の引き金となる。何百万もの人間機械が無意識のうちに、他の何百万もの人間機械を破壊するという愚かな任務に乗り出す。

喜劇と悲劇は常に隣り合わせだが、この場合の喜劇というのは旗、スローガン、およびそれら無意識の機械全部が考案したあらゆる種類の文句である。民主主義、自由、祖国などを守るために戦争にいくと彼らは言う。

これらの戦争は、ある宇宙波動の作用の結果であり、戦場の軍隊はそれらの未知の力に力学的に駆られて自動式の操り人形のように行動する。ジャーナリストとして世に知られた知性の娼婦、偉大な思索家はそのことを知らない。

これらの哀れな知的動物の考えは、根本的な問題をひとつも解決しなかった。すべて理解できないということを理解できる機能、それがインテレクトである。

偉大な知識人たちは完全に失敗した。人類の今陥っている破滅的状况が、このことをうんざりするほど証明しているように…。知識人たちよ、これが諸君の世界である。諸君は自らの理論すべてで、混沌とした悲惨な世界を創造してしまった。事実は物語っている。傲慢な知識人よ、諸君は失敗したのだ！

推理・思考の闘いというのは、本質的に「自己中心的」である。我々は自己中心的ではない別の機能を必要としている。

闘いを終わらせ、思考を安らかで穏やかにする必要がある。「惨めな主観的理性」の仕組みのすべてを徹底的に理解して、はじめてこれが可能となる。

思考が鎮まると、「直観」という名の一つの新たな能力が我々のなかに生まれる。ただ直観だけが、さまざまな問題を解決できる。

明らかに、この新たな能力を開発したいならば、まず「主観的理性」の連想の複雑な仕組みを深く理解する必要がある。機械的な推論の基礎的な中心は「心理的我」である。そのセンターは利己的なため、問題を決して解決できない。

「直観」は推論のその基礎的な中心とは何の関係もない。「直観」はキリスト中心である。

あらゆる問題はマインドが創造したものであり、マインドが問題にしがみつくと限り、問題は存在する。あらゆる問題は、マインドが保持するメンタルな形態である。あらゆるメンタルな形態には、「出現、存続、消去」という三つの過程がある。

あらゆる問題は発生し、存続し、その後なくなる。マインドが問題を創造するので、それは発生し、マインドがそれを忘れないかぎり存続し、マインドがそれを忘れるとき、なくなり、または解消する。

思考がやむと我々のうちに至福が生まれ、その後、悟りが訪れる。悟りの境地に達する前に、至福を体験せねばならない。「無思考、至福、悟り」－この三つが変換の三段階なのである。直観とは悟りである。覚者はみな最大の難問題を解決する。

実際に、問題を忘れ去るとき、それはなくなる。問題は解決しようとするのではなく、むしろ解消しようとするべきである。忘れれば問題はなくなる。問題とは、正極と負極という二極をもつメンタルな超感覚的形態なのである。

恐れずに問題を忘れなさい、そのようにして問題は解消するだろう。チェスの心得があるだろうか。問題を忘れるのにチェスゲームは悪くなかろう。あるいはコーヒーやおいしいお茶を飲んでから、プールに泳ぎに行ったり山に登り、少し笑おう。笑うことで気分はよくなり、問題を忘れさせてくれる。いついかなるときでも直観的に気づき、問題は解決する。問題がなくなるのを恐らくあなたは好まないかもしれないが、確かに解決したのである。いやむしろ、なくなったと言ったほうがよからう。

ひとりの賢者がこう語った。「問題が存在しないうちに、その解決にあたろう。そこに解答がある。忘れてはならないが、発生した問題はあなたのマインドにあるから。雨が降り、あなたは傘を家に置いてきたが、このこと自体は問題ではない。借

金があり、失業して、支払いを催促されるという出来事も、やはりそれ自体は問題ではない。これらの出来事は相対的な世界では相対的に确实だが、それゆえに、問題というのはそれが生じる前に葬り去るべきものなのである。さもないと後で解決しないといけなくなる。時間がたてばたつほど、倒すべき巨人は大きくなることを忘れてはならない」。

恐怖は我々の最悪の敵である。恐怖の悪魔は、我々が問題を解決するのを好まない。家賃を払うお金がないため、通りに放り出されるのが怖いのか。で、放り出されたら、どうなのか。どんな新しい扉が開かれるのか、知っているだろうか。「直観」は必ずそれを知っていて、それゆえ直観的な人というのは恐れないものである。「直観」は問題を解消する。

思考の闘いが終わるとき「直観」が生まれ、恐怖が終わる。問題がどれだけ困難であっても、「直観」が解消してくれる。

第6章

悪魔との賭

ナポレオンは悪魔に負けたかもしれなかった。他の男たちと闘って戦場にいるのと、自分自身との闘いは、別問題である。

サタンは黄金の敵で、とても役立つ。悪魔は降りる階段であり、また昇る階段でもある。

ヘラクレスの十二の難行は悪魔とのワークである。悪魔との契約は賭に等しく、その勝利とはつまり黄金をつくり出す能力のことである。^{17***}

¹⁷ *ヘラクレス・・・ゼウスとアルクメネの子。ゼウスの妻ヘラの激しい嫉妬により、その生涯は難行苦行の連続であったが、獅子、水蛇ヒドラ、怪鳥ステュンパリデス退治など、アルゴス王エウリュステウスに命じられた十二の難題解決は特に有名。死後、オリュンポスの神々の仲間入りをして不死の存在に。最初の九つのワークは第二の山（復活の山）に対応して、イニシエイトは九天を征服し、残り三つは第三の山（昇天の山）に対応。

電気力は運動する十字すなわちスワステイカ（卐）であり、連続運動である。つむじ風のように回転する優れた電気は、私がノーシス運動をまき起こすのを助けてくれた。

化学的性交が終わると連動は終わるので、俗人と冒涇者の十字はスワステイカではない。それにひきかえノスティックの十字では、電気が変換しつづけるので運動は終わらない。

通常、性行為は、せめて1時間は行わねばならない。

インドでは、化学的性交が行われる時間に応じて修練の程度が測られる。三時間持続する者はみな尊敬され、その人は「主」である。

運動するスワステイカは、優れた性的電気を発生させる。

ヒトラーはこれらのことを理解したので、スワステイカを党章とした。「緑色の手袋をはめた男」は、ダグドゥグパ派に属していた。ヒトラーはこの男に操られるがままになり、すべてを否定的に結晶化するように教えられたのである。

フォン・リッツ Von Litz が降伏した際、ラサではダグドゥグパの僧たちが通りに飛び出して、ベルリンの降伏を祝った。

第二次世界大戦は、グルジェフの教えとダグドゥグパの教えとの決闘であった。チベットから持ちこまれこの決闘は、チベットの黒魔術師と白魔術師との真の闘いであった。

性の超力学

もし自分自身に死なないならば、この世のすべての学識を所有しても無駄であろう。

心理的集合体を砕くのは、一つ目巨人キュタロプスたちの鍛冶場すなわち化学的交合の真っ最中においてはじめて可能となる。

性的に結ばれた男（夫）と女（妻）は恐るべき宇宙力に取り囲まれている。宇宙最強の力に覆われている。

男は正の力、女は負の力である。中性の力が、ふたりを融合和解させる。

三つの力が心理的集合体に対して向けられるのであれば、宇宙の砂ぼこりとなる。

化学的交合の真っ最中、男はまるで自分のもののように女の心理的集合体を引き受けて、女を助けるべきである。女も、まるで自分のもののように男の心理的集合体を引き受けるべきである。

このようにして正、負、中性な力が適切に結びついて、いかなる集合体に対しても方向づけられるだろう。これが心理的集合体を崩壊させるための、性の超力学の鍵である。

性的に結ばれた男と女は、あらかじめ深く理解した何らかの心理的集合体を崩壊させてくれるよう、デビ・クンダリーニに願い、祈るべきである。

もし男が憎しみ、好色、嫉妬など、いずれかの心理的集合体を崩壊させたいならば、そうしてくれるよう聖なる母クンダリーニに祈り、訴えよう。そして女は、その集合体が自分のものであるかのように、同じ嘆願をして男を助けよう。

そのようにして男も、やはり女の心理的集合体に取りかかり、それらを自分のもののよう引き受けるといい。形而上学的な交合の間、男女は総力を結集して、男の心理的集合体であれ女の心理的集合体であれ、それらに方向づけ、そのようにしてエゴを絶滅するべきである。

これが性の超力学の鍵である。すなわち三つの力を各心理的集合体に方向づける、精液の実体を射出することのないリングムとヨニの結合。

化学的交合の最中、結ばれた男と女は実際に、神聖で全能なる恐るべき両性具有者なのである。このことを忘れてはならない。

水銀

賢者の水銀（水銀）を所有する者は、「最終的な解脱」を手にするであろう。まず自分自身を知らないのであれば、賢者の石を獲得できないであろう。

水銀の準備はいつも困難である。水銀は「エクソヘハリ」あるいは「未精製の水銀」の変換から生じる。

未精製の水銀は神聖な精液を表す。水銀に変わる鉱物はたくさんあるが、すべてが水銀に変われるわけではない。

水銀の準備は食物の消化吸収に似ている。

混じりけのない純粋な水銀を大作業のために本当に望むのであれば、「乾燥水銀」、「反移動」、「エゴ」を除去すべきである。

二十は二つの数量の数学的微分平均である。乾燥水銀を除去しなければ、「微分平均」は存在しない。

「地」「水」「風」「火」の段階を心理的に通過しなければならない。

乾燥水銀を除去して、それを心理的に理解することにより、「ローマカトリック教会の秘跡の洗練を首尾よく洗練できる。^{18***}

「硫黄」一火一にみちた内なる火のバラは、脊髄を輝かしく上昇し、理解力、すなわち「エゴ」の仕組みを理解するための光を我々に与えてくれる。

水銀は、人を「生と死の騎士」に変える。

「普遍的、宇宙的な水銀」が存在する。マハーマンバンタラ（宇宙の昼）の始まる時、宇宙創造者たちは「キュクロプスたちの鍛冶場」一位一で作業しなければならなかった。エンゲルスの自然弁証法の信奉者たちは、このことを理解しない。^{19***}

「カオス」、原鉱において、言葉の軍隊、カップルは乾燥水銀を崩壊させるために作業する。古代のアース・ムーンでは多量の乾燥水銀を除去せねばならなかった。イ

¹⁸ * 秘跡の洗練・・・キリストによって定められた神の恩恵にあずかる儀式。カトリック教会では秘跡といい、洗礼、堅信、聖体、告解、終油、叙階、婚姻の七つ。プロテスタント語教派では聖礼典（礼典）と称し、洗礼と聖餐式とをいう。〔小学館 『大辞泉』〕

¹⁹ * エンゲルス・・・1820－95 ドイツの思想家、革命家。マルクスと科学的社会主義を創始。ドイツイデオロギー『共産党宣言』を共同で執筆。マルクス死後は社会主義運動に参加しつつ、その遺稿を整理して『資本論』第二、第三巻を刊行。

ンテグラル『弁証法の革命』、総合革命ではロゴスが「大規模」に行ったことを「小規模」に行わねばならない。大作業を行う人間は、ヒューマノイドとは精神的にずいぶん異なっている。もっとも、自分自身から乾燥水銀を取り除いたことによる根本的な違いは、外見からはわからないが。^{20***}

純粋で清浄な水銀の余剰は、いろいろな「実在体」の高等オクターブを形成する。そのためには第三ロゴスの実験室で作業しないといけない。

客観的に『弁証法の革命』を理解するためには、「ドヌムディ」すなわち神からの贈り物が必要である。^{21***}

死者の「パーソナリティー」に未来は存在しない。パーソナリティーとは乾燥水銀の一形態であり、我々はそれで多量のエネルギーを消費するが、我々のなかで「意識の移動（転移）」を強化し行うために利用すべきもののなのである。

ひとつの強い「個性」が、乾燥水銀の怪奇な一形態であるパーソナリティーを完全に追い出す。

パーソナリティーで消費するエネルギーを、「存在」に属さないものすべてを取り除くために用いねばならない。それは、乾燥水銀の形態でもある「悪癖」の場合である。

性の超力学と自己尊重によって乾燥水銀を崩壊させるならば、「パーソナリティーから解放されて生きる」習慣ができるだろう。

²⁰ * ヒューマノイド…SFで、外見が人間に似た宇宙人。またアンドロイド（人間型ロボット）。ノーシスでは、アストラル体、メンタル体、コーザル体を持たずに、ただ肉体、生命体、パーソナリティーのみを持つ知的動物。

²¹ * ドヌムディ…大作業の科学。大いに働いて高等な意識レベルが目覚めたとき授かる。それによって、大作業とその神秘を理解できる知識が得られる。（『ノーシス秘教辞典』）

第7章

基礎教育

執拗に強調するが、退廃した現代の大学制度と教育制度は、真実の「本質的存在の価値」をせいぜい歪めるだけである。

私が正しいことを事実が物語っている。数年前の統計によると各学年、西ドイツの約5百人もの児童が自殺するという。

推定によれば1万4千人もの未成年者が自殺しようとし、そのかなりの数、16歳未満の3人に1人の生徒に重い緊張症状が見ら中るという。その症状の原因はドイツ人が「シューレングスト shulangst」（「強烈な学業不安」という意味）と呼ぶものである。

若者が直面する最も深刻な状況のひとつは、学業のプレッシャー（精神的圧迫）と緊張に原因があり、それらと闘えない児童もいる。

「シューレングスト」はまもうひとつの社会現象に見える。それはドイツだけではなく世界中のすべての国々に見られる、高い失業率と混ぜこぜになった、ひとく競争的な学校制度の産物であり、高給の職に就くための合言葉としての、またステータスシンボルとしての大学の愚かな肩書を重んじる階級社会の産物でもあるような思える。

この種の「不安」に直面する学年にある多数の児童は、緊張をもたらす学校制度は我慢ならないと感じる。

教育学の講師カール・シュトリット・マターの研究によれば、16歳未満の子供の3人に1人は慢性の胃の不調に苦しみ、睡眠中に寝小便をし、あるいはひどい頭痛に苦しむという。生徒の5人に1人が精神医学の治療を受けており、なんと9歳の児童たちが、学業の緊張のために潰瘍を患っていることまでわかった。

特例は生徒の自殺の統計で、とりわけ犠牲者の年齢にはがっかりさせられる。1976年にドイツで自殺した18歳未満の生徒517人のうち、103人が10歳から15歳であった。18歳未満の若者の自殺率は西ドイツでは10万人につき約3.3人で、アメリ

カより 50 パーセントも高い。そのアメリカでも未成年者の自殺が憂慮すべき問題となっている。

自著『根源的教育』で述べた自由なイニシアチブ、模倣しないこと、創造的自由、意識ある注意、価値、愛、考え方、聴き方を知る、智恵、寛容、理解、統合、素朴、平和、正直、知性、天職など。これらの揺るぎない原理にもとづく基礎教育に力を尽くさないかぎり、児童や未成年者のみでなく大人もひどい不安に悩まされ続け、自殺者数が恐ろしく増加していくだろう。

出版物

新聞はみな、実際にマインドを歪曲する考えでみちている。この心理の解放という道では、マインドを歪曲しない方がいい。

本当の健全な精神があるためには、意識ある信仰が必要となる。私にはそう思える。

出版物はマインドを懷疑でみたし、そのためにマインドが病んで、そのバランスが崩れる。ジャーナリストは生来、百パーセント疑い深い。ジャーナリストの懷疑は伝染し、マインドを破壊する。

意識ある信仰がないかぎり、健全な精神はありえない。As long as there is no conscious faith, there can be no healthy spirit.

くだらないものを読んでいないで、子供たちを田舎につれていき、おとぎ話や昔話をするべきである。そうすることで子供たちのマインドは開かれ、この退廃墮落した時代の先入観と偏見から解放されたままとなるだろう。

この衰退した機械的時代に、「驚く能力」を回復する必要がある。残念ながら現代人はこの能力を失ってしまった。

テレビ

人生において、テレビで放映される他人の考え・思想でマインドをみたさないことは重要である。時がたつにつれて、それらは「像」に変わるからである。

テレビにうつるイメージはマインドに再現され、心理的にリアルな「表象」に変わる。

エゴの足かせから解放された心理的宇宙で本質的存在が司式できるように、清浄なマインドをもつ必要がある。

総合革命を望む者はみな、本質的存在の高次意識が客観的な利益を得るように、手に触れうる現実や自然に関係する有益な映画を見ることができる。

超現代音楽

現代音楽には調和も真のメロディーもなく、正確なリズムに欠けている。

人間機械の五つのシリンダーすべてに有害な、一種のかん高い音の流れる現代音楽を、私は不調和だと考える。

「超現代」タイプの音楽は神経系を損ない、生理的器官のすべてを傷める。現代音楽は無限のメロディーと一致しない。

「エゴ」を破壊するなら、我々は宇宙音楽および天球の音楽と共に振動するだろう。

クラシックを通して、時間には属さない、言葉では表現できないもの、永遠と交流できる！

時間に属する俗事と関係するロマンスは、見せかけだけで虚しい！

ソリオネンシウス

ロシアの大学者ジョルジュ・ラホフスキーは太陽黒点を深く研究した後、黒点と戦争の間に密接な関係があることを発見した。

リモコンロケットの飛行する現代、宇宙線およびその生きた細胞と有機体とに及ぼす影響が、一般に深く研究された。

リモコンロケットの複雑な機械装置は、電波によって遠隔操縦できる。宇宙での惑星の放射能、および生物に対するその電磁気的影響は、もはや否定できない。

「ソリオーネンシウス」という宇宙法則が存在し、アトランティス水没後、40 回にわたって地球に発現した。その宇宙法則は宇宙の電磁氣的圧力から生じる。

われらのオルス太陽系に隣接して、「バレオート」という太陽系がある。また宇宙には有名な「ソルニ」彗星も存在するが、輝けるバレオート太陽に危険にもときおり接近する。

通常、宇宙軌道をしっかりと維持するため、この燦然と輝くバレオート太陽はしばしば強力な電磁氣的圧力をむりに発生させる。この圧力によって、ごく当然で論理的だが、いわゆるオルス太陽を含めた近隣の太陽すべてに同一の圧力が生じる。

軌道が変わらないようにオルス太陽が電磁氣的な圧力にさらされると、地球を含めたオルス太陽系の全惑星に同一の圧力が生じる。これが非常に長く間を置いて地球に作用する、宇宙的な「ソリオーネンシウス」の大法則である。

通常、熱烈な宗教心と内心の自己実現への深い切望が、この大法則によってもたらされるが、人類がこの法則の作用に対して心理的に準備できていないときは、たいてい結果として大惨事が起こる。

1917 年その宇宙法則は激しく発現したが、ロシアのプロレタリアート（労働階級）は怨恨と悲嘆がうっ積していたので、「ソリオーネンシウス」は各人の心理と異常に否定的に結びついた。その否定的な組み合わせの結果が、ボルシェビキ革命なのであった。

すでに長い間、ロシアは心理的にこの流血の革命の準備をしてきた。ボルシェビキ革命は、確かに「ソリオーネンシウス」と各人の心理的気質との最悪の結びつきの産物であった。この法則が作用する際の特徴のひとつは、自由への熱い願いである。

しかしボルシェビキ革命のその当時、今日でも生じる客観的理性、個人の自意識、弁証法革命を培うための「ソリオーネンシウス」のうまい利用方法を知っている人々もいた。

すでに何十年もたったが、いつ「ソリオーネンシウス」が再び発現するのか、まだわからない。確実にわかっているのは、心理的に準備して、それをうまく受け取

り、私が本書で客観的に提案する総合革命を、その助けを借りて成就せねばならないということである。

「ソリオーンシウス」に対して心理的に準備できていないならば、その結果、大惨事が起こるはずである—そう考えるのはもっともである。

ボルシェビキ革命と七日戦争は実際、社会的な大惨事だったことを記憶し、忘れてはならない。

地上に『弁証法の革命』を実現することを我々は熱望すべきであり、そのために心理的に精いっぱい準備する必要がある。きたるべき「ソリオーンシウス」に対して、いかなる心理的準備もできていないのは悲しむべきことだろう。

過去において、人類の準備ができていないとき、「ソリオーンシウス」が発現するたびに大惨事があった。古代エジプトを思い出そう。王朝と王朝の間には恐るべき事件があった。二度、「ソリオーンシウス」は、灼熱の国ケムで破滅的な形で明示された。

最初の発現では、国民は血なまぐさい革命で、血と死によって支配者たちを選んだ。合法的に任命された支配者階級に属する人々の目を、いちばん多く「聖なる器」に集めた候補者が、新しい支配者に選ばれたことだろう。明らかに、そのような暴動の光景は戦慄すべきものであった。

この宇宙法則の二回目の発現ではエジプトの民は激怒し、支配者たちに反抗して立ち上がり、彼らを殺害した。彼らは脇腹から脇腹へ一本の聖なる金属ケーブルで刺し貫かれた。そのとき性別年齢は関係なく、そのケーブルは、どちらかという死のネクレスのようで、後に獣たちに引きずられて、ナイル川に投げこまれた。

「ソリオーンシウス」は自由への希求、意識革命をもたらすが、人類の準備ができていないと、支配者を殺し、他人を殺害し、王を権力の座から引きずりおろし、戦争を勃発させたりすることが、人類の心に浮かぶだけである。

我々は「ソリオーンシウス」に対して心理的に準備すべきであり、自意識をもって地上に『弁証法の革命』を実現する必要がある。

宗教原理

すべての宗教は、神性の金糸につながった宝石である。

宗教は永遠なる価値を保存し、邪教というものは存在しない。すべての宗教は必要であり、人生でその使命を果たす。

隣人の宗教は役立たず、私の宗教だけが本物だと言うのは馬鹿げている。価値というものは常に同じなので、もし隣人の宗教が役立たないならば、私のも役立たないことになる。

アメリカ原住民の宗教が盲目的崇拝だと言うのはおかしい。もしそうなら我々の宗教は盲目的崇拝だと、彼らもまた言う権利がある。我々が彼らをあざ笑うなら、彼らも我々をあざ笑うかもしれない。彼らは偶像を崇拝する、またはしていたと我々が言うのであれば、我々は偶像を崇拝していると彼らも言うかもしれない。

異教の名誉を汚せば、必ず自分の宗教の名誉も汚すことになる。原理は常に同じだからである。すべての宗教は同じ原理にもとづいている。

太陽の下、あらゆる宗教は生まれ、成長し、発達し、いろいろと分派し、死ぬ。いつもそうであったし、これからも常にそうであろう

宗教原理は決して死なない。宗教形態は死ぬかもしれないが、宗教原理つまり永遠なる価値は決して死なないのである。それらは存続し、新たな形態をとる。

湿気は水に内在するのと同じく、宗教は生命に内在する。

宗教心のない人々は本来、保守的、反動的である。宗教的な人間のみが『弁証法の革命』を達成する。

アイルランドの紛争のような宗教戦争を正当化する口実はない。ただ単に自分の宗教に属していないというだけで、他人を不信心者、異端者、異教徒と見なすのは馬鹿げている。

アフリカのジャングルのまんなかで食人種の前で聖職をつとめるまじない師（ブルホ）。ロンドン、パリ、ローマの首都大司教座聖堂で司式する、貴族であるキリスト

教の大司教。両者は同じ原理にもとづいており、ただ宗教形態が異なるだけである。

ガリラヤの聖なるラビ、イエスは全人類に真理の道と『弁証法の革命』を教えた。

真理はイエスに受肉したが、総合革命を成就するあらゆる人間に受肉するだろう。

宗教を研究すると、宗教の比較研究をすると、すべての宗教にキリスト崇拝が見られ、キリストの名前が異なるだけである。

ガリラヤの聖なるラビはゼウス、アポロ、クリシュナ、ケツァルコアトル、老子、伏羲—中国のキリスト—、仏陀などと同じ属性を持っている。

宗教の比較研究をするとき、驚きを隠せない。キリストを具現するこれらの宗教の聖人・聖者は全員、12月24日午前0時に生まれる。

これらの聖人・聖者は全員、無原罪懐胎の子である。彼らはみな聖霊の恩寵によって生まれ、産前も産時も産後も汚れなき無原罪の聖母に生まれる。^{22***}

崇拝すべき救世主イエス・キリストの母である貧しい無名のヘブライ人女性マリアは、女神イシス、ユノ、デメテル、ケレス、ベスタ、マイア、アドニア、インソベルタ、レア、キューベレ、トナンツィンなどと同じ属性と宇宙力を受けた。

これらの女神はみな、「宇宙的な永遠なる女性」、聖母を常に表す。

キリストは常に聖母の子であり、すべての聖なる宗教は聖母を崇拝する。

マリアは聖霊によって身ごもる。伝説によれば、第三ロゴスは鳩の形をとって、マリアの無原罪の胎内をはらませたという。

鳩はつねに男根の象徴である。ビーナスの従者のニンフ、ペリステラが愛によって鳩に変身したことを思い出そう。

中国人の間でキリストとは、聖書の恩寵によって奇跡的に生まれる中国のキリスト、伏羲である。

²² * 無原罪懐胎・・・聖母マリアがその母聖アンナの胎内に宿った瞬間から原罪を免れていたこと。

芙蓉世（ホアセ）という乙女は川土手を散歩していて、偉人の足跡の上に自分の足を置いた。そのとたんホアセは、すばらしい光に包まれる自分を見て感激し、胎内に子供を宿した。12年たち、陰暦10月4日の真夜中、伏羲が誕生した。懐妊した土手の川をしのんで、そのように名づけられた。

古代メキシコではキリストはケツアルコアトルである。彼はメシアで、トルテカ族の改革者であった。

ある日チマルマンが二人の姉妹といっしょに三人だけでいると、ひとりの天の使いが現れた。姉妹は天使を見ると、恐怖のあまり死んでしまった。自分が子をひとり宿すことを天使の口から聞いた瞬間、チマルマンは男の手を下さずにメキシコのキリスト、ケツアルコアトルを宿した。

日本人の間ではキリストは阿弥陀である。阿弥陀は至高の女神、天地大帝の前でとりなし、罪人全員のために懇願する。

神道の日本のキリスト、阿弥陀は極楽、楽園の扉を開く力を持っている。

ゲルマン民族のエッダは、その神統記の神キリストスを引きあいに出す。イエスとそっくりのこの神も、またオーディン、ウォータン、ベレノと同じく12月24日の真夜中に生まれた。

ヒンズー教のキリスト、クリシュナの福音を研究するとき、イエスと同じ福音を発見して驚く。けれどもクリシュナは、イエスより数世紀前に生まれたのである。

インドのおとめデバキは聖霊の恩寵によってクリシュナを宿した。神の子クリシュナはナンデンの家畜小屋に運ばれ、神々と天使はクリシュナを礼拝しにきた。その生涯、受難、死はイエスと似ている。

すべての宗教は研究するだけの価値がある。宗教の比較研究をとおして、すべての宗教は永遠なる価値を保存し、どの宗教も正しく、みな真実だということが理解できる。

すべての宗教は霊、天国、地獄などについて語っている。原理はつねに同じである。

ローマ人の間で地獄はアベルノであった。ギリシア人の間ではタルタロス、ヒンドスタン人の間ではアビーチ（阿鼻）などといった。ローマ人とギリシア人の間で天国はオリンポスであった。各宗教にはその天国がある。

ローマ人の宗教が終わったとき、それが退廃したとき、聖職者は占い師、人形遣いなどに落ちぶれたが、永遠なる原理は死なず、キリスト教という新しい宗教形態をまとった。

アウグル（ト占官）、ドルイド、フラーメン、ヒエロファント（秘儀司祭）、ディオニュシアン、サクリフィカートル（生贄を捧げる人）と呼ばれた異教の司祭は、キリスト教では聖職者、牧者、高位聖職者、教皇、塗油により聖別された者、神父、神学者などという神聖な称号に改名された。

巫女（シビュレ）、女神ベスタに仕える処女（ベスタル）、女ドルイド（ドルイデス）、女教皇（ポウプス）、奉仕女（ディーコネス）、ディオニュソスの巫女（マエナデス）、デルフォイの巫女（ピュトン）など。彼女たちはキリスト教では修練女、女子大修道院長（アビス）、律修修女、高位聖職者、修道女と呼ばれた。^{23***}

神、半神、巨神族、女神、女の空気の精、一つ目巨人（キュクロプス）、古代宗教の神々の使い。彼らには天使、大天使、熾天使、能天使、力天使、座天使などの名が改名された。

かつて神々が崇拝されていたなら、別名だが今でも崇拝されている宗教形態は歴史的時代と人種に応じて変わる。各人種は特別の宗教形態を必要としている。

民衆は宗教を必要としている。実際、宗教のない民衆はまちたく野蛮、残酷、無慈悲である。

²³ * 修練女：ノビス・修道誓願を立てていない見習い期にある彦遣会の一員。

* 律修修女：カノネス：修道誓願に拘束されないで、一定の規律の下に共同生活を送る修道女。

推理の第四単位

共産主義の狂信者は、神性の味わいのあるものすべてを死ぬほど嫌う。

宇宙のすべての問題を三次元的推理で解決できると唯物論の狂信者は信じているが、最悪なことに自分自身のことさえ知らない。

唯物論者の神のごとき物質は深い分析に持ちこたえない。今までマルクス弁証法の狂信者は、物質の存在を実証できないでいた。

前世紀を通じて、また 20 世紀の数年間にわたって、唯物論の狂信者は「物質とエネルギー」というもはや飽き飽きしうんざりするようなテーマについて議論し、時間を浪費してきた。

「エネルギー」と「物質」について多くのことが語られてきたが、あらゆる思索にもかかわらず、実際には未知の $X - Y$ のままである。で、それがどうだというのか。

この問題で面白いのは、有名な「唯物弁証法」の反動的な信奉者が、常にあることを別のことで定義しようとしてきた点にある。未知のもので未知のものを定義するのは確かにこっけいである。

哀れにも誘拐されたチベットの子供たちに、北京で次のような内容が教えられた。

「運動と呼ばれる変化が起こるもの、それが物質である。そして物質に起こる変化、それが運動である」。これは未知数の恒等式 $X = Y$, $Y = X$ に等しい。つまり無知で馬鹿げた循環論法なのである。

誰が形のない物質のかけらを、かつて手のひらに載せただろうか。誰がいかなる形にも束縛されない物質をかつて知っただろうか。誰が運動の概念にとらわれないエネルギーをかつて知っただろうか。物質それ自体、エネルギーそれ自体を誰が知っただろうか。

誰も「物質」を見たことがないし、誰も「エネルギー」を見たことがない。人間が知覚するのは現象、物、形態、像（イメージ）などにすぎないが、物の実体は決して見たことがない。

唯物論者はある現実の実体をすべてまったく知らず、教条的にそれを「物質」と呼ぶ。だが実際には木材、銅、黄金、石などしか見たことがない。

現実には、いわゆる「物質」は美、善、価値と同じくらい抽象的な概念なのである。唯物弁証法の狂信者は、物それ自体の実体、物の本来あるがままの姿を決して見たことがない。教条的に「物質」と呼ぶものを彼らが使っているのは否定しないし、ロバもまぐさの何たるかをを知らずにそれを食用に供するが、これは科学でも智慧でも何でもない。唯物弁証法の狂信者は、全人類をロバに変えたいのか。見たところから判断して、そうである。物それ自体を知ろうとしない者たちから、それ以上何を期待できようか。

芸術

人間が退化と墮落の遭をつき進むにつれ、唯物主義にますますなっていくにつれ、その感覚も低下墮落していった。

嗅覚の全般的な研究に専念していたバビロニアの学校が思い出される。彼らには次のようなひとつのモットーがあった。「酷寒作用の瞬間と熱分解作用の瞬間の間に起こる、匂いの微妙な変化のなかに真理を探究せよ」。

その学校は、とても恐ろしいひとりの宰相によって迫害され、荒廃した。その宰相は、きわめてうさん臭い仕事に従事していて、まもなく間接的に学校の加入者たちに告発された。

すばらしく発達した嗅覚をとおして、学校の生徒は宰相たちに都合の悪いことをいろいろ発見したのである。

バビロニアにはとても重要な学校がもうひとつあった。画家の学校である。「ただ白と黒の間の色調によってのみ真理を発見し、解明せよ」。これが学校のモットーであった。

当時、その学校のメンバーは、約 50 万色もの灰色の色調をふつうに楽々と使い分けられた。

バビロニア時代から奇跡的に我々の生きる悲しき今日にいたるまで、マルクスが弁証法という安っぽい詭弁をろうして我流で証明する唯物論のために、人間の感覚は驚くほど退化してきた

「我」は死後も生きのび、我々の子孫のなかに永久に生き続ける。そして唯物的な体験をつみ重ねて複雑になり、人間の能力と機能を犠牲にして強くなる。

「我」が数世紀をかけて強くなるにつれ、人間の能力と機能はますます退化していった。

聖なる舞踊は、ある超越的、宇宙的知識を意図的に伝達する、情報提供の真実の書物であった。

踊るダルビッシュは、生体の相互に均整のとれた「七つの誘惑」を知っていた。

古代の舞踊家は身体の独立した七つの部分を知っていて、運動の七つの異なったラインを熟知していた。連動の七つのラインのそれぞれが、七つの動的な集中点を持っていることを、神聖舞踊家はよく知っていた。

このことがみな、踊る原子と宇宙的重心のまわりを踊る巨大惑星に結晶していることを、バビロニア、ギリシア、エジプトの舞踊家は知っていた。

太陽のまわりをまわる七つの太陽系惑星の全運行を完璧にまねる機械を発明できたら、舞踊家ダダルビッシュの秘密を発見して驚くだろう。事実、彼らは太陽の周囲をまわる惑星の全運行を完璧にまねているのである。

エジプト、バビロニア、ギリシア時代などの神聖舞踊はさらに進歩し、とてつもない宇宙的真理、人類発生的真理、心理生物学的真理、数学的真理などを伝えた。

バビロニアに無神論、懐疑論、唯物論の芽生えが現れはじめたとき、五感の退化がおそろしく加速した。

我々は自ら考えるところのものであり、もし唯物論者として考えるなら退化して時代遅れとなる。このことは完全に証明済みである。

マルクスは許しがたい罪を犯し、人類から精神的な価値を奪った。マルクス主義は心おきなく宗教迫害ができるようにし、人類を完全な墮落に追いやった。

マルクス主義の、唯物論の思想は学校や家庭、神殿やオフィスなど、いたるところに浸透した。

新世代のそれぞれの芸術家は、唯物弁証法のまったくの支持者となってしまった。霊性の息吹はことごとく超現代的芸術から消え去った。

もはや現代の芸術家は七の法則、コスミックドラマ、古代の神秘の神聖舞踊について何ひとつ知らない。

闇の住人は劇場と舞台を奪い、卑劣にもそれを冒涇し、完全に汚してしまった。

劇場の日、密議の日である土曜日は、古代の神殿ではとても人気だった。そのときすばらしい宇宙ドラマが上演されていた。

ドラマは貴重な知識をイニシエイト（密議参加者）に伝えるのに役立った。ドラマによって本質的存在のいろいろな体験とさまざまな表現が、イニシエイトに伝達された。

数あるドラマのなかで最古のものは、宇宙のキリストのドラマである。本当に超人の王国を熱望するなら、我々ひとりひとりがそのドラマのキリストにならねばならないことを、イニシエイトは熟知していた。

宇宙のドラマは七の法則に基づいている。ネオファイト（新参加者）に超越的知識を伝えるために、この法則から賢明に逸脱するという方法が常用された。

音楽ではよく知られているが、ある音は思考センターに喜びをもたらさう。また感情センターに悲しみをもたらさうの音があれば、運動センターに信仰心をもたらさうの音もある。

三つの脳を用いてはじめて総合的な知識が獲得できることを実際に、年老いた秘儀司祭は知っていた。ひとつの脳だけでは完全な情報は得られない。^{24***}

²⁴ * 頭蓋骨にしまいこまれた第一の脳は思考センター。背骨に対応する第二の脳は運動センター。交感神経叢からなる第三の脳は感情センターである。

音楽とうまく結びついた聖なる舞踊と宇宙のドラマは、宇宙発生的、心理生物学的、物理化学的、形而上学的等のたぐいの、とてつもない古代知識をネオファイトに伝えるのに役立った。

かつては壮大であった彫刻にも、ここでふれることができる。かたい岩に彫られた寓意的な像から、年をとったマスターたちが七の法則を知っていたことがわかる。

エジプトのギザのスフィンクスを思い出そう。自然の四大要素と超人の四つの基本的条件を、スフィンクスは我々に語りかける。

第二次世界大戦後、実存哲学と実存主義芸術が生まれた。舞台に立った実存主義の役者を見ると、彼らこそ熱狂的な倒錯した患者に他ならないという結論に達した。

マルクス主義が広がりつづけるなら、結局、人類は退化しつつある五感をまったく失うことだろう。

心の価値が足りないために墮落することは観察と経験から証明済みである。

現代絵画、音楽、彫刻、ドラマなどは単なる墮落の産物にすぎない。

昔のイニシエイト、神聖舞踊家、偉大なる時代の正真正銘の芸術家は、もはや舞台には登場しない。今登場するのは病気のロボット、墮落した歌手、理由なき反抗者などだけである。

超現代的劇場はエジプト、ギリシア、インドなどの大密議の神聖劇場とは反対のものである。

今日の芸術は闇のもので、光とは反対のものであり、現代の芸術家は闇にみちている。

超現実主義、マルクス主義の絵画、超現代的な彫刻、アフロキューバン（キューバ黒人）音楽、モダンバレリーナ。それらは人間の墮落の産物である。

新世代の少年少女は、詐欺師、泥棒、人殺し、盗賊、同性愛者、娼婦などになるのに十分な情報を、退廃した三つの脳で受け取る。

誰も悪い芸術を終わらせることは何もせず、『弁証法の革命』の欠如のため、すべてが最終的な破局に向かっている。

唯物論的科学

あるとき、生ける永遠なる神の敵、唯物主義的な無神論者と宗教家が論争した。論題は、卵と雌鶏どちらが先か、であった。一方が「もちろん卵さ」。「よろしい、卵としよう。で、誰が卵を置いたのか？ そう雌鶏だ」。他方が「雌鶏だ」。「では雌鶏はどこかた来たのか？ もちろん卵から」。こうして、いつ終わることなく話は続いた。

とうとう、少しじれったくなり、宗教家は「神がしたように卵がつくれるのかい？」唯物論者は答えて「きつとつくってみせるさ！」。宗教家は大声で「つくってごらんよ」。唯物論者は、鶏卵と似たような卵を一個つくりあげた。卵の黄身、白身、殻。これを見て、宗教家は語った「驚くべき卵をつくったから、ひよこが生まれるだろう。ひよこがかえるように卵を孵卵器に置こう」。「わかった」。唯物論者はこう言うと、卵を孵卵器に置いたが、ひよこはかえらなかった...

『プラズマ発生論』の著者である学者のアルフォンソ・エレラ氏は何とか細胞を創造したが、命のない死んだ細胞であった。

接ぎ木がなされる。知ったかぶりをする学者は自然を改めようとして、たぶん実を改良するために、ある枝を別の植物の幹に接ぐ。彼らの行いは馬鹿げている。接ぎ木は、大宇宙の自然の生命力と同じものをもたらしてくれない。雑種の実を体内に摂取すると、エネルギー的な見地から人体を損なう。

だが学者は実験に満足している。木はそれぞれエネルギーを吸収して変換し、実に再び伝達することがわからないのである。木が変質する際に大宇宙のエネルギーも変質し、もはやその実は同一ではなく、人体に有害な姦通の産物なのである。

しかし唯物論的科学者は、実際には知らないときに自分は知っていると感じるものである。知らないだけでなく、なお悪いことに、知らないことを知らないのである。

学者は人工受精を行い、生命を与える細胞である有名な精子を人体から取り出す。それゆえ、生命を創造していると今では考えている。自然がすでにつくったものをただ単に利用していることに、学者は気づいていない。

精子と卵子の製造に必要な化学成分を研究室の議題にしよう。卵子と精子をつくるよう科学者に言おう。つくれるのか？私はイエスと言う。だが生命を与えられるのか？生物が誕生できるのか？生命の創造のしかたを知らないため絶対に無理である。では、どんな証拠があって、高等な知性あるいは創造する知性を科学者は否定するのか？木の種、芽を出しうる種を創造することすらできないのに。

創造する知性を唯物論者が否定する根拠は？なぜ永遠不滅の神に異議を唱えるのか？

唯物論の科学者は生命を創造できたのか？いつ？

自然がすでにつくったものと戯れるのは簡単なことだが、生命をつくるのはそれとは別問題である。科学者は誰ひとりとして生命をつくれない…。

一個のアメーバを二つに分裂させ、研究室の机の上でそれをばらばらにし、微生物の別の断片とそれを結合させて、「これだ！これだ！これだ！生命を創造しているぞ！」と科学者は言う。だが一個のアメーバを科学者は創造できない。その唯物論者の科学はどこにあるというのか？神に取って代われることを科学者はいつ立証できたのか？実は、科学者は知らないだけでなく、なお悪いことに、知らないということを知らないのである。その事実は重要であり、今まで科学者はそのことを立証したことがない。

人はサルが進化したものと言われる。しっぽのあるヒヒ、しっぽのないサル、ピテコイドの子孫で樹上に住む人間などの理論を科学者は持ち出す。しかし、その場合、ミッシング・リンクとはどのようなものなのだろう？発見されたのか？いつ、どこで？言葉を与えられて話せるサルが、いつ発見されたのか？現在までそんなサルは現れていない。これらの唯物論者は馬鹿げており、事実ではなく推測を述べている。^{25***}

²⁵ * ミッシング・リンク…失われた環。系統的に類人猿と人間の間をつなぐと推定されながら、その化石が発見されていない動物。

クモザルのなかで最高のサルの脳の体積を測定して、たとえばオーストラリアの部族に見られる発達の遅れた人間の脳と比較してみよう。そのクモザルが言語を話す能力すら獲得しないのは明白である。

それでは唯物論者は、ダーウィンとその信奉者の理論を論破していないのか？人間はクモザルが進化したものなのか？どんな根拠にもとづいて唯物論者は、それを支持するのか？どうやって立証するのか？いつまで仮説のミッシング・リンクを待つつもりなのか？人のように話すクモザルの一種を見たいものである。そんなクモザルはまだ現れていないし、それなら現実性の欠けたくだらない推測である。

どうして知らないとを話すのか？どうして安っぽいユートピアがこれほど語られるのか？ただ単に意識が眠りこけているから、自分自身の内面で心理革命を実行することに興味をもったことがないから、性の超力学の実践が欠けているからである。要するに催眠術にかかっており、これが赤裸々な現実なのである。

『弁証法の革命』の教えを実践しない者は、唯物論的科学家と同じ間違いを犯すだろう。

唯物論的な科学家は、たえず多くの理論をつくり出す。例として「種の淘汰」の理論を引き合いに出そう。つまらない軟体動物が進化していき、そこから自然淘汰の過程によって別の生命の種が生まれ、ついには人に至る。この理論は証明できるのか？もちろん不可能である！

ひとつひとつの種に何らかの淘汰過程の存在することは否定しない。たとえば決まった季節に移動する渡り鳥がある。鳥が集団で移動する様を見て驚いてしまうが、なんと不思議なんだろう。それから飛び立って大洋を横断し、戦いに生き残るものとも丈夫なものを除いて、途中で死んでしまう。戦いに生き残るものは、子孫にその特徴を伝える。そのように淘汰の法則がはたらく。

たえまなく海洋生物と戦う種があり、幾多の戦いのおかげで強くなって、子孫にその特徴を伝える。

幾多の戦いのおかげでますます強くなっていき、子孫にその心理的特徴を伝える獣がある。かつて自然淘汰によって生存のスクリーンに登場できた新種はない。しかし、創造者の特徴を「淘汰」に与えた者は大勢いる。

「原形質」についてもいろいろなことが言われてきた。原形質が塩分を含んだ海につかってから、数えきれないほどの年月がたつ。普遍的な生命はその原形質に由来する。

まちがって人間と呼ばれる知的動物の心理的発達、原形質の分子の発達によるもので、その発達過程と同時進行する。唯物論者は、自分のように無知な信奉者にそう信じこませる。

意識（どう呼ばれようとも）は数世紀をとおして原形質が発達した結果であることを、唯物論者は望む。知識のかがみである彼らは、そのように考える。

「ヘッケルの原子のモネロン（すべての生命が生じる源である、そこ、水の深淵の中につかった原子）」が思い出される。ヘッケルとその信奉者はそのように考える。

「さまざまな宇宙的、普遍的過程をへずに、複雑なことは組織されたことがない」。

実際のところ、科学者は生と死について何も知らず、我々がどこから来てどこへ行くのか知らず、それどころか我々の存在の目的すら知らない。どうしてか？ただ単に意識が眠っているから、内面の『弁証法の革命』を実現していないから、本書で教える総合革命の欠如のため大規模な集団催眠のレベルにあるからである。

唯物論的な科学はまちがった道を進み、人間の起源どころか内的な心理学さえ知らないありさまである。

自然淘汰の法則が存在してきたことは否定しないが、その法則は新しいものを何も創造していない。種が時の流れとともに変化するのは否定しないが、「最初の原型」が物質界で形をとってから、種の変異性という要素が働きだすにすぎない。生命のどんな種でもその最初の原型は、あらかじめ心理空間で、自然の高次元で発達する。唯物論的な科学者は高次元を知覚しないので、その存在を否定する。心理的に催眠術にかかっているので知覚しないのである。

まず催眠状態から抜け出してから話したら、彼らの考えは違っていただろう。だが、マインドと性の力学が欠けているために眠りこけている。

人の起源について知りたいなら、個体発生を観察せねばならない。個体発生は系統発生を要約である。^{26***}

人類学のなかで個体発生とは何なのか？子宮内での胎児の発達過程のことをいう。母親の妊娠過程を観察すれば、個体発生は系統発生を要約してくり返すことが証明できる。これは、同時に、人類が長い年月をかけて経てきた進化と変化の状態でもある。

個体発生は母胎内でこの状態を要約してくり返す。個体発生を分析すれば、人の種と他の動物の種の起源は似ていて、心理空間からやって来たという論理的結論に達する。

しかし、どんな種であれ、いったん種が物理的に形をとった後に、はじめて、人類に変異をもたらす自然淘汰、さまざまな変化や要素が働きだすにすぎない。物理的に形をとる前に、ヘッケルやダーウィンのような科学者やその信奉者には知られていない（実際、人類の起源について何も知らないからである）「心理的な進化過程」が、自然の生きたふところの中に存在する。

いろいろな種類の生命の種には何らかの変異が存在すると、なぜ唯物論の学者は言えるのか？偶然によるものであれ、自然発生的なものであれ、矛盾は生じないのだろうか？

この宇宙は力と物質と必要性から生じた、と言うのは彼ら自身ではないのか？なぜ矛盾することを言い、後で力と必要性から生じた宇宙における自然発生的な変異について語るのか？そんなことがありえるのか？

力と物質と必要性から生じた宇宙は、自然発生的な変異も偶然の変異も許さない。それらの種の変異は、彼ら自身の知らない理由によって存在する。唯物論的な科学は知らないだけでなく、なお悪いことに、知らないということを知らない。

²⁶ * 系統発生・・・生物の種が、地質時代を経て現在にいたるまでの間に少しずつ変化し、進化してきた過程「個体発生は系統発生をくり返す」とドイツの動物学者ヘッケルが主張したことから発生した概念。

心理分析的ノース人類学は、過去を徹底的に調べる。今日地上に住む人類は、まちがって人間と呼ばれる知的動物の人種にすぎない。お望みなら腹を立てるのは構わないが、この知的動物の人種が存在する以前、レムリア人、ヒュペルボレオス人（ハイパーボーリアン人）、ポーラー人が存在した。知的動物はアトランティスから起こり、アトランティスに誕生した。レムリアの真人は最後の時、この世の舞台から引きあげていった。彼らは身体を放棄して、それを動物界の高等な成分にしていたのである。^{27***}

知的動物の人種に先立って、レムリア大陸、ヒュペルボレオス大陸、当時は赤道地帯に位置していた北極の氷冠に人類の人種が存在した。心理分析的なノース人類学が、これを断言する根拠は何か？なぜそう主張するのか？古代エジプト、インカ、マヤ、ギリシア、インド、ペルシア、チベットなどの文献にあるすべての伝承だけでなく、心理的革命によって意識をなんとか目覚めさせた覚者の直接の調査研究にも基づいている。

意識の覚醒に必要な全システムを本書を通じて伝えているが、読者が「覚醒」するとき、私が声高に述べていることを自分で調査し、確かめることができよう。しかし、触り、見、聞き、感じ、ヘッケル、ダーウィン、ハクスリーのような科学者とその信奉者の理論の犠牲者にならないためには覚醒する必要がある。

三つの人種が存在したが、読者の意識が眠っている際に、どうしてそれを知ることができよう。どうにか覚醒できた者は、自然のアカシック・レコードで調査研究できるだろう。

最初の人種はどのようなものだったのか？どのように存在していたのか？我々が行った調査研究によれば、およそ3億年前のそのころ、原形質の人類が存在し、地球そのものはまだ原形質であった。

それはヘッケルのいうあの原形質ではなく、塩分を含んだ海でもなく、また何の確証もない無数のたわごとでもない。違うのである。原形質人種はそれとは異なっている。

²⁷ * ポーラー人：「ポーラー」は「極地の」という意。

人類は空中に浮遊していて、じとじとの地面に落ちることさえなかった。その生殖方法と起源は？ その人種は自然と宇宙の高次元で進化し退化した。ついには数々の進化過程の後、地上（地球もやはり原形質であった）で形をとり、カオス（混沌）に、マグヌス・リンブス（大いなる境界、太極）に、世界のヒュリアステル（原物質）に位置する原始の胚から誕生した。その人種が形をとったとき顔と核を形成したが、巨大な姿にも数学的点にもなることができた。

私がこう断言する根拠は何か？ 覚醒した意識である！ まちがないのか？ そして輪廻転生である！ そして、もし読者が転生の教義を受け入れるなら、なおさら結構である。明らかに私はその原形質人種に生まれ変わったが、私は覚醒しているので、原形質人種の進化と退化の過程を忘れられない。それゆえ読者が眠っているのを知りながら、読者の前で証拠を示すが、少しずつ覚醒していくのに必要な全資料を提供せねばならない。

あの原形質人種はどのように繁殖していたのか？ どのように生殖していたのか？ マスター・ブラバツキーが言っていたような方法ではなかった。最初の人種は無性生殖で、そのための性は必要ではなかったからである。第三ロゴスの創造エネルギー、マハーチョハンは、かつて存在したもの、将来存在するであろうものすべてに、抗しがたいほど湧き出るので、そのような主張はまちがっている。生殖の種類は分裂で、異なった性で表現していて、生きた細胞が分裂するように有機体は分裂していた。生物学を学ぶ生徒は、有機体の細胞が分裂するしかたをよく知っている。一片の核をもつ細胞質は分裂するが、そのことは無視される。

そのとき以来、分裂の過程は血に残り、ずっと我々の細胞に数百万単位で起こっている。それは真実ではない？ 誰があえて否定するのか？ 私は事実を述べている！ その細胞の過程に原因、起源がないとでも、もしかしたら考えているのか？ もし読者がそのように考えているのなら、見当違いだろう。結果のない原因も、原因のない結果もないのだから。そのようにして我々は分裂の過程を受け継いだ。誰から？ 第一人種の人類から。

分裂を終えて自由になった有機体は、周囲の環境の原形質を獲得し、集めつづけることにより、発達し続けることができた。

その後、フリードリッヒ・ニーチェの語るヒュペルボレオス人が出現した。北極を取り巻く馬蹄形地域、極北の国に住んでいた。まちがないのか？ イエスかノーか？読者は眠っているので不確かだが、私は覚醒しているので私には絶対まちがないことである。このことを否定するって？ 私は否定しない！私を気違いだと考えるなら、そう考えるといいが、私はどんな犠牲を払ってでも証言せねばならないし、つねに真実を言わねばならない。^{28***}

ヒュペルボレオス人もまた存在したが、もはや原形質人種ほどゼラチン状ではなかった。今はヘッケルの塩海の霊細胞について述べているのでも、有名な原子のモノロンについて述べているのでもない。それは馬鹿げた理論を説くヘッケルとその信奉者に任せよう。

さて、原形質人種から生じた、そのヒュペルボレオス人種に声高にふれたい。よりサイキックな人種で、発芽というしかたでの性行為で生殖した。読者は荒れ模様の大洋の断崖でサンゴを見たことがあるか？ あるサンゴから別のサンゴが生じ、さらにそのサンゴから別のが生じる。発芽によって繁殖しつづける植物があるが、ヒュペルボレオス人種にもこれが起こった。父一母に現れた、ある芽が性力を操作して、しまいにはその芽が取れ、一人の新たな赤子を生み出した。そのようにしてヒュペルボレオス人種は生殖をした。

最後に、ヒュペルボレオス人種は、この豊かな自然の無数の年月の進化と退化をとおして、荒れた太平洋の底に沈んでいった。

のちに、海底から、太平洋全体を覆いつくす巨大なレムリア大陸が現れた。はじめて人類が堅い地殻の上に立ったのはその地であった。レムリア大陸の出現は、エピクロスのような学者とその信奉者が考えているように自然に起こったのではなく、自然選択によるものでもない。自然選択は、創造神に格上げされた理論であり、く

²⁸ * ヒュペルボレオス Hyperborean…ギリシア神話では北風ボレアスを吹き起こす山のかなたにいてと考えられた、アポロンを崇拝する北方種族。病気、労働、災いのなとこはるい常春の国に住むという。

だらないもので出来た驚くべき巧言である。なぜレムリア大陸は出現したのか？
どのようにして？^{29***}

ヒュペルボレオス人種の人体が物質化した際、堅い形態をとり、メキシコ、イダルゴ州、トゥーラの巨人像に象徴されるようなレムリア人種の半陰陽（ハーマフロダイト）が現れ、地表を歩いた。はじめの頃、卵細胞を有機体から分離して生殖していたが、卵細胞が成長して新たな人間が産まれた。その時代、男根と子宮はまだ形成されず、リンガムとヨニは発達途上にあり、卵巢は未発達であった。

レムリアで時は流れ、無性芽（芽生）生殖による方法がうまれた。当時、その方法は驚くべきものであった。受精させる細胞つまり精子を卵巢は受けとめ、こうして卵子が半陰陽の卵巢から離れときには、すでに受精はすんでいた。

受精後まもなく卵が産まれ、そこから新たな赤子がかえった。それゆえナウワ族は「第三の太陽の子供達は鳥に変身した」と言っていたのである。古代ナウワ文化の名言である。

第8章

死者のパーソナリティーと量子論

原子のきらめきは量子と呼ばれる束になったエネルギーによるものである。

ダイヤモンドでは量子は空気、水、土のなかで次第に減速しながら、その半分の速度で運動する。

原子とは、そのタイプにより固有の速度で波動を生じる振動計のようなものである。

死者の感情的な愛着、執着によって量子は減速するので、死者のパーソナリティーは生きている人の網膜にとらえられやすい。その場合、死人のパーソナリティーは手で触れられる。

²⁹ * エピクロス 前 342 頃－271 頃…古代ギリシアの哲学者。エピクロス学派の祖。人生の目的である真の快樂は、苦痛・恐怖・混乱から解放された平静な心境（アトラクシア）にある、という快樂主義を唱えた。

ガルシア・ペニャのケース

ある日、私はメキシコシティのカジェ・シンコ・デ・マジヨで旧友と会い、手をふって挨拶をし、立ち去った。数日後、友人の親戚に会ったが、驚いたことに、私が挨拶をしたあのガルシア・ペニャ氏は二ヵ月前亡くなったと語った。疑いもなく、我々の生きるこの世に未練を残したこの友人のパーソナリティーは、姿を現して、機械的な習慣をくり返したのである。

エネルギー的、原子的なパーソナリティーと固有の振動数をもつ量子の間に、密接な関係があるのは疑いない。この三次元世界への感情的な愛着、執着のため、たいてい死者は、パーソナリティーの量子の振動を無意識に低下させ、そのパーソナリティーは触知、知覚できるようになる。量子は速くても遅くても知覚されない。ふつう量子は、光速でぐるぐる円を描いて運動する。

時間の秘密は原子に隠されている。時間の概念は否定的である。誰も時間の速度を証明できず、実験室に閉じ込めることができない。

時間の概念は出来事と出来事の間に設定される。その証拠に大量のいろいろなカレンダーがある。

量子を減速させるのは、ある瞬間における我々の態度である。交霊会では同じ量子現象が起こる。

宇宙のプロセスは永遠の今に実現する。日出と日没は永遠の中間に実現する。

我々自身の考え方を展開していくべきである。エネルギー的な見地から我々ひとりひとは、ある価値（ポジティブであれネガティブであれ）の乗り物として機能する数学的点である。

エゴを絶滅させた人のイメージ（像）、価値、アイデンティティーはポジティブである。死を引き算（の残り）と考えねばならない。

再合体

再合体とは、価値が数学的点に絶まもなく合体するのを説明する新しい原理である。

エネルギーは不滅である。量子は破壊できないと思うが、きっと変換はできる。心理革命を願う者はみな、量子現象について考案すべきである。セルフコンセプト（自己概念）と本質的存在の明白なセルフリフレクション（自省）をそこから引き出すためである。

身をもってマインド力学を生きる者、マインド力学によってマインドを解放した者は、量子研究を行える。

超規律

「超規律」と肉体の完成・改善は、自然療法医学によって達成される。

「超規律」があるとき、考古学上の資料から直接、知識が得られるのは明らかである。

「超規律」を課すことにより、思いのまま人生を学校とみなさねばならないことを理解し、そのことを受け入れるだろう。

「超規律」に従う者には、偉大なる勝利が待ち受けているだろう。

「超規律」を生きる者は、「道の途上での孤独」に耐えるために、強くならねばならないだろう。

明白な自省

明白な「自省」を理解するためには、大作業で、『弁証法の革命』で働く者のためにある『聖ヤコブの手紙』を研究する必要がある。

大いなる業と心理的ワークを「信仰」によって支えないといけない。「信仰」は行いに表れるからである。

舌を制しうる者は、身体と他人を意のままに動かすので、大作業と心理的ワークで進歩向上していくだろう。

これらの心理的教えの実践で進歩するにつれて、「うぬぼれ屋（自慢家）」になるような別の心理的誤りに陥るのを避けねばならない。同様に、大作業と「明白な自省」で勝利するために、「生意気（でしゃばり）」になってはならない。

第9章

錬金術師、カバリスト、心理学者はみな「信仰」を持つべきである。「信仰」は経験的なものではなく、培わねばならない。「自分自身を研究し、自分自身で体験することで培われる」。

神秘

ダルマバーラ（護法）は、中国共産党員の唯物的な非行に対して立ち上がった、恐るべき力の主たちである。

チベットで偉大な物事が始まるので、私は個人的にこの聖地にいるだろう。中国人が残した忌まわしい痕跡を排除するために、私はチベット人を助けているだろう。

シャングリラは、四次元にあるジン状態の都市である。そこには尊敬すべきマスター・クートフーミがいる。

チベットはエジプトにそっくりで、僧たちはミイラのくり方を知っている。かつてチベットの僧たちは、ラマ教僧院のある火山の噴火口にミイラを運んだ。

私がチベットのラマ僧だと述べることに、いかなる恐れもない。どうしてあちこちに私がいるのかと、読者はいぶかるだろう。同時にいたる所に存在する特別の能力によって、これは可能である。

確かに目下のところ私はアーディタットバ溪谷にいて、同時にここメキシコにもいる。この溪谷で聖なる行進が行われる。僧院は溪谷の右側にある。以前、僧院は三次元にあったが、今では四次元に浸透した。建物内部には客観的な仕事が行われる

大広間がいくつかある。ラマ僧として私は、仕事をする小さな部屋をあてがわれている。僧院の中庭にはダルマパーラたちが集まる。

教団は 201 人のメンバーからなる。幕僚は 72 人のバラモンからなる。この教団は人類の運命を決定する。

チベットはいつもイギリス人と中国人に侵略されてきたが、侵略者はいつもダルマパーラたちの恐るべき力によって、そこから去らねばならなかった。

アバターラ

アバターラたちは社会問題を忘れることができないので、ケツアルコアトルは社会面と心理面という二つの側面で現れた。^{30***}

私個人の場合、私が関心を寄せたのは、「弁証法的なやり方での意識革命」によって解決に導かれる「人間的問題」。「ポスクラ」POSCLA〔未詳〕によって解決をねらう「資本問題と労働問題」という二つの側面である。

体験：「彼らは諸問題を象徴する槍を一本彼に手渡し、秘密の至聖に入らせたが、そこで総大司教の聖アウグスティヌスに会った。総大司教は本棚から厚い本を一冊取り出し、『火をかきたてるマントラを教えよう』と言った。絶大司教は本を開いた。…。火ばちに火をつけた…。「ム」(M) のマントラを発音して、火をかきたてた。彼が去ったとき、炎をかきたてるためのマントラの唱え方を覚えた。

総大司教の聖アウグスティヌスは、聖職者の祭服をまとして神殿の祭壇の前にもどり、マスター・サマエルもどうお湯だった…。彼らは右手にフライパンを持っていた…。『君は牛耳る（取りしきる）！』と、まるで言っているかのように。^{31***}

彼らは大きなチェーンをつくった…。

³⁰ * ケツアルコアトル…プラトン哲学のロゴス、完全なる複合統一、キリスト。かつて存在したもの、存在するであろうものすべてで表現される。895 年に生まれたメキシコのキリストで、羽毛のある蛇で表される。(『ノース秘教事典』)

³¹ * スペイン語原文 tener la sarten agarrada en su mango (「牛耳る」) の文字通りの意味は「柄をつかんでフライパンを持つ」。

ー『我らはこの偉大な戦いをすべて形作って、君といっしょに歩むだろう』と彼らは言った。それで、白友愛結社は彼といっしょに歩む...」。

「あいにく、心理的解放をもたらすために私が何十年間も提供してきた教えを、ノースの兄弟姉妹は研究せず、それを生きなかった。彼ら自身が、白友愛結社の大作業を怠けることを望んだのである...」。

革命的心理学とポスクラの鍵を手渡すにあたって、我々は高位にのぼりたいとも、国家予算で食べていきたいとも思わない。知的動物が総合革命を達成するために、私自身が体験してきた心理学的な模範を示して、人類に役立ち、人類に奉仕することーそれが我々の唯一の望みである...。

アバターラの使命は宗教問題だけでなく、諸国民の「政治的、心理的」問題にまで及ぶ。

個人と社会

社会は個人を延長したものである。もし個人が強欲、残酷、無慈悲、利己的などであるなら、社会もそうであろう。自分自身に正直になる必要がある。我々ひとりひとりが堕落しているために、社会は必然的に堕落せねばならない。唯物主義という恐ろしい怪物にこれは解決できず、ただ個人が総合革命をよって解決できるにすぎない。

我々自身の運命をじっくり考えるときが来た。暴力は何も解決しない。せいぜい失敗するのがおちである。我々に必要なのは平和、冷静、反省（熟考）、理解である。

世界の問題は個人の問題である。流血革命は何も解決しない。ただ知性によってのみ、意識がぴんづめにされているという問題を解決できるだろう。

ただ知性によってのみ、知的動物をまず人間に変え、それから超人に変えることができる。ただ『弁証法の革命』によってのみ、唯物主義という恐ろしい怪物に勝つことができる。

人間社会は個人の延長である。もし本当に根本的な変化を望むなら、よりよい世界を望むなら、個人的に変わり、我々自身の内側で変わり、世界に悲惨と苦悩をもた

らす忌まわしい要素を我々自身の個性のなかで変化させる必要がある。大衆は個人の総体である。各個人が変われば、大衆は必然的に変わらざるをえないだろう。

利己主義を断ち切り、キリスト中心主義をつちかうのは緊急に必要であり、そうしてはじめて、よりよい世界をつくることができる。我々ひとりひとりの内面に宿る、強欲と残酷さを排除するのは不可欠である。そのようにしてのみ、個人を変えることで、社会は変わるだろう。社会は個人の延長にすぎないからである。

苦悩、飢え、混乱があるけれども、ばかげた暴力的手段では何もおさまらない。血と酒の革命、クーデターと銃殺によって世界を変革しようとする者は、完全にまちがっている。暴力はさらなる暴力を生みだし、憎しみはさらなる憎しみを生み出すからである。人類の問題を解決したいというのであれば、平和が必要となる。

闇は棒で殴りつけても無神論でも壊滅しないが、光を当てることにより消えうせる。同様に、格闘しても誤りはなくならないが、誤りを攻撃しなくても真実を広めることで誤りはなくなる。真実が前進するぶんだけ、誤りは後退するはずである。ネガティブなものに抵抗する必要はなく、無条件にポジティブなことを実践し、実践をとおしてその利益と強みを数える必要がある。誤りを攻撃すれば、誤りを犯す人の憎しみをかうだろう。必要なのは闇を払うために、『弁証法の革命』の光を広めることである。

マルクス弁証法の基本原理を分析して、これらの原理が深い分析にたえない、まったくの安っぽい詭弁であるという大変な真実を世界に証明するのは急を要する。

闇をうち負かしたいなら光をつくろう。血を流すのはやめよう。話のわかる人になるときがきた。

本当に隣人を愛したいというのなら、自分自身の「我」を研究する必要がある。

我々ひとりひとりの内面に宿る、利己主義と残酷さの要素をただ排除することによってのみ、より良い世界、飢えと恐怖のない世界をつくることができる—このことを理解するのは不可欠である。

社会は個人である。世界は個人である。個人が根本的に変われば世界は必然的に変わるだろう。

意識は重大な危機に瀕しており、ただ個人として抜本的に変わることによってのみ、自らを救い、人類を救えるにすぎない。

意識へ

ねむれる意識よ...

目をさませば、その変わりようはいかほどか...

しあわせの七つの道を知り汝の愛の光は、いたるところで輝き鳥たちは汝の森の神秘のなかで楽しみ魂の光はきらめき、そして喜んでエレメンタル（精霊）たちはうた汝のために詩うであろう、声をそろえて

悟り

『弁証法の革命』の教えをきちんと実践しなさい。今この瞬間から、読者の総合革命をはじめなさい。時間を自分自身に費やしなさい。内側にその恐ろしい「我」をもって、今のまま生きる読者は失敗者だから。

すべてのマインドレベルで根本的に死ぬ決心を、私は読者にしてもらいたい。意のままに幽体離脱できないと不平を言う人々が多くいる。意識を覚醒させるとき、幽体離脱は問題ではなくなる。眠りこけた人間は何の役にも立たない！

本書『弁証法の革命』で私は、意識覚醒に必要な科学を提供した。新聞のように本書を読むという過ちを犯してはならない。何年も本書を深く研究し、生き、実行に移しなさい。

悟れないと訴える人々に、私は忍耐と平静心をもつように忠告する。複数の「我」を溶解するとき、本当に 49 の潜在意識レベルで死んだとき、悟りは我々のもとにやってくる。

神秘的な力をたまらなく欲しがっている者、女性を誘惑するための口実として性ヨガを利用する者は、完全にまちがっており、普遍的ノーシス主義の目的と規律に反している。

きちんと徹底的に意識革命の三要素で働きなさい。姦通、姦淫という過ちを犯してはならない。移り気な心を捨てなさい。花から花へと、スクールからスクールへと渡り歩いて生きる者、彼らは実際のところ、奈落と第二の死の確実な候補者である。

「自己正当化」と「自己配慮（自己憐憫）」をやめなさい。本当に根本的に死にたいならば、自分自身の敵になりなさい。ただそのようにしてのみ悟りに達するだろう。

ミトマニア「原点のゼロ」から始めよう。神秘的プライド、誇張症、自分には超洞察力があると考える性癖を捨てなさい。君たち全員は、生という罰を処された知的動物にすぎない。^{32***}

ありのままの現実の自分を知ることができるよう、自分自身を詳しく調べるのは緊急で、後回しにはできない。

悟りに達するために謙虚になり、悟りに達した後は、なおいっそう謙虚になりなさい。

³² * 誇張症 mythomania…虚言症。うそをついたり、誇大に言う病的な性癖。『革命的心理学』参照。